

# 久宝寺遺跡

第77次調査

-寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター  
防火水槽外築造工事(H22-1)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

2012年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

# 久宝寺遺跡

## 第77次調査

－寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター  
防火水槽外築造工事(H22-1)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－



2012年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

大阪府の東部を画する八尾市は、東に緑豊かな自然を残す生駒山地西麓部と、その西側に広がる河内平野の中心部に位置します。このような地形環境を有する本市の歴史は古く、市域の南端に所在する八尾南遺跡では、旧石器時代に遡る遺物の出土が知られています。一方、市域の大部分を占める平野部では、今から2300年前の弥生時代前期から、水田経営を基盤とした集団の生活の痕跡が散見され始めます。以後各時代を生きた先人たちは、度重なる洪水の危険に怯えながらも、それに立ち向かい、この肥沃な土壌を手放すことはありませんでした。近世に至るまで、連縄と集団生活の痕跡が残されているのはそのためです。近年は、旧国鉄竜華操車場跡地において大規模な都市開発が進行しているほか、市民の保健・衛生の向上を図る為、公共下水道の普及にも力を注ぎ、自然と都市型空間との共存を図りながら、今尚発展をし続けています。

この度、平成22・23年度に実施した久宝寺遺跡第77次発掘調査の整理が完了しましたので報告書として刊行します。この調査では、弥生時代前期の竪穴住居をはじめ、弥生時代後期の井戸、古墳時代前期の前方後方墳の一部を検出するなどの成果を得ました。

このように地中には、私たち現代人が思いもよらぬ自然環境・歴史環境が埋もれています。しかしながら今も市域のどこかで、市民生活の利便性を図るために開発が行われ、それと同時に、先人が残してくれたかけがえのない文化財が破壊されていることもこれまた事実です。

文化財は一度破壊されると、二度と元には戻りません。今後とも埋蔵文化財の保護、および否応なく破壊されていく埋蔵文化財に対して、発掘調査を行い、歴史を記録・保存し、未来に伝承していくという、私たち(財)八尾市文化財調査研究会の活動により一層のご理解・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対してご協力いただきました関係諸機関の皆様に感謝するとともに、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 西浦昭夫

## 序

1. 本書は、大阪府八尾市龍華町2丁目地内で実施した寝屋川流域下水道竪華水みらいセンター防火水槽外築造工事(H22-1)に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第77次調査(K H2010-77)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会と大阪府東部流域下水道事務所、(財)八尾市文化財調査研究会の三者による協定に基づき、(財)八尾市文化財調査研究会が大阪府東部流域下水道事務所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成22年12月1日～平成23年4月19日(1区:平成22年12月1日～平成23年4月19日 2区:平成23年2月7日～4月13日 3区:平成23年1月5日～3月15日)にかけて、高萩千秋、成海佳子、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約374m<sup>2</sup>(1区:約106m<sup>2</sup> 2区:約134m<sup>2</sup> 3区:約134m<sup>2</sup>)である。
1. 現地調査では、次の各位に有益なご指導、ご意見を頂戴した。記して感謝の意を表します。  
松岡良恵、宮崎泰史、別所秀高、大庭重信、奥村茂輝(順不動、敬称略)
1. 現地調査にあたっては、飯塚直世、市森千恵子、伊藤静江、梶本潤二、駒田佳子、芝崎和美、竹田貴子、田島宣子、田伏美智代、永井律子、村井俊子、村田知子の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成24年3月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物洗浄・接合・復元－梶本、竹田、田島、遺物実測－飯塚、市森、伊藤、國津れいこ、芝崎、永井、村井、村山、図面トレース－市森、デジタルトレース・写真撮影・写真編集・本書の執筆及び編集－樋口が担当した。
1. 調査では、写真・カラースライド・実測図を多数残した。各方面で幅広く活用されたい。

## 凡　例

1. 本書で用いた地図は、大阪府八尾市発行の2500分の1地形図(平成8年7月発行)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成24年度版)を使用した。
1. 本書で用いた座標と方位は、日本測地系国土座標第VI系(旧座標)を使用した。
1. 本書で用いた標高はすべてT.P.値(東京湾標準潮位)である。
1. 遺構の一部については下記の略号で示した。  
　　縦穴住居－S I 井戸－S E 土坑－S K 溝－S D 杖穴－S P 流路－N R
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
　　縄文土器・弥生土器・古式土師器・土師器・陶磁器・瓦・木製品・石製品・金属製品—白須恵器—黒
1. 土色・遺物の色調は、『新版標準土色帖1998年版』農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
1. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は、すべて一致する。

# 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方法	5
第4章 1区の調査成果	7
第1節 基本層序	7
第2節 検出遺構と出土遺物	8
第5章 2区の調査成果	32
第1節 基本層序	32
第2節 検出遺構と出土遺物	37
第6章 3区の調査成果	60
第1節 基本層序	60
第2節 検出遺構と出土遺物	63
第7章 久宝寺遺跡第77次調査出土の朱の分析	94
第1節 はじめに	94
第2節 試料	94
第3節 分析方法	94
第4節 結果	94
第5節 考察	94
第8章 まとめ	96

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図	2
第2図 調査区位置図	5
第3図 1区 断面図	9・10
第4図 1区 第1面平面図	11
第5図 1区 第2面平面図	12
第6図 1区 S E 201半・断・立面図	13
第7図 1区 S E 201 土管・瓦質枠・桶枠実測図	14
第8図 1区 S E 201 横板実測図	15

第9図	1区	S E201 横桟・隅柱実測図	16
第10図	1区	S E201 縦板枠実測図	17
第11図	1区	第3面平面図	18
第12図	1区	第3面造構断面図	18
第13図	1区	第4面平面図	19
第14図	1区	S K401断面図	19
第15図	1区	第5面平面図	20
第16図	1区	周溝墓501断面図	21
第17図	1区	周溝墓501 南周溝内遺物(17)出土状況平面図	22
第18図	1区	S D601出土遺物実測図	22
第19図	1区	周溝墓501出土遺物実測図	23
第20図	1区	第6・7面平面図	24
第21図	1区	第6・7面造構断面図	24
第22図	1区	第8面平面図	25
第23図	1区	第9面平面図	26
第24図	1区	S K901・S D901断面図	26
第25図	1区	第10面平面図	27
第26図	1区	珪群1001～1003断面図	27
第27図	1区	第11面平面図	28
第28図	1区	第11面造構断面図	29
第29図	1区	第12面平面図	30
第30図	1区	S D1201・1202断面図	30
第31図	1区	地層内出土遺物実測図	31
第32図	2区	断面図	33・34
第33図	2区	第1面平面図	38
第34図	2区	第2面平面図	39
第35図	2区	第2面造構断面図	40
第36図	2区	鳥畑201出土遺物実測図	40
第37図	2区	第3面平面図	41
第38図	2区	第3面造構断面図	42
第39図	2区	S D303出土遺物実測図	42
第40図	2区	第4面平面図	43
第41図	2区	第4面造構断面図	44
第42図	2区	S D404出土遺物実測図	45
第43図	2区	第5面平面図	46
第44図	2区	第5面造構断面図	47
第45図	2区	第6面平面図	48
第46図	2区	S D601平面図	49

第47図	2区	第6面遺構断面図	49
第48図	2区	第6面検出足跡平面図	50
第49図	2区	第7面平面図	51
第50図	2区	第7面遺構断面図	52
第51図	2区	第9面平面図	53
第52図	2区	第9面遺構断面図	54
第53図	2区	第15層出土遺物実測図	54
第54図	2区	第10面平面図	55
第55図	2区	第10面遺構断面図	56
第56図	2区	第11面平面図	57
第57図	2区	土器集積1101平面図・土器集積1101出土遺物実測図	58
第58図	2区	地層内出土遺物実測図	59
第59図	3区	断面図	61・62
第60図	3区	S D 101・102断面図	63
第61図	3区	第1面平面図	64
第62図	3区	第2面平面図	65
第63図	3区	第2面遺構断面図	66
第64図	3区	S D 201出土遺物実測図	66
第65図	3区	S D 301断面図	66
第66図	3区	第3面平面図	67
第67図	3区	第4面平面図	68
第68図	3区	畦畔501～503断面図	69
第69図	3区	第5面平面図	70
第70図	3区	第6面平面図	71
第71図	3区	S E 601平・断・立面図	72
第72図	3区	S E 601 ①層出土遺物実測図 1	73
第73図	3区	S E 601 ①層出土遺物実測図 2	75
第74図	3区	S E 601 ①層出土遺物実測図 3	76
第75図	3区	S E 601 ②・③層出土遺物実測図	77
第76図	3区	S D 605出土遺物実測図	78
第77図	3区	土器集積601平・立面図	79
第78図	3区	土器集積601出土遺物実測図	80
第79図	3区	第6面遺構断面図	81
第80図	3区	第7面平面図	82
第81図	3区	第8面平面図	83
第82図	3区	S D 801出土遺物実測図	84
第83図	3区	S D 802出土遺物実測図	84
第84図	3区	S D 801～805断面図	85

第85図	3区	第9面平面図	.....	86
第86図	3区	S I 901平・断面図	.....	87
第87図	3区	S I 901出土遺物実測図	.....	87
第88図	3区	S K 901出土遺物実測図	.....	87
第89図	3区	S D 901出土遺物実測図	.....	88
第90図	3区	S P 912出土遺物実測図	.....	88
第91図	3区	第9面遺構断面図	.....	88
第92図	3区	第9面遺構断面図	.....	89
第93図	3区	第1～3層出土遺物実測図	.....	90
第94図	3区	第6層出土遺物実測図	.....	91
第95図	3区	第10・11層出土遺物実測図	.....	92
第96図	3区	東部北壁赤色顔料のX線回折図	.....	95
第97図	1区	周溝墓501・44号墳合成平面図	.....	97

## 表 目 次

表1	既往調査一覧表	1	.....	3
表2	既往調査一覧表	2	.....	4

## 図版目次

図版1	1区	周辺状況(西から)	
	1区	周辺状況(南西から)	
	1区	第1面全景(北から)	
図版2	1区	第2面全景(北から)	
	1区	第3面全景(北から)	
	1区	第4面全景(北から)	
図版3	1区	第5面全景(北から)	
	1区	周溝墓501断面(南東から)	
	1区	周溝墓501南周溝内土器(17)出土状況(南から)	
図版4	1区	第6・7面全景(東から)	
	1区	S D 601・701(北西から)	
	1区	S D 701断面(北西から)	
図版5	1区	第8面全景(南から)	
	1区	S K 901・S D 901(南西から)	
	1区	第10面全景(東から)	

- 図版6 1区 第11面全景(東から)  
1区 第11面柱穴群検出状況(北から)  
1区 第12面全景(南から)
- 図版7 1区× 第5面出土遺物 周溝墓501 周溝内 盛土内
- 図版8 2区 周辺状況(北東から)  
2区 周辺状況(北西から)  
2区 第1面全景(南から)
- 図版9 2区 第2面全景(北から)  
2区 S D201～203(東から)  
2区 島畠201断面(南東から)
- 図版10 2区 第3面全景(南から)  
2区 第3面遺構群検出状況(北東から)  
2区× S D303(東から)
- 図版11 2区× 第4面全景(北から)  
2区 第4面柱穴群検出状況(東から)  
2区 S O401(北から)
- 図版12 2区 第5面全景(南から)  
2区 第5面歓溝群検出状況(東から)  
2区 S D514断面(南から)
- 図版13 2区 第6面全景(南から)  
2区× 第6面遺構群検出状況(北東から)  
2区 畦畔601断面(北東から)
- 図版14 2区 S D601底面工具痕残存状況(西から)  
2区 S D603断面(東から)  
2区 第6面足跡検出状況(北から)
- 図版15 2区 第7面全景(南から)  
2区× 第7面遺構群検出状況(北東から)  
2区 畦畔705断面(北東から)
- 図版16 2区 第8面全景(南から)  
2区 第8面地震による変形構造(東から)  
2区 第8面地震による変形構造(北から)
- 図版17 2区× 第9面全景(南から)  
2区 第9面遺構群検出状況(北東から)  
2区 第9面基盤層(第15層)内土器(53)出土状況(東から)
- 図版18 2区 第10面全景(南から)  
2区 第10面遺構群検出状況(北東から)  
2区× S K1004(南東から)

- 図版19 2区 第11面全景(南から)  
2区 土器集積1101(55)検出状況(北東から)  
2区 地層堆積状況 第12~21層(西壁:南東から)
- 図版20 2区 地層堆積状況 第21・23層(北側下層確認ピット:東から)  
2区 地層堆積状況 第19~27層(南側下層確認ピット:北西から)  
2区 調査完了状況(南から)
- 図版21 2区 出土遺物 烏烟201 S D303 S D404 第10面 土器集積1101
- 図版22 3区 周辺状況(西から)  
3区 第1面全景(東から)  
3区 第2面全景(南東から)
- 図版23 3区 第3面全景(東から) 3区 第4面全景(東から)  
3区 第5面全景(東から) 3区 第6面全景(西から)
- 図版24 3区 S E601最上層内土器出土状況(北西から) 3区 S E601断面(北西から)  
3区 S E601井戸枠内最上位土器出土状況(北から)  
3区 S E601井戸枠内土器出土状況(北から)  
3区 S E601井戸枠内最下層土器(105)出土状況(北から)
- 3区 S E601調査状況(南東から) 3区 土器集積601(東から)
- 図版25 3区 第7面全景(西から) 3区 第8面全景(西から)  
3区 第9面全景(西から) 3区 第9面遺構群検出状況(東から)
- 図版26 3区 S I901(西から)  
3区 S K901(南から)  
3区 S K901埋土状況(南から)
- 図版27 3区 S D901(南西から)  
3区 第9面柱穴群検出状況(東から)  
3区 地層堆積状況 第5~12層(西・北壁:南東から)
- 図版28 3区 第6面出土遺物 S E601 ①層内
- 図版29 3区 第6面出土遺物 S E601 ①層内
- 図版30 3区 第6面出土遺物 S E601 ①層内
- 図版31 3区 第6面出土遺物 S E601 ①層内 ②層内
- 図版32 3区 第6面出土遺物 S E601 ②層内
- 図版33 3区 第6・8面出土遺物 土器集積601 S D801 S D802
- 図版34 3区 第9面・地層内出土遺物 S I901 S K901 S P912 第6層内 第8・9層内

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成22年8月11日、(財)八尾市文化財調査研究会は、八尾市教育委員会より示された平成22年度寝屋川流域下水道事業に伴う発掘調査依頼を受理した。申請者は大阪府東部流域下水道事務所、申請地は八尾市龍華町2丁目地内である。

申請地は、久宝寺遺跡の南西部に位置する。久宝寺遺跡は、縄文時代後期以降の複合遺跡である。特に弥生時代後期～古墳時代前期の居住域、墓域、生産域に伴う遺構・遺物を多く検出したことで、広く周知されてきた遺跡である。このような調査成果を踏まえた上で、平成22年10月7日、(財)八尾市文化財調査研究会は、八尾市教育委員会および大阪府東部流域下水道事務所との3者による寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター防火水槽外塗造工事(H22-1)に伴う久宝寺遺跡発掘調査の業務協定を締結した。調査は、八尾市教育委員会の指導のもと、(財)八尾市文化財調査研究会が実施する運びとなった。

## 第2節 調査の経過

今回の発掘調査は、当調査研究会が久宝寺遺跡で実施する第77次調査にあたる。調査地は、久宝寺遺跡の南西部、JR久宝寺駅の西約200mの寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター敷地内に位置する。調査区は、受水槽部分1ヶ所(1区 面積約106m<sup>2</sup>)、防火水槽部分2ヶ所(西から2・3区 各面積約134m<sup>2</sup>)の計3ヶ所(総面積約374m<sup>2</sup>)である。

調査は、寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター防火水槽外塗造工事(H22-1)に伴う久宝寺遺跡発掘調査の業務協定に基づき、1区については現地表(T.P.+8.4m前後)下1.7mを機械により掘削、以下、現地表下1.7～4.9mまでの3.2m間については人力により掘削を、2・3区については現地表(T.P.+8.4m前後)下1.0mを機械により掘削、以下、現地表下1.0～4.0mまでの3.0m間については人力により掘削を行った。

調査期間は、1区が平成22年12月1日～平成23年4月19日、2区が平成23年2月7日～4月13日、3区が平成23年1月5日～3月15日である。

# 第2章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

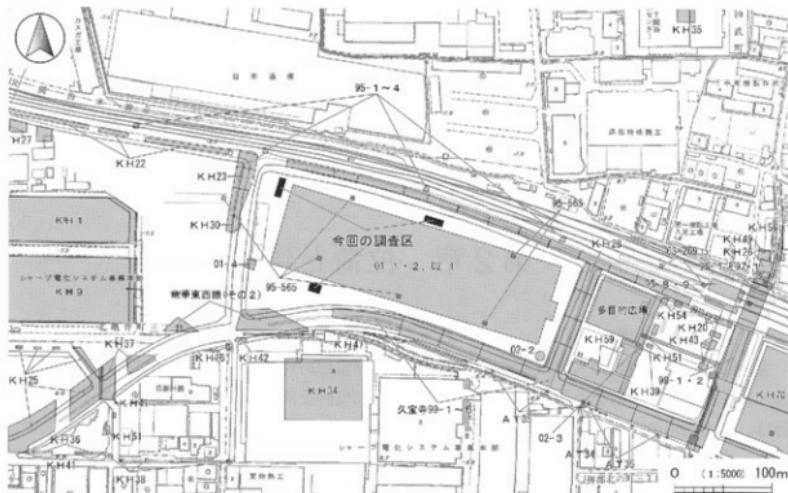
大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する柏原市役所付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画された低地である。この平野は、旧大和川の主流(恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川)と分流がもたらす沖積作用により、自然堤防や後背湿地などのヒトの営みには必要不可欠な自然地形を形成しながら、その姿を幾度か変えつつ現在に至る。この平野の東部を画する八尾市は、東側を奈良県、西側を大阪市、北側を東大阪市にそれぞれ接し、また南側は、1704年以降その流れを西へと転じた現大和川を

境界として、松原市、藤井寺市、柏原市に接している。

今回報告する久宝寺遺跡は、本市の中西部、現在の行政区画では、久宝寺1～6丁目、西久宝寺、南久宝寺1～3丁目、北久宝寺1～3丁目、龍華町1・2丁目、渋川町1～7丁目、神武町、北龜井町1～3丁目、東大阪市大蓮東5丁目、大蓮南2丁目の東西約1.7km、南北1.8 kmがその範囲と推測される。地形的には、旧大和川の主流であった長瀬川の左岸、平野川の右岸に形成された沖積地上に立地する。現地表面高は、遺跡南東端がもっとも高く標高9.7m前後、北西端がもっとも低く標高6.0m前後である。比高差は約3.7mを測り、南東から北西方に向に傾斜する地勢を有する。

## 第2節 歴史的環境

久宝寺遺跡は、昭和10年(1935年)、式内社「許麻神社」の西側に位置する小字「西口」・「栗林」(久宝寺5丁目)で道路工事が行われた際、弥生時代中期～古墳時代の土器をはじめ、丸木舟の残片が出土し、その存在がはじめて確認された。本格的な調査は、1980～1986年に実施された大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター(以下府センター))による近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う大規模な調査(『久宝寺南(その1)』～『久宝寺南(その3)』・『久宝寺北(その1～3)』)まで待たねばならない。この調査では、縄文時代以降の遺構・遺物が多数検出された。なかでも古墳時代初頭の溝から出土した準構造船は、当該期の船の構造を可視的に知る上で貴重な成果を挙げた。加えて、当調査研究会による第18次調査で出土した、古墳時代前期に比定される、朝鮮半島南部の伽耶地域に特有の軟質両耳壺とが形土器に類似する土器とともに、当該期の地域間交流を考える上で貴重な資料を提供したことで特筆される。



第1図 調査地周辺図

その後、八尾市教育委員会、当調査研究会による多次にわたる調査も加わり、当遺跡は、繩文時代後期～近世に至る複合遺跡として認識されるようになった。

近年には、府センターや当調査研究会がJR久宝寺駅周辺において大規模な調査を行い、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される、堅穴住居をはじめとする居住関連遺構群、弥生時代の方形周溝墓や、弥生時代の墓制とは性格を異にすると考えられる古墳などの墓域関連遺構群、水田や畠といった生産関連遺構群が、整然と地域を分けて展開する様子を明らかにし、当該期の「ムラ」の構造を知る上で貴重な情報を得た。また飛鳥時代～平安時代初頭については、掘立柱建物や井戸をはじめとする居住関連遺構を検出しているほか、奈良三彩や綠釉陶器、墨書き土器、倪などの、一般的な集落からは出土の稀な遺物が多く出土している点が注目される。これらの成果は、本遺跡内に寺院や官衙などの施設が存在したことを肯定するものとして特筆される。本遺跡の南東部には、渋川廃寺が位置することから、当該期における当遺跡の遺構群が、それらに関連する可能性も多い。今後の調査でさらに大きな成果の出ることが期待される。

当遺跡の周辺には、数多くの遺跡が密集している。当遺跡範囲内の北東部には、室町時代末期起源の久宝寺寺内町が成立するほか、南東部の跡部遺跡にまたがる付近には飛鳥時代後期～中世の遺構・遺物を検出した渋川廃寺が存在する。また、長瀬川を挟んだ対岸には、北東側に佐堂遺跡、東側に宮町遺跡・八尾寺内町、成法寺遺跡が展開する。南東から南北にかけては、跡部遺跡や亀井遺跡が、西には大阪市加美遺跡が隣接している。

表1 既往調査一覧表 1 (地図番号は第1図に対応)

地図番号	施設名 (略号)	所在地	面積 (m <sup>2</sup> )	調査機関	文献
95-1～4	亀井・洪川	108	センター	本間元樹ほか1996『久宝寺遺跡・竪草地区試掘調査』(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第1号と「久宝寺遺跡・竪草地区(その1)発掘調査報告書」(財)大阪府文化財調査研究センター	
95-8・9	亀井	677	センター	後藤信代ほか1996『久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書II』(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第2号と「久宝寺遺跡・竪草地区(その2)発掘調査報告書」(財)大阪府文化財調査研究センター	
96-1 97-1	渋川	725	センター	後藤信代ほか2001『久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書III』(財)大阪府文化財調査研究センター	
98-1・2	渋川	2103	センター	赤木克也ほか2001『久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書IV』(財)大阪府文化財調査研究センターと「久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書第6集』(財)大阪府文化財調査研究センター	
99-1～5	龍華町2	4306	センター	西村一歩・奥村吉輝ほか2004『久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書V』(財)大阪府文化財セミナーと「大阪府文化財セミナー調査報告書第11集』(財)大阪府文化財セミナー	
多目的広場	亀井	3156	センター	西村一歩・斎藤義典ほか2003『久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書VI』(財)大阪府文化財セミナー	
電源東西線 (その2)	北丸井町3	1570	センター	西村一歩・奥村吉輝ほか2004『久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書VII』(財)大阪府文化財セミナー	
01-1・2、01-4、 02-1、02-2	龍華町2	27425	センター	森屋英子・亀井・鶴・西村茂輝2007『久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書VIII』(財)大阪府文化財セミナーと「大阪府文化財セミナー調査報告書第15集』(財)大阪府文化財セミナー	
02-3	亀井	—	センター	金光正祐2003『久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書IX』(財)大阪府文化財セミナーと「大阪府文化財セミナー調査報告書第16集』(財)大阪府文化財セミナー	
63-269	亀井・洪川	150	市教委	近江房秀1983.3.14.『久宝寺遺跡(63-269)の調査』[八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査委報書]と「八尾市文化財調査報告20」昭和63年度公共事業八尾市教育委員会	
95-565	洪川・亀井	240	市教委	轟井淳弘・吉田洋己1997『7.久宝寺遺跡(95-565)の調査』[八尾市内遺跡昭和68年度発掘調査報告書II]と「八尾市文化財調査報告37」八尾市教育委員会	
KH1	久宝寺第1次 (KH84.1)	北亀井3	792	八文研	原口昌則1993『久宝寺遺跡(第1次調査)』[八尾市埋蔵文化財調査報告書]と「八尾市埋蔵文化財調査研究会報告37」(財)八尾市文化財調査研究会
KH9	久宝寺第9次 (KH91.9)	北亀井3	4100	八文研	成海佳子1992.13.『久宝寺遺跡第9次調査(KH91.9)』[平成3年度](財)八尾市文化財調査研究会と「八尾市文化財調査研究会報告書」(財)八尾市文化財調査研究会

※企画開発センター：(財)大阪府文化財センター 市教委：八尾市教委員会 八文研：(財)八尾市文化財調査研究会

表2 既往調査一覧表 2 (地図番号は第1図に対応)

地区番号	調査名 (略号)	所在地	面積 (m <sup>2</sup> )	調査機関	文献
K H16	久宝寺第16次 (K H93-16)	北龜井町3	25	八文研	高萩千秋1994「『久宝寺遺跡(第16次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告42(財)八尾市文化財調査研究会
K H20	久宝寺第20次 (K H96-20)	洪川	145	八文研	坪田真一2000「『久宝寺遺跡(第20次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告68(財)八尾市文化財調査研究会
K H22	久宝寺第22次 (K H97-22)	大字龜井	928	八文研	原田昌則2001「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書-大阪草薙市拠点地区古道跡の発見-」(財)八尾市文化財調査研究会報告68(財)八尾市文化財調査研究会
K H23	久宝寺第23次 (K H97-23)	龍華町1・2	7720	八文研	原田昌則2001「『久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告89(財)八尾市文化財調査研究会
K H25	久宝寺第25次 (K H98-25)	北龜井町3	3022	八文研	坪田真一・原田昌則2006「『久宝寺第25次発掘調査(KH98-25)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告70(財)八尾市文化財調査研究会
K H26	久宝寺第26次 (K H99-26)	神武町	309	八文研	岡田道一・樋口山2003「『久宝寺遺跡第26次発掘調査(KH99-26)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告70(財)八尾市文化財調査研究会
K H27	久宝寺第27次 (K H99-27)	龜井町3	485	八文研	西村公助2003「『久宝寺遺跡(第27次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告12(財)八尾市文化財調査研究会
K H28	久宝寺第28次 (K H99-28)	大字龜井	2160	八文研	原田昌則・岡田道一・西村公助2004「『久宝寺遺跡(第28次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告71(財)八尾市文化財調査研究会
K H30	久宝寺第30次 (K H99-30)	龍華町1・2	893	八文研	原田昌則・西村公助2006「『久宝寺遺跡第30次発掘調査(KH99-30)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告89(財)八尾市文化財調査研究会
K H34	久宝寺第34次 (K H2000-34)	北龜井町3	1501	八文研	原田昌則・渕原清・荒川と故2007「『久宝寺遺跡第34次発掘調査報告書』」(財)八尾市文化財調査研究会報告96(財)八尾市文化財調査研究会
K H36	久宝寺第36次 (K H2000-36)	大字龜井	136	八文研	原田昌則2004「『久宝寺遺跡第36次調査』」(財)八尾市文化財調査研究会報告77(財)八尾市文化財調査研究会
K H37	久宝寺第37次 (K H2001-37)	大字龜井	943	八文研	原田昌則・金瀬謙二2004「『久宝寺遺跡(第37次調査)』」(財)久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告77(財)八尾市文化財調査研究会
K H38	久宝寺第38次 (K H2001-38)	北龜井町2・3	53	八文研	高萩千秋2005「『久宝寺遺跡(第38次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告75(財)八尾市文化財調査研究会
K H39	久宝寺第39次 (K H2001-39)	龍華町2	668	八文研	原田昌則2005「『久宝寺遺跡第39・51次調査(KH2001-39・KH2003-51)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告75(財)八尾市文化財調査研究会
K H41	久宝寺第41次 (K H2002-41)	北龜井町2	12	八文研	西村公助2003「『久宝寺遺跡(第41次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告75(財)八尾市文化財調査研究会
K H42	久宝寺第42次 (K H2002-42)	北龜井町3	61	八文研	樋口山2007「『久宝寺遺跡(第42次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告91(財)八尾市文化財調査研究会
K H43	久宝寺第43次 (K H2002-43)	龍華町1	477	八文研	坪田真一・金瀬謙二2005「『久宝寺遺跡(第43次調査)』」(財)久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83(財)八尾市文化財調査研究会
K H47	久宝寺第47次 (K H2002-47)	北龜井町2・3	153	八文研	成海佳子2005「『久宝寺遺跡(第47次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告78(財)八尾市文化財調査研究会
K H49	久宝寺第49次 (K H2003-49)	神武町	120	八文研	坪田真一2005「『久宝寺遺跡(第49次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告82(財)八尾市文化財調査研究会
K H51	久宝寺第51次 (K H2003-51)	龍華町2	76	八文研	原田昌則2005「『久宝寺遺跡第39・51次調査(KH2001-39・KH2003-51)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告89(財)八尾市文化財調査研究会
K H54	久宝寺第54次 (K H2003-54)	龍華町2	164	八文研	成海佳子2005「『久宝寺遺跡(第54次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告83(財)八尾市文化財調査研究会
K H56	久宝寺第56次 (K H2004-56)	神武町	267	八文研	原田昌則2005「『久宝寺遺跡第56次調査(KH2004-56)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告83(財)八尾市文化財調査研究会
K H59	久宝寺第59次 (K H2004-59)	大字龜井	1539	八文研	西村公助2006「『久宝寺遺跡第59次調査(KH2004-59)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告122(財)八尾市文化財調査研究会
K H61	久宝寺第61次 (K H2004-61)	北龜井町3	93	八文研	荒川和哉2006「『久宝寺遺跡第61次調査(KH2004-61)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告88(財)八尾市文化財調査研究会
K H70	久宝寺第70次 (K H2006-70)	龍華町1	9920	八文研	坪田真一・森田裕弘・菊井佳介2007「『久宝寺遺跡第70次調査(KH2006-70)』」(平成18年度) (財)八尾市文化財調査研究会報告122(財)八尾市文化財調査研究会
K H77	久宝寺第77次 (K H2010-77)	龍華町2	374	八文研	本書に掲載
A T34	跡部遺跡 (A T2002-34)	跡部北の町3	23	八文研	坪田真一2003「『跡部遺跡(第34次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告85(財)八尾市文化財調査研究会
A T35	跡部遺跡 (A T2002-35)	跡部北の町3	24	八文研	金瀬謙二2003「『跡部遺跡(第35次調査)』」(財)八尾市文化財調査研究会報告75(財)八尾市文化財調査研究会

※調査機関 = センター：(財)大阪府文化財センター

市教委：八尾市教育委員会 八文研：(財)八尾市文化財調査研究会

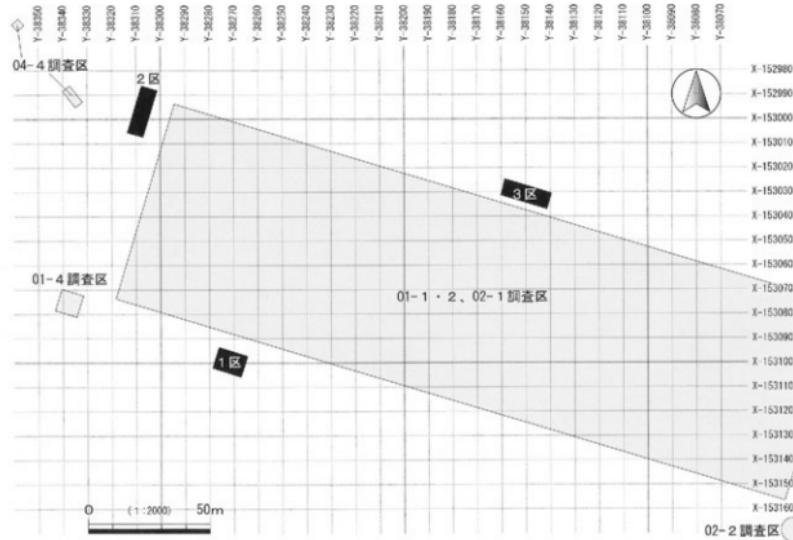
### 第3章 調査の方法

今回の調査は、寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター敷地内に築造される受水槽部分1ヶ所(1区 面積約106m<sup>2</sup>)、防火水槽部分2ヶ所(西から2・3区 各面積約134m<sup>2</sup>)の計3ヶ所(総面積約374m<sup>2</sup>)で実施した。1区は、敷地南西部に、2区は南北西部に、3区は同北部に位置する。

調査は、寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター防火水槽外築造工事(H22-1)に伴う久宝寺遺跡発掘調査の業務協定に基づき、1区については現地表(T.P.+8.4m前後)下1.7mを機械により掘削、以下、現地表下1.7~4.8mまでの3.1m間については人力により掘削を、2・3区については現地表(T.P.-8.4m前後)下1.0mを機械により掘削、以下、現地表下1.0~4.0mまでの3.0m間については人力により掘削を行い、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。また、各調査区とともに、下層における遺構の有無、及び地層堆積状況の把握にも心掛けた。

調査では、遺構平面図の作成や遺物の取り上げの際、遺構・遺物の絶対的位置を示す必要が求められる。そこで本調査では、世界測地系による国土座標第VI系を基準に地区割りを行い、これに備えた。ただし以下の報告では、隣接する過去の調査との平面的な整合を行うため、日本測地系による表記を行った。これに従い、方位も日本測地系国土座標第VI系に則り座標北で示した。

高さは東京湾標準潮位(T.P.値)を使用した。なお今回の報告では、図面の中に標高を記載する際、例外を除きT.P.±を省略した。



第2図 調査区位置図

遺構番号については、調査区毎に遺構略号と算用数字で表現した。算用数字上3ないし4桁は遺構検出面を表し、それ以下の桁は遺構の検出番号を示す。

調査の結果、1区では、第1面(T.P.+6.9~7.1m)で近~現代、第2面(T.P.+6.6~6.8m)で近世、第3面(T.P.+6.5~6.6m)で古墳時代後期~古代相当、第4面(T.P.+6.4~6.5m)で古墳時代中期相当、第5面(T.P.+5.6~6.0m)で古墳時代前期、第6面(T.P.+5.0~5.2m)、第7面(T.P.+5.2~5.3m)で古墳時代初頭、第8面(T.P.+4.8~4.9m)、第9面(T.P.+4.4m)で弥生時代中~後期相当、第10面(T.P.+4.1m)で弥生時代前~中期相当、第11面(T.P.+3.7m)、第12面(T.P.+3.6m)で縄文時代晚期~弥生時代前期相当の遺構群や対応層を検出した。

2区では、第1面(T.P.+6.7~6.8m)で近~現代、第2面(T.P.+6.3~6.7m)で近世、第3面(T.P.+6.3m)で中世、第4面(T.P.+6.2~6.3m)、第5面(T.P.+6.1~6.2m)で古代相当、第6面(T.P.+5.8~6.1m)で古墳時代中期相当、第7面(T.P.+5.8~6.0m)、第8面(T.P.-5.5~5.7m)で古墳時代前期相当、第9面(T.P.+5.1~5.4m)、第10面(T.P.+5.0~5.3m)で古墳時代初頭、第11面(T.P.+4.8~5.0m)弥生時代後期初頭の遺構群や対応層を検出した。

3区では、第1面(T.P.+6.7m)で近~現代、第2面(T.P.+6.5~6.6m)で近世、第3面(T.P.-6.4m)で中世、第4面(T.P.+5.5~5.8m)で古代相当、第5面(T.P.+5.5~6.1m)で古墳時代相当、第6面(T.P.+5.2~5.8m)で弥生時代後期後半~末、第7面(T.P.-5.0~5.3m)で弥生時代中~後期相当、第8面(T.P.+4.7~4.9m)で弥生時代中期、第9面(T.P.+4.6~4.8m)で弥生時代前期の遺構群や対応層を検出した。

出土遺物はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)15箱(1区:3箱 2区:2箱 3区:10箱)を数える。

## 第4章 1区の調査成果

### 第1節 基本層序

現地表(T.P.+8.4m前後)下1.0~1.5m前後までは、現代の客土・盛土層および搅乱(第0層)である。以下現地表下4.9m前後までの3.4~3.9m間で13層におよぶ基本層序を抽出した。第1層は近~現代の旧作土層(T.P.+7.4m)である。第2層は近世以降の作土層(T.P.+7.2~7.4m)である。第3層は中世遺物が混在する作土層(T.P.+6.9~7.1m)である。上面において第1面(近~現代)を検出した。第4層は、6世紀前半に比定される須恵器を含む暗色を呈した作土層(T.P.+6.6~6.8m)である。上面が第2面(近世以降)に相当する。第5層も作土層(T.P.+6.5~6.6m)である。上面が第3面(古墳時代後期~古代相当)にあたる。第6層は河川堆積層(T.P.+6.4~6.5m)である。上面が第4面(古墳時代中期相当)である。第7層は、古式土師器細片を含む砂礫優勢の河川堆積層(T.P.+5.6~6.0m)である。上面が第5面(古墳時代前期)に、下面が第6面(古墳時代初頭)に相当する。第8層は湿地性堆積層(T.P.+5.2~5.3m)である。上面が第7面(古墳時代初頭)である。第9層は、第8層同様、植物遺体のラミナを密に含む湿地性堆積層(T.P.+4.8~4.9m)である。上面が第8面(弥生時代中~後期相当)に相当する。第10層は湿地性堆積層(T.P.+4.4m)である。上面が第9面(弥生時代中~後期相当)である。第11層は湿地性堆積層(T.P.+4.1m)である。上面が第10面(弥生時代前~中期相当)である。第12層は土壤化層(T.P.+3.7m)である。上面が第11面(縄文時代晩期~弥生時代前期相当)である。第13層は河川堆積層(T.P.+3.6m以下)である。上面が第12面(縄文時代晩期~弥生時代前期相当)である。

第0層：現代の客土・盛土層、および搅乱

第1層：褐灰色(7.5YR6/1)粗粒砂~細礫混シルト質粘土~粘土質シルト

近~現代の旧作土層(T.P.+7.4m)である。調査区中央付近に部分的に分布する搅拌層で、層厚は10~20cmを測る。雲状に酸化マンガンの沈着が顕著である。

第2層：褐灰色(7.5YR5/1)~黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂~細礫混シルト質粘土~粘土質シルト

近世以降の作土層(T.P.+7.2~7.4m)である。調査区中央~西部に形成された搅拌層で、層厚は30~50cmである。3~4層に細分できた。

第3層：オリーブ灰色(2.5GY6/1)~褐灰色(10YR5/1)粗粒砂~細礫混粘土質シルト

中世頃の作土層(T.P.+6.9~7.1m)である。調査区全域に分布し、層厚は20cm前後を測る。2~3層に細分できた。13世紀代に帰属する土師器羽釜細片(38)が出土した。下面では踏み込みに起因する変形構造を認める。上面において第1面(近~現代)を検出した。

第4層：暗褐色(10YR3/3)粗粒砂~細礫混粘土質シルト

暗色を帯びた作土層(T.P.+6.6~6.8m)である。調査区全域に分布し、層厚は10cm程度を測る。6世紀前半に比定される須恵器杯身の細片(39)が出土した。上面が第2面(近世以降)に相当する。

第5層：褐色(10YR4/4)粗粒砂~細礫混粘土質シルト

調査区全域に存在する作土層(T.P.+6.5~6.6m)である。層厚は10~20cmを測る。上面

が 第3面(古墳時代後期～古代相当)にあたる。

第6層：灰黄色(2.5Y7/2)～灰白色(10Y7/1)～灰色(N5/)細礫混粘土質シルト～粗粒砂

部分的に灰色(N3/)炭化物ラミナ混粘土質シルトを挟むものの、概ねシルト～粗粒砂優勢の河川堆積層(T.P.+6.4～6.5m)である。周溝墓501を埋没させた河川堆積層に相当し、層厚は70cm前後を測る。ラミナ構造を認める。上面が第4面(古墳時代中期相当)である。

第7層：灰白色(5Y7/2)～オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト～極粗粒砂

砂礫優勢の河川堆積層(T.P.+5.6～6.0m)である。部分的にブロック土(10～20cm)や木片を含む。層厚は約30cm。本層はS D 601からの溢流堆積物で、西壁では北から南に、北壁では西から東に傾く斜交ラミナを確認した。上面において第5面(古墳時代前期)を、下面において第6面(古墳時代初頭)を検出した。

第8層：黄灰色(2.5Y4/1)～灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘土質シルト～シルト

植物遺体ラミナを含む湿地性堆積層(T.P.+5.2～5.3m)で、調査区全域に分布する。一部層界が不明瞭な部分を認めるが、概ね5層に細分できた。層厚は50cm前後である。上面が第7面(古墳時代初頭)にあたる。

第9層：灰色(5Y4/1)～オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土～粘土質シルト

第8層同様、植物遺体のラミナを密に含む湿地性堆積層(T.P.+4.8～4.9m)である。調査区全域に形成され、層厚は30～40cmを測る。3層に細分できた。上面において第8面(弥生時代中～後期相当)を検出した。

第10層：灰色(5Y5/1)～オリーブ黄色(5Y6/3)～オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土質シルト～極細粒砂  
一部極細粒砂を認めるものの、第8・9層同様、湿地性堆積層に分類される地層  
(T.P.+4.4m)である。調査区全域に分布し、層厚は40cm前後である。3～4層に細分できた。上面が第9面(弥生時代中～後期相当)である。

第11層：灰色(7.5Y4/1)～オリーブ灰色(10Y6/2)シルト質粘土～粘土質シルト

灰色とオリーブ色の互層が鮮やかな湿地性堆積層(T.P.+4.1m)である。調査区全域に存在し、層厚は30cmである。概ね5層に細分できた。上面が第10面(弥生時代前～中期相当)にあたる。

第12層：黒褐色(2.5Y3/1)～青灰色(5BG5/1)シルト質粘土～粘土質シルト

第13層の土壤化部分に相当する地層(T.P.+3.7m)である。調査区全域に形成される。層厚は約10cm。第11面(縄文時代晚期～弥生時代前期相当)は本層に帰属する遺構面である。

第13層：青灰色(5BG5/1)～オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土質シルト～中粒砂

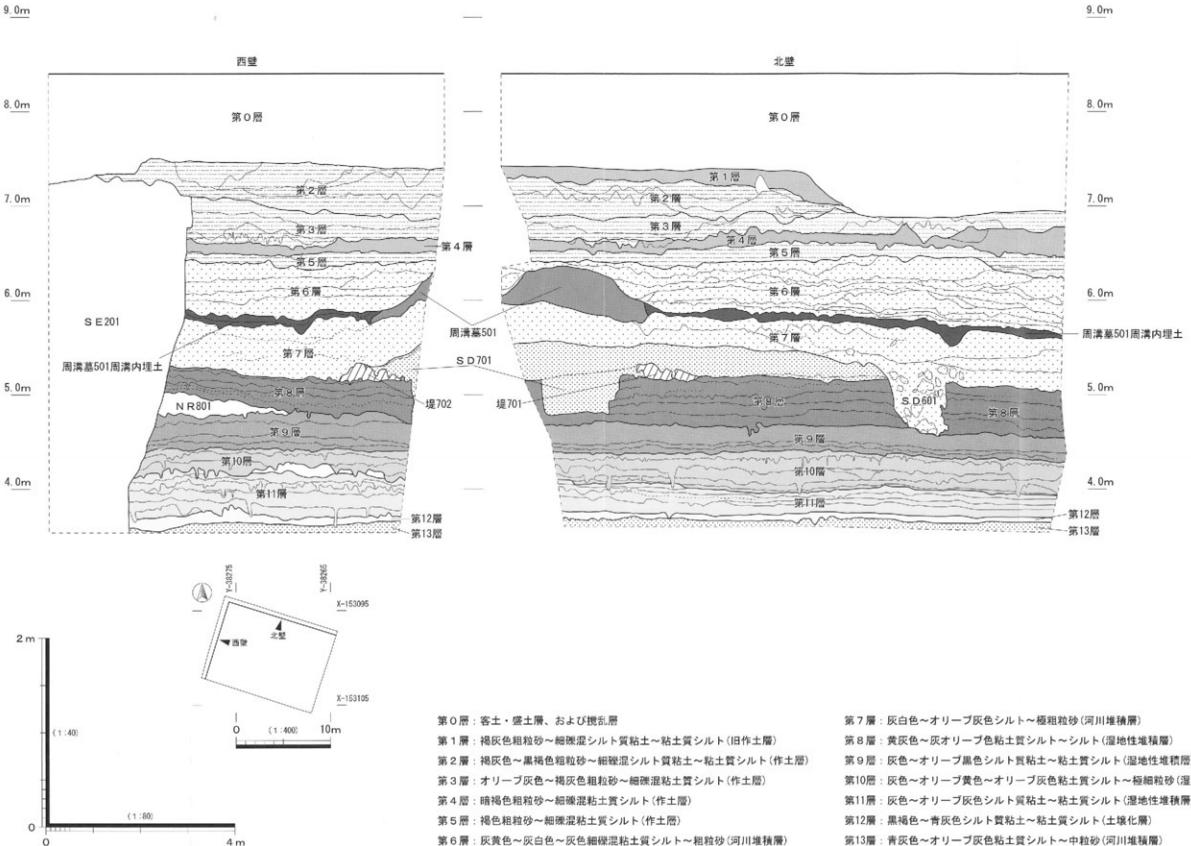
グライト化の顯著な河川堆積層(T.P.+3.6m以下)である。下方に向かうにつれて粒度組成は粗くなる。上面において第12面(縄文時代晚期～弥生時代前期相当)を検出した。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

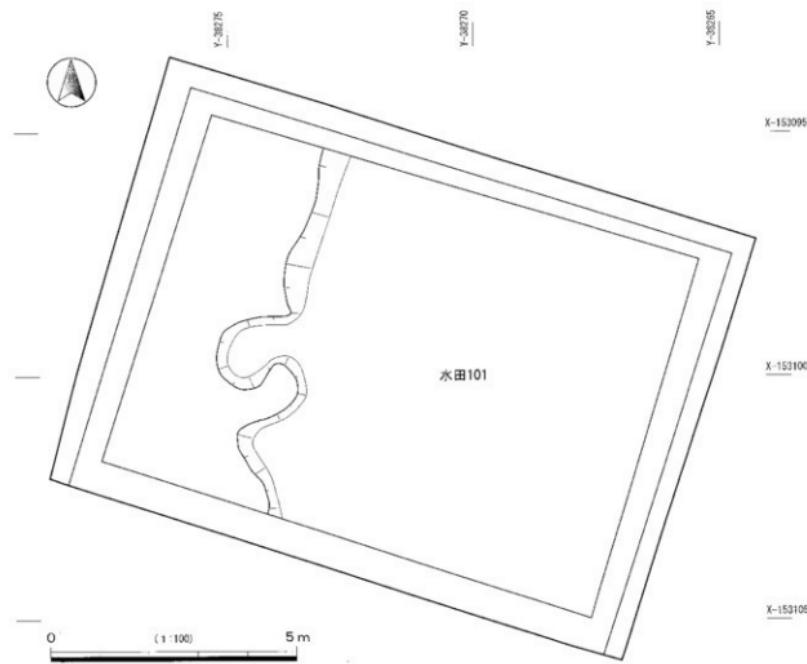
### 第1面(近～現代)

第0・1・2層を除去し、第3層上面(T.P.+6.9～7.1m)で水出を1筆(水田101)検出した。

水田101は、北・南・東側が調査区外に至るため全容は不明である。西側の肩に若干乱れたラインを認めるが、ほぼ南北に主軸を有することが考えられる。検出規模は、南北長が7.40m以上、



第3図 1区 断面図 (S = 縦:1/40 横:1/80)



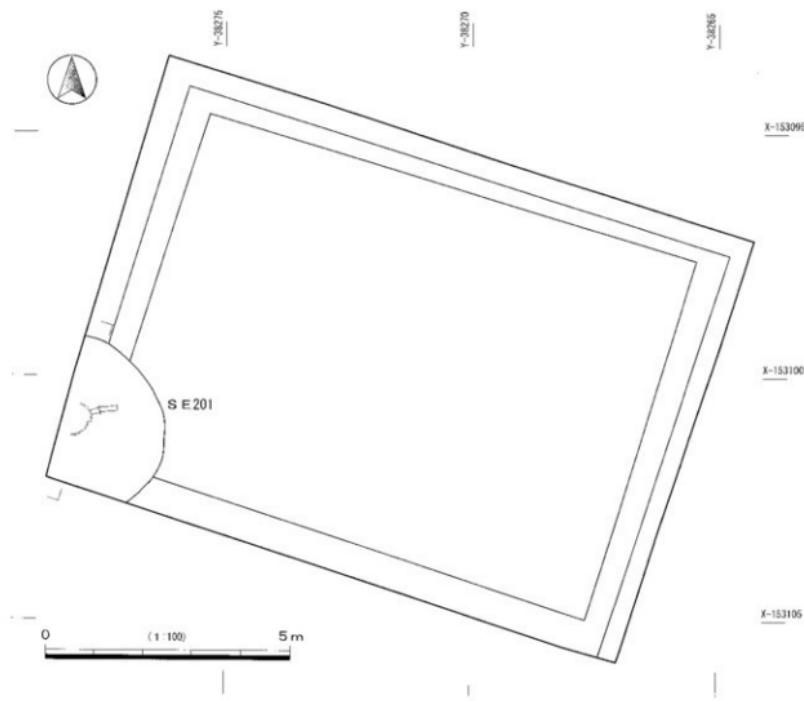
第4図 1区 第1面平面図 ( $S = 1/100$ )

東西長が7.95m以上、深さは0.3m前後を測る。埋土はグライ化の顕著な搅拌層である。出土遺物は無かった。

## 第2面(近世以降)

第4層上面(T.P.+6.6~6.8m)において井戸を1基(S E201)検出した。

S E201は、調査区の南西隅で検出した井戸である。西側と南側が調査区外に至るため全容は不明であるが、掘形はほぼ円形であったと考えられる。検出規模は東西長2.1m以上、南北長2.9m以上、深さは3.3m以上である。掘形の中央部付近には、井戸枠が残存していた。井戸枠は、大きく3つの枠(上段枠・中段枠・下段枠)から成る。上段枠には、平面が円形(径約80cm)を呈する瓦質の井戸枠を3段以上積み上げるほか、中段枠には平面円形(径約76cm)の桶枠を三段分(上から1段桶枠~3段桶枠)置いている。下段枠には、平面方形(1辺:約100cm)の縦板枠を設置する。この縦板枠は、隅柱や横桟、蓋板を備えた構造を有する。なお、上段枠にあたる瓦質の井戸枠には、3本以上から成る土管(1)が接続されており、導水施設を備えた井戸であることが判明した。

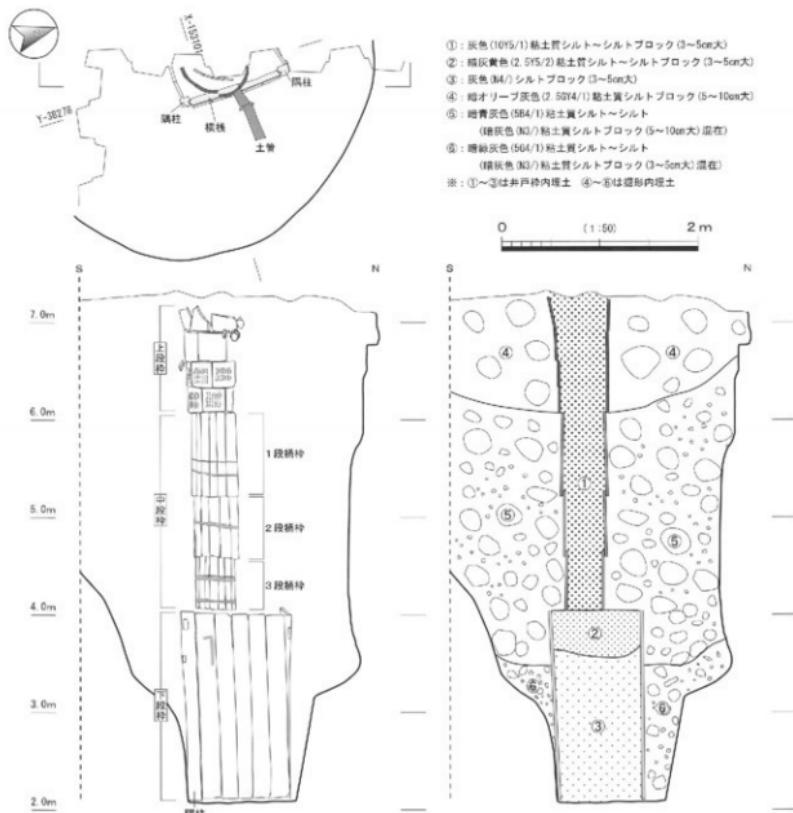


第5図 1区 第2面平面図 ( $S = 1/100$ )

1は赤褐色を帯びた陶製の土管である。片側が受け口(径14.2cm 洞径10.8cm)を呈し、長さは65.5cmを測る。2～4は瓦質の井戸枠である。いずれも縦27～28cm、横約26cmの方形を呈する個体で、厚さは約2.5cmを測る。凸面に楔状のキザミ目を加える個体(2～4)と無文の個体(5)を認める。さらにキザミ目の差異により、3個以上のキザミ目原体が存在することを確認した。各瓦質枠の側面の傾斜角度から計測すると、1段につき8～9枚で一周したことが推測される。

6～8は、中段に設置された3段から成る桶枠を構成した板材である。6は1段桶板(幅10.2cm 長さ84.8cm 厚さ2.8cm)、7は2段桶板(幅9.6cm 長さ83.3cm 厚さ1.8cm)、8は3段桶板(幅12.4cm 長さ86.8cm 厚さ2.0cm)である。いずれも平面が円形を描くように、側面が若干内側に傾斜している。傾斜角度は約18度を測ることから、約20枚で一周する桶であったことが考えられる。6の内面下位、7の外面上位と内面下位、8の外面上位には青色の塗料を認めるほか、7・8の外面上位や下付近にはタガの痕跡も見える。青色塗料の残存位置から判断すると、桶枠は、下位の桶枠の外側に10cm程重ねながら積み上げたことが明らかになった。

9～11は、下段に設置された縦板枠の蓋板に相当する。所謂『かがみ』と呼ばれる板材(厚さ

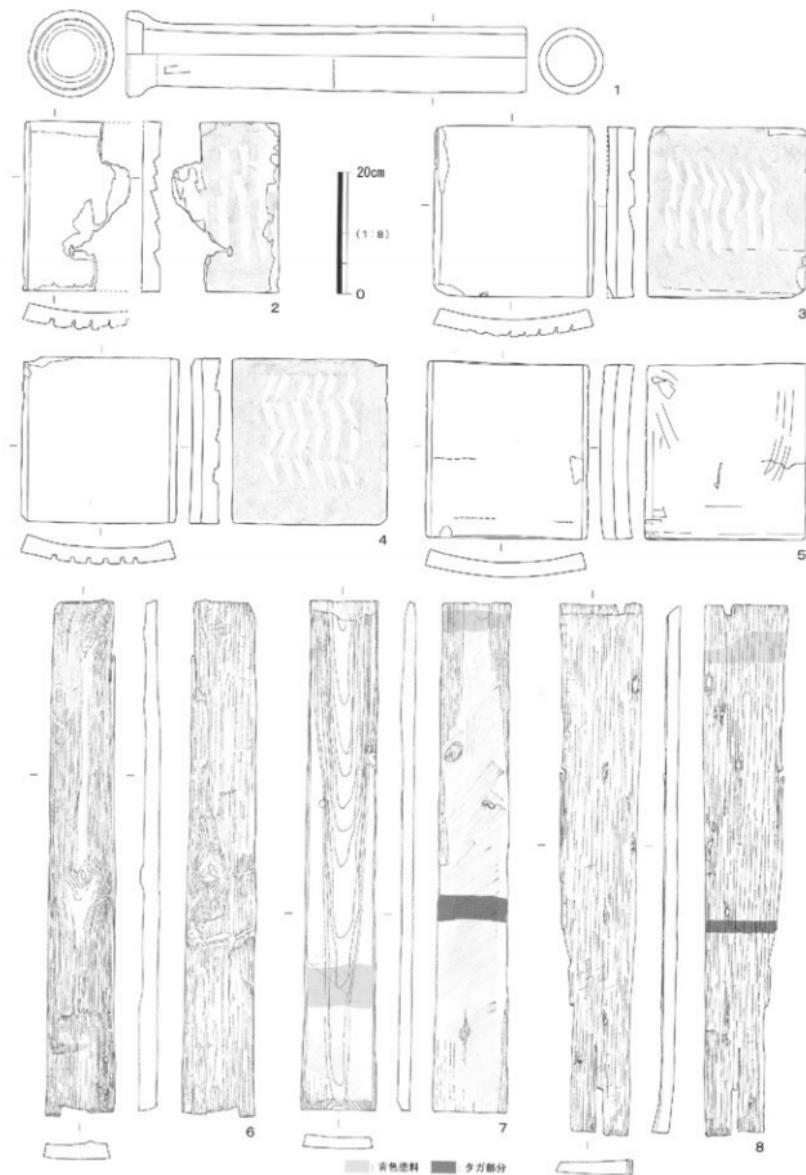


第6図 1区 S E 201平・断・立面図 (S=1/50)

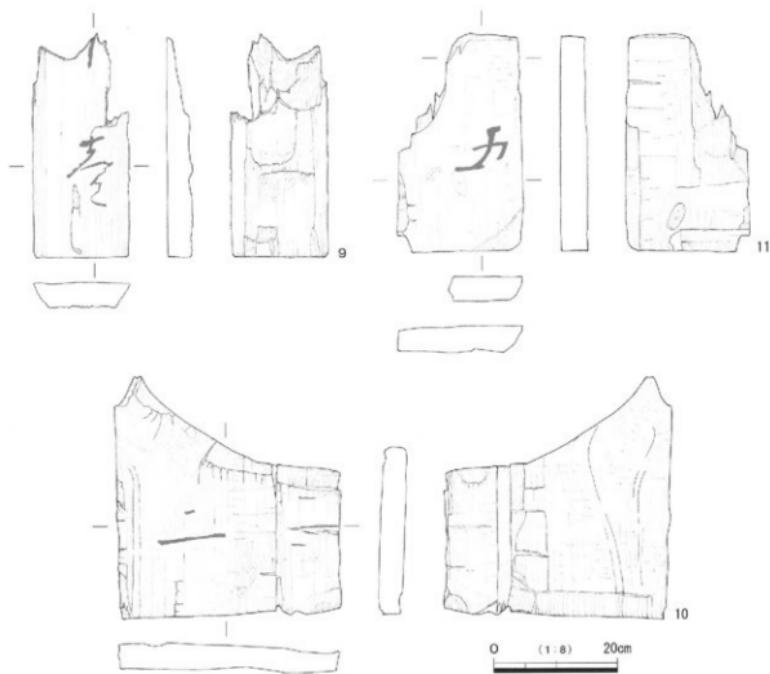
約4.0cm)で、複数の板材を組み合わせて一枚の蓋を形成していたことが推測される。上位に置かれる桶枠に接続する部分には、桶枠の径よりも若干小さい円形の割り貫きを行う。蓋板の上面には墨書きが認められる。9には『壱』と、10には『二』と、11には『五』と描かれていた。

12は横桟。縦板が内側に倒れこむのを防ぐために、縦板枠の内面に設置されたものである。径9.6cmの丸太の側縁を縦方向に削り小さな平坦面を作り出すほか、両端には縦約8.0cm、横約3.0cm、奥行約2.5cmの立方体を呈した柄を形成する。長さは98.6cmを測る。

13は隅柱である。一辺約10.5cmの角を落とした角柱で、長さは118.0cmを測る。隅柱の上位には12横桟の柄を入れるための立方体を呈した柄穴(縦約10.0cm、横約3.0cm、奥行約3.0cm)を認め



第7図 1区 SE201 土管・瓦質枠・桶枠実測図



第8図 1区 SE201 横板実測図

るほか、用途不明の小さな四角の穴(1辺約1.0cm)も確認した。角柱の外側にあたる部分には三角形状の墨書も見える。

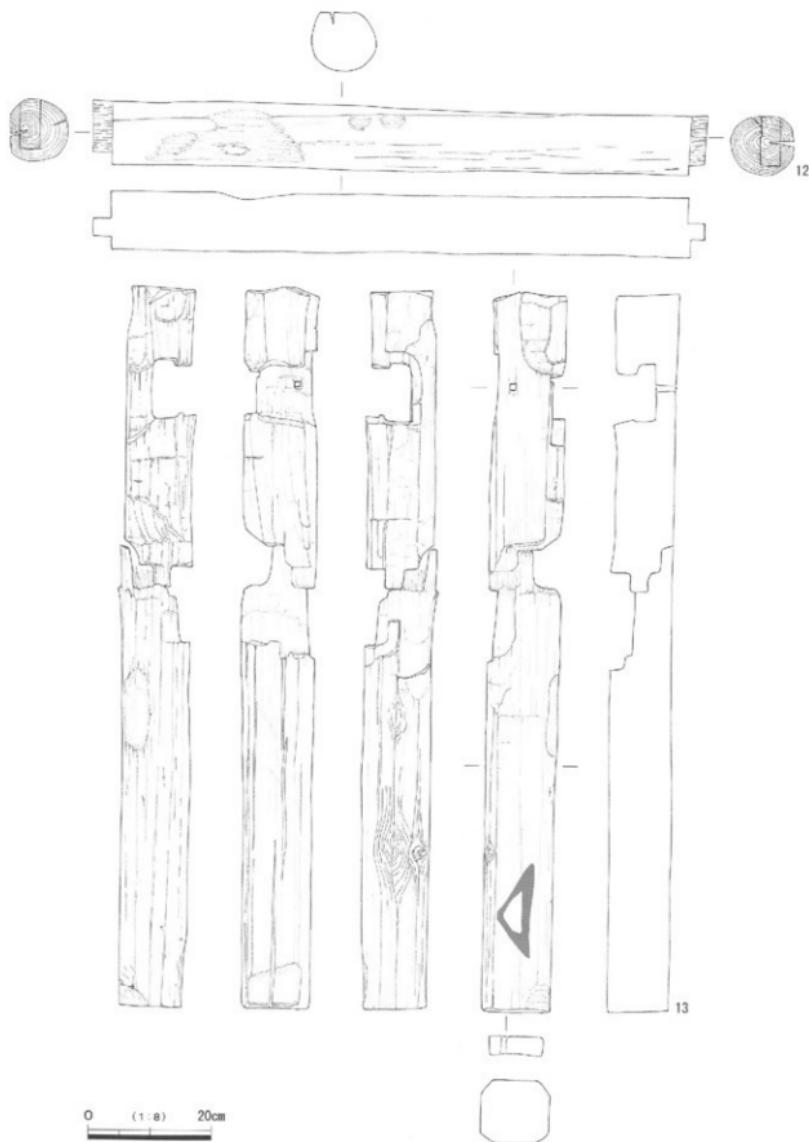
14は縦板枠の板材である。幅20cm、長さ190cm、厚さ2.0cmの板材を1面につき5枚を並べて、平面正方形の枠を形成したことが考えられるが、詳細は不明。外面には『上 七 ?』のような墨書が残存していた。

なお、本遺構は第4層上面で検出、調査を行ったが、本来は第2層下面に帰属する遺構であることを付け加えておく。

### 第3面(古墳時代後期～古代相当)

第5層上面(T.P.+6.5～6.6m)において、土坑を6基(SK301～306)、溝を3条(SD301～303)検出した。

SK301は、南東～北西主軸の楕円形を呈した土坑である。検出規模は、長さ0.75m、幅0.55m、深さ約0.02mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。



第9図 1区 SE 201 横柱・隅柱実測図

S K 302は、北部を S D 301に切られるため、全容は不明であるが、概ね東西主軸の楕円形土坑と推測される。検出規模は、長さ1.15m、幅0.40m以上、深さ0.64mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

S K 303は、東西主軸の不整楕円形を呈した土坑である。検出規模は、長さ1.25m、幅0.70m、深さ0.11mを測る。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S K 304は、S K 303の東に隣接する不整方形土坑である。検出規模は、東西長0.70m、南北長0.55m、深さ0.12mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

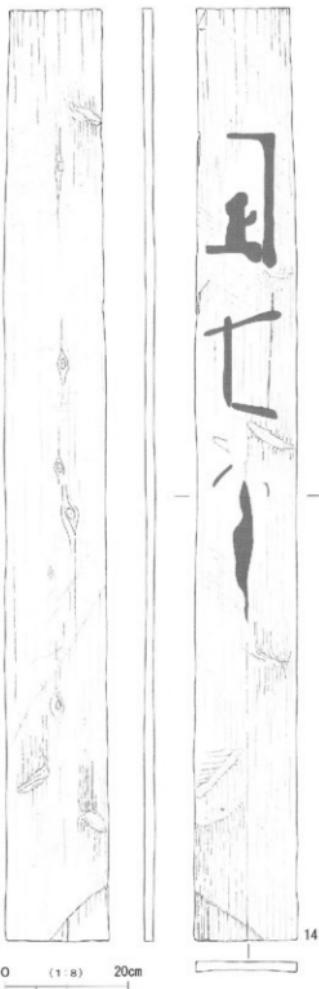
S K 305は、南部が南側溝に切られるため全容は不明であるが、概ね東西主軸の隅丸方形土坑と考えられる。検出規模は、長さ0.60m、幅0.25m以上、深さ0.57mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

S K 306は、調査区の南東隅で検出した土坑である。南部と東部が調査区外に至るため全容は不明であるが、隅丸方形を呈したと推測される。検出規模は、東西長1.00m以上、南北長0.80m以上、深さ0.68mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

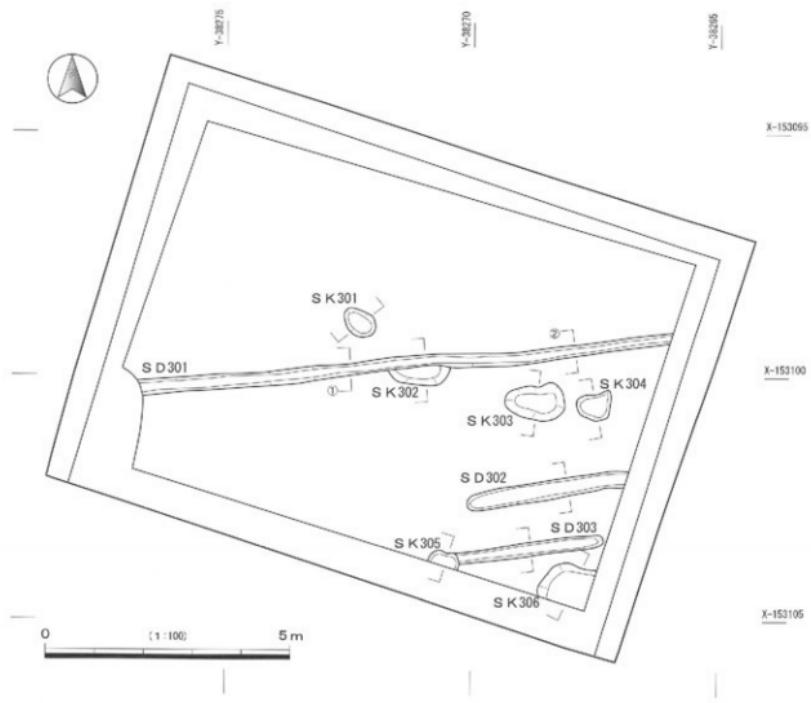
S D 301~303は、概ね東西方向に直線的に伸びる溝である。長さは、S D 301が10.90m以上、S D 302が3.30m以上、S D 303が3.00m以上である。幅はいずれも0.30~0.40mを測る。埋土はグライ化の顕著なブロック土の単層である。出土遺物はなし。耕作に伴う鋤溝の可能性が高い。

#### 第4面(古墳時代中期相当)

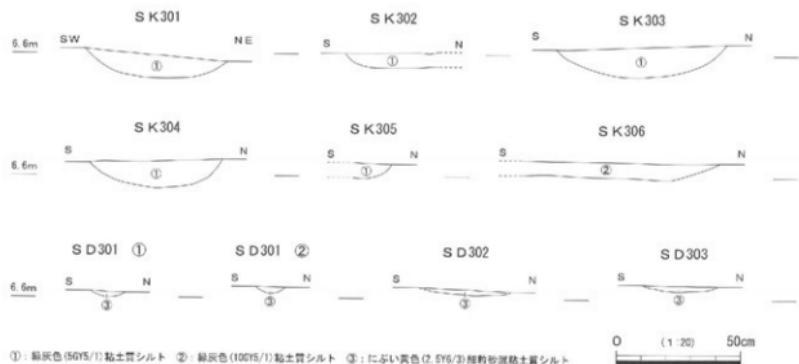
第6層上面(T.P.+6.4~6.5m)において、土坑を1基(S K 401)検出した。S K 401は、概ね東西主軸の楕円形を呈した土坑である。検出規模は、長さ0.65m、幅0.45m、深さ0.04mを測る。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなかった。



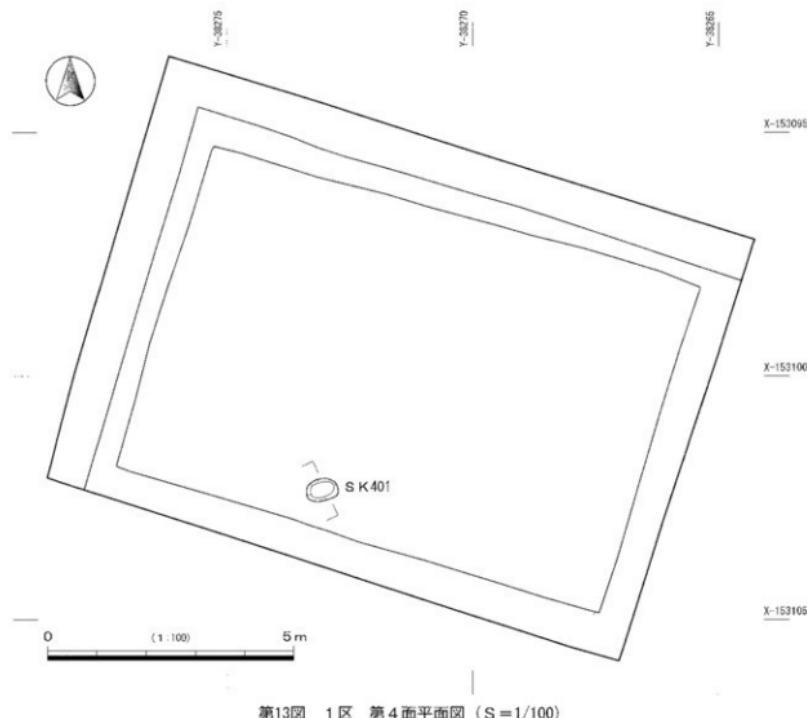
第10図 1区 S E 201 縦板枠実測図



第11図 1区 第3面平面図 ( $S=1/100$ )



第12図 1区 第3面造構断面図



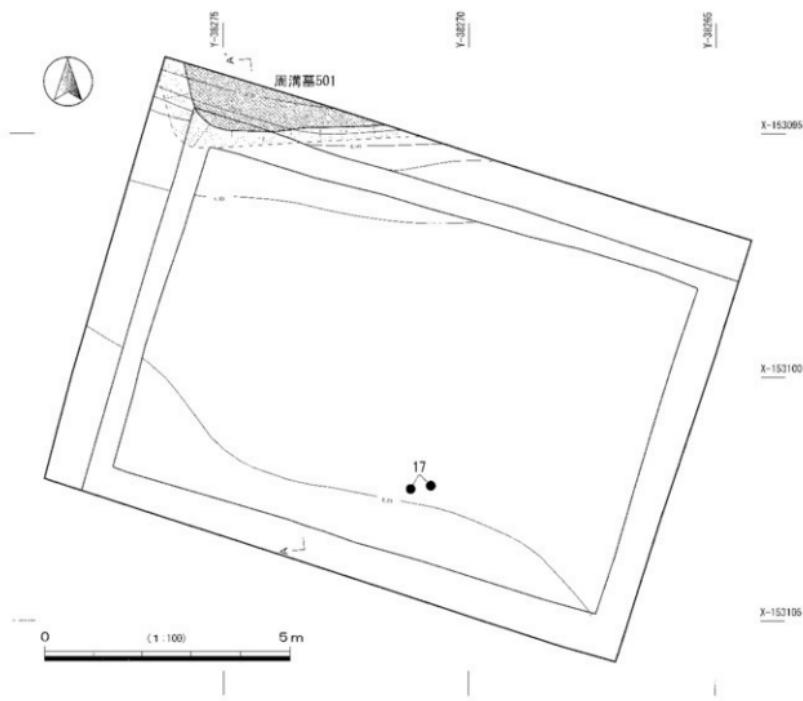
第13図 1区 第4面平面図 ( $S=1/100$ )

#### 第5面(古墳時代前期)

第7層上面(T.P.+5.6~6.0m付近)において、周溝墓を1基(周溝墓501)検出した。周溝墓501は、調査区の北西隅において墳丘盛土が遺存するほか、これ以外の調査区全域が周溝部分に相当する。墳丘は、北北西から南南東に直線的に1.25m伸びた後、東方向に屈曲し、そのまま直線的に3.20m以上伸びる。墳丘は粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルトのブロック土から成るが、盛土構造などは確認できなかった。墳丘の西側と南側は緩やかに下降し、西側と南側に傾斜面を形成する。傾斜面の外側(西側と南側)が周溝部分に相当する。周溝は、西側、南側ともに外側の肩の上がりが認められないことから、さらに本調査区の西側や南側に広がることが推測される。周溝の最深部は、墳頂から0.5m前後下がった地点である。周溝部埋土は、最深部に植物遺体の混在した泥状の堆積物が認められるほか、この上位には砂礫優勢の堆積物が形成される。この内前者については、周溝墓501の成立時に極め

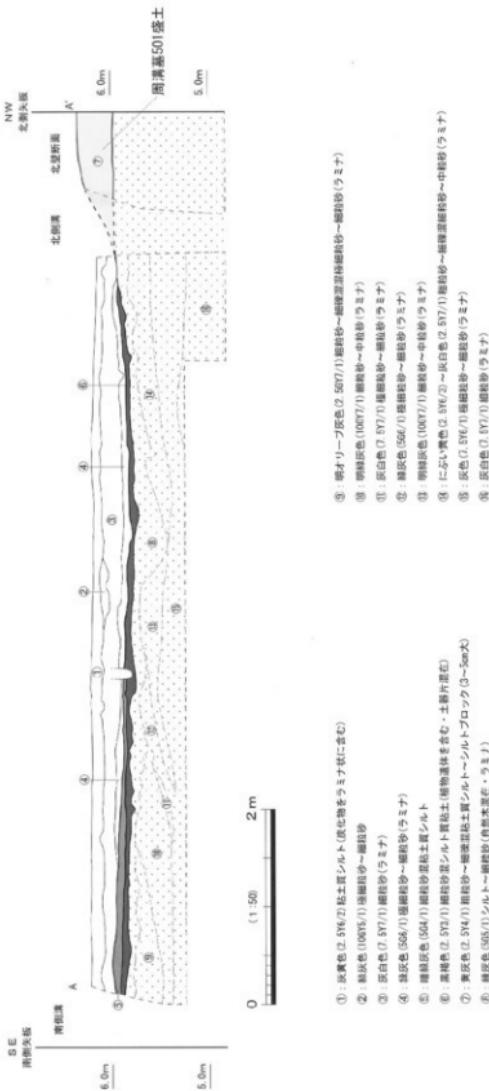


第14図 1区 SK401断面図 ( $S=1/20$ )



第15図 1区 第5面平面図 ( $S = 1/100$ )

て近い時期に形成された地層と考えられる。この泥状堆積物内からは、口縁部に打ち欠きを施した二重口縁の可能性がある壺(17)をはじめ、古式土師器が少量出土した。13点(15~28)を図化した。15・16は広口壺の口縁端部である。大きく開く口縁部とほぼ直立する端面を有する個体で、端面にはS字状の貼り付け浮文を認める。口径はいずれも36.2cmである。15は南側斜面付近で、16は南側周溝内から出土したものであるが、同一個体の可能性が高い。17は口縁部に打ち欠きを認めるほか、体部に穿孔を行う壺である。中位から若干下がった地点に体部最大径(32.4cm)を有し、底部は平底(径6.3cm)を形成する。調整は、体部外面に縦位ミガキを密に施すほか、体部内面には横位～左斜位に板ナデやハケナデを行う。残存器高は33.5cmである。18~21は壺。18・19は口縁部が外反する個体で、体部外面には右上がりのタタキを施す。20は口縁端部を若干肥厚させた個体で、内面には粗いハケナデを施す。口径は17.0cm。21は体部がほぼ球形を呈した個体である。頸部内面の屈曲は鈍い。調整は、体部外面にはハケナデを、内面にはケズリを行う。22~25は壺の底部と考えられる。22・23はドーナツ底、24・25は平底を形成する。いずれも体部外面には右上がりのタタキが施される。26は楕形高杯である。内・外ともに縦位ミガキ調整を行う。



(①)-(④): 第6層系周溝堆積物  
⑤・⑥: 周溝501堆積物  
⑦: 周溝501堆積物  
⑧: 周溝501堆積物 (堆積基盤層に相当)

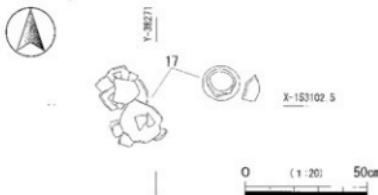
第16図 1区 周溝501断面図 (S=1/50)

口径は8.9cm。27は高杯の柱状部細片。柱状部と裾部の境界にぶい変化点を認める個体で、外面には縦位ミガキが施される。28は砥石である。擦面を2面確認した。これらの遺物は、古墳時代前期前半(布留式期古相)の所産と推測される。

墳丘盛土内にも遺物が混在していた。

この内図化できたのは6点(29~32)である。29・30は壺。いずれも外反する口縁

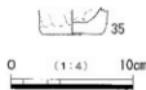
部を有する個体で、外面には右上がりのタタキ調整を施す。口径は29が13.8cm、30が14.9cmである。31は壺の体部下位～底部。底部は平底を呈し、外面には右上がりのタタキが、内面には左斜位に板ナデが施される。底径は4.0cmを測る。32は壺または壺の底部である。底部は突出し、平底を形成する。底径は4.8cmである。33は小型の鉢。口縁部が短く開く個体で、体部は半球状を呈することが考えられる。口径は11.0cmを測る。34は高杯。裾部は大きく開くことが予測される。外面調整はミガキ、内面調整はハケナデである。裾部には円形透孔を1個確認した。以上の遺物は古墳時代初頭(庄内式期)の所産と推測される。



第17図 1区 周溝墓501 南周溝内遺物(17)出土状況平面図

#### 第6面(古墳時代初頭)

第7層下面(T.P.+5.0~5.2m付近)において、溝を1条(SD601)検出した。SD601は、南東-北西方向に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ4.45m以上、幅0.95m、深さ0.40mである。埋土はラミナ構造の発達した砂礫層である。古墳時代初頭に比定される土師器壺の底部細片が1点(35)出土した。35は平底を呈した個体(底径4.9cm)で、内・外面に指頭成形痕を認める。



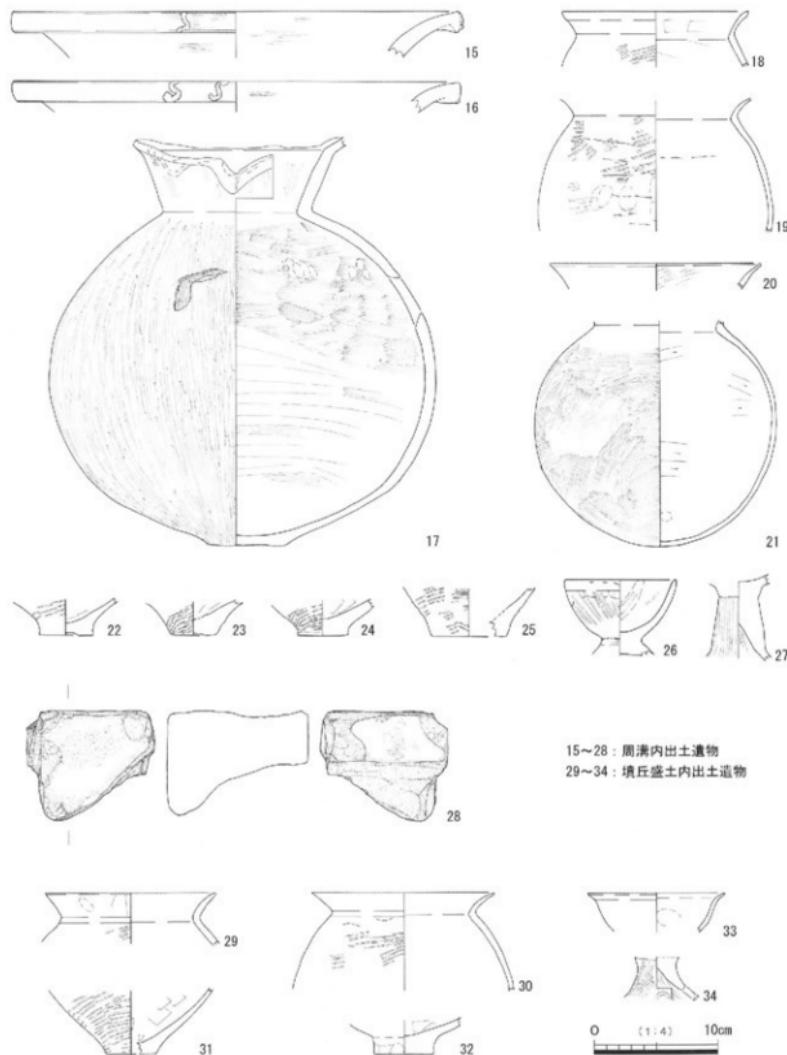
第18図 1区 SD601出土遺物実測図

#### 第7面(古墳時代初頭)

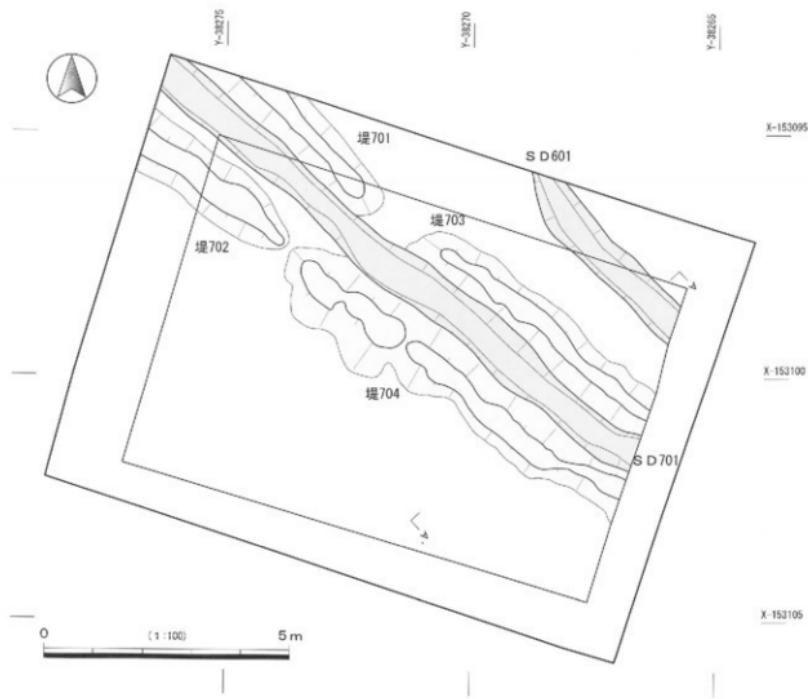
第8層上面(T.P.+5.2~5.3m付近)において、溝を1条(SD701)と、この溝を開削する際に生じた土砂により形成された堤を4基(堤701~704)検出した。

SD701は、南東-北西方向に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ12.4m以上、幅0.85m、深さ0.50mである。埋土はラミナ構造の発達した砂礫層の単層である。出土遺物はなし。

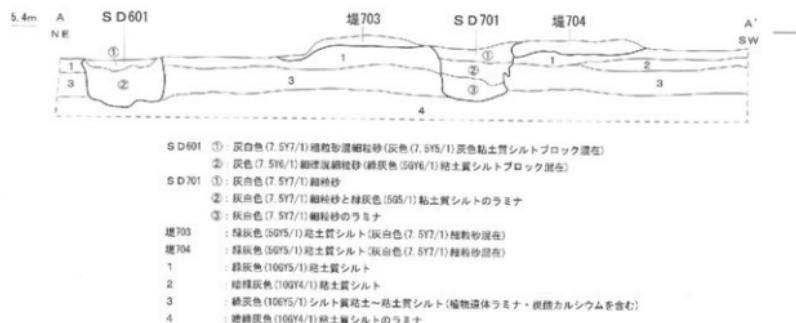
堤701~704は、SD701を挟むようにして検出された。いずれもSD701を開削した際に生じた土砂を母材として造成されている。いずれも上幅0.20~0.30m、下幅1.00~1.55m、高さは0.20前後を測る。断面形状は概ね半球状である。堤701と703、堤702と704の境界付近には堤状の盛土が認められなかった。意図的に形成されたものかは不明であるが、何らかの施設に伴うものの可能性も否定できない。堤母材からの遺物の出土はなかった。



第19図 1区 周溝墓501出土遺物実測図



第20図 1区 第6・7面平面図 ( $S=1/100$ )



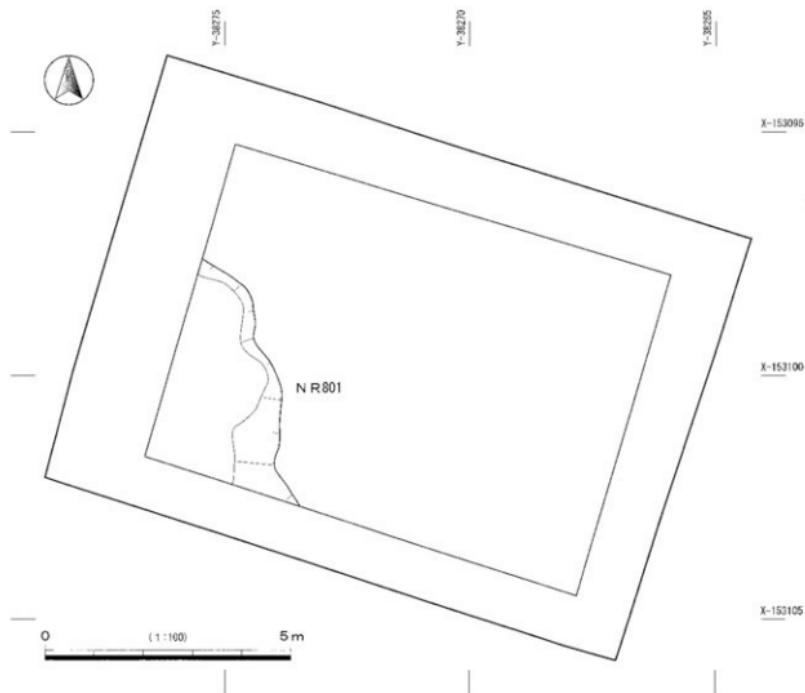
第21図 1区 第6・7面構造断面図 ( $S=1/40$ )

### 第8面(弥生時代中～後期相当)

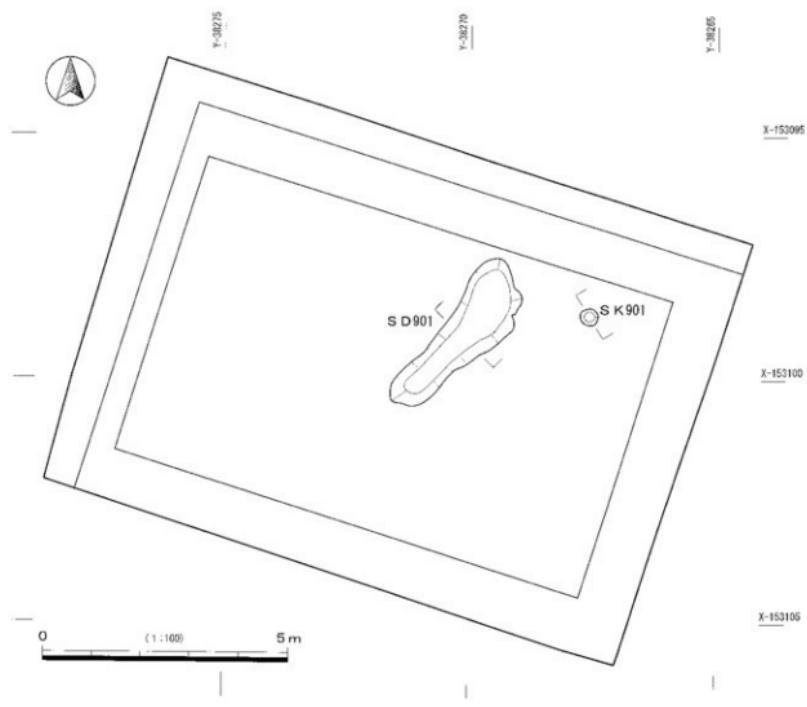
第9層上面(T.P.+4.8～4.9m付近)において、河川を1条(NR801)検出した。NR801は調査区の南西隅で検出されたもので、南東～北西方向に流れる流路の北東肩付近の一部と考えられる。検出規模は長さ5.00m以上、幅3.00m以上である。深さは0.05～0.10mと浅い。埋土はラミナ構造の発達したシルト層である。出土遺物はなし。

### 第9面(弥生時代中～後期相当)

第10層上面(T.P.+4.4m付近)において、土坑を1基(SK901)、溝を1条(SD901)検出した。SK901はほぼ円形を呈した土坑(径0.30m)である。深さは0.30mを測る。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。SD901はSK901の西に隣接する地点で検出された南西～北東方向に伸びる溝である。検出規模は長さ3.70m、幅0.9m、深さ0.13mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。



第22図 1区 第8面平面図 (S=1/100)



第23図 1区 第9面平面図 ( $S = 1/100$ )

#### 第10面(弥生時代前～中期相当)

第11層上面(T.P.+4.1m付近)において、畦状の高まりを3基(畦畔1001～1003)検出した。

畦畔1001は、調査区の北西部で検出した高まりである。東西方向に蛇行しながらに伸びるもので、検出規模は、長さ3.40m、幅1.00～2.10m、高さ0.05mを測る。

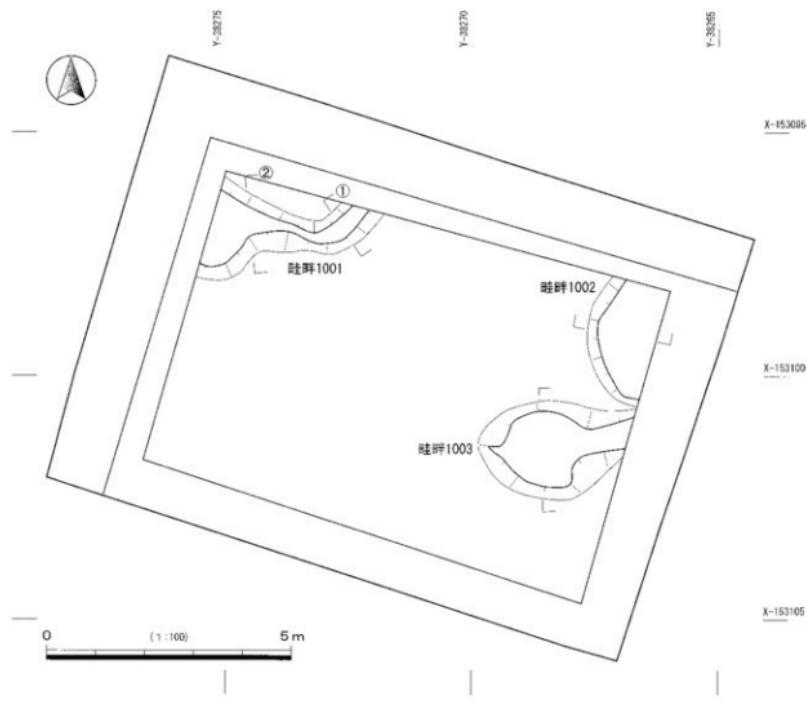
畦畔1002は、調査区の北東部で検出した高まりで、概ね南南西～北北東方向に伸びる。検出規模は、長さ2.45m以上、幅1.70m以上、高さ0.05mである。

畦畔1003は、調査区の東部、畦畔1002の南に隣接して検出した高まりで、概ね東西方向に伸びる。検出規模は、長さ3.30m以上、幅1.25～2.00m以上、高さ0.05mである。

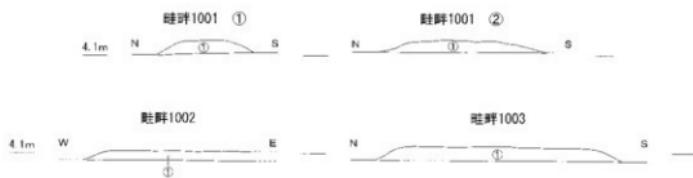


①：暗灰色(B1)粗粒砂～細粒泥シルト質粘土

第24図 1区 SK901・SD901断面図 ( $S = 1/40$ )



第25図 1区 第10面平面図 ( $S=1/100$ )



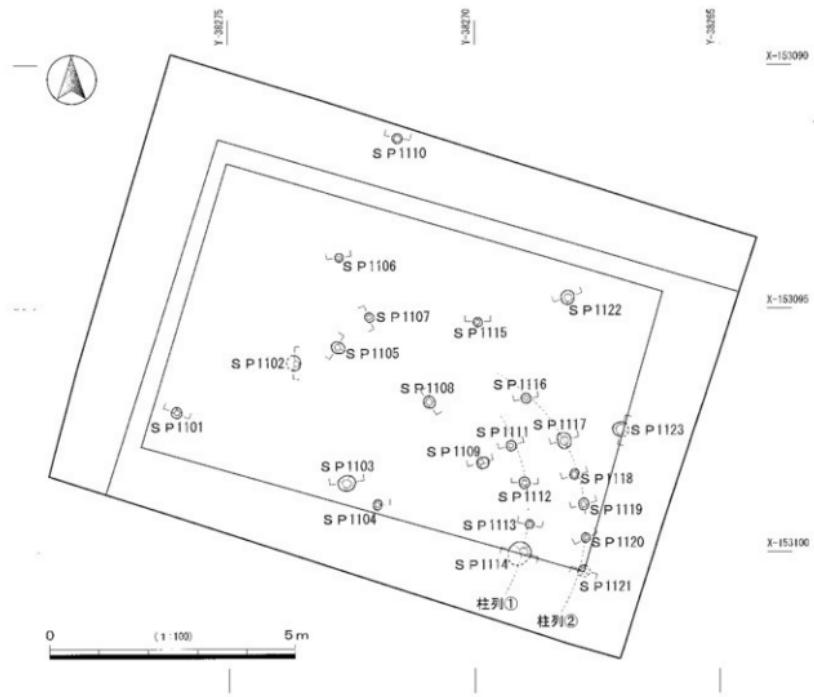
①：黒褐色 (10YR3/1) 粗粒砂～細緻混シルト質粘土

第26図 1区 莊畔1001～1003断面図 ( $S=1/40$ )

#### 第11面(縄文時代晩期～弥生時代前期相当)

第12層上面 (T.P.+3.7m付近)において、柱穴を23基 (S P1101～1123) 検出した。

S P1101～1123は、いずれも径0.15～0.30mの円形を呈する柱穴である。深さは0.30m前後で



第27図 1区 第11面平面図 (S=1/100)

ある。埋土は灰黄褐色を呈した粘土質シルトの単層である。出土遺物はなし。23個の柱穴の内、SP1111~1114、SP1116~1121については、それぞれ円弧を描くような配列が認められる。

#### 第12面(縄文時代晩期~弥生時代前期相当)

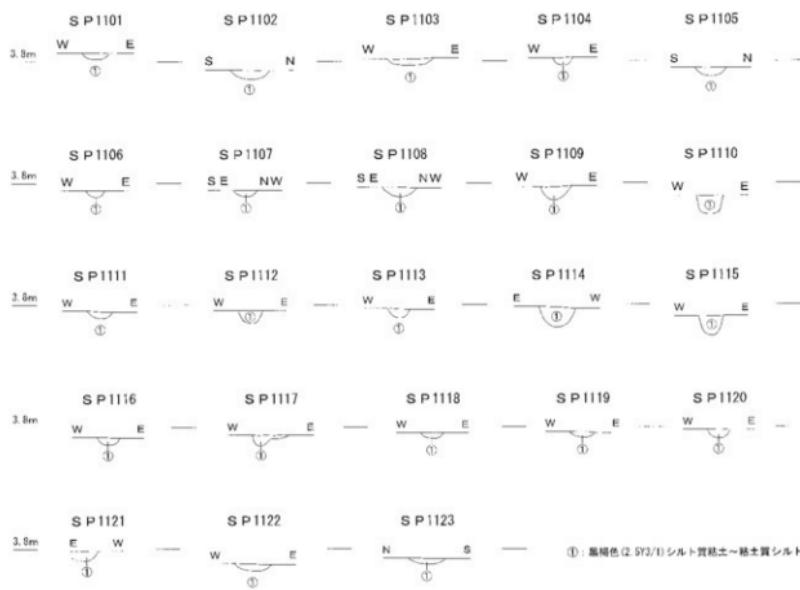
第13層上面(T.P.+3.6m付近)において、溝を2条(SD1201・1202)検出した。

SD1201・1202は、調査区の南西隅で検出した溝である。両者ともに南東~北西方向に並行して伸びる。検出規模は、いずれも長さ1.50m以上、幅0.50m、深さ0.03mを測る。埋土はプロック土の単層。出土遺物はなし。

#### 地層内出土遺物

##### 第1層出土遺物(36・37)

36は須恵器壺の体部下位~高台部(高台径11.6cm)である。「ハ」の字状に開く高台部を有する個体で、調整は、内・外面ともに回転ナデを施す。古代頃の所産であろう。37は追兵瓦の細片で



第28図 1区 第11面造構断面図 ( $S=1/40$ )

ある。一見丸瓦と思われるが、丸瓦でいうところの広端面や狭端面が斜行しながら形成されており、道具瓦と判断した。凹面には糸切り痕や布目痕を認めるほか、凸面はナデ調整を行う。側面は継位ケズリを施す。その他の縁面は横位ケズリで仕上げる。

#### 第3層出土遺物(38)

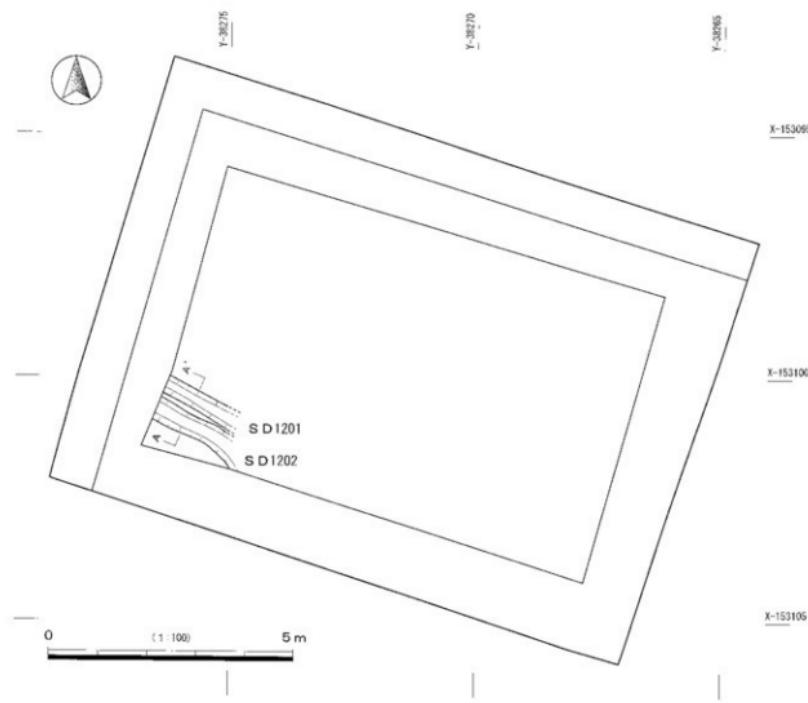
38は土師器の羽釜である。口縁部は「く」の字状に短く屈曲し、端部は丸く終息する個体で、鉗部は水平に短く伸びる。調整は、口縁部や鉗部付近に横ナデを施す以外は、ナデを行う。体部内面は板ナデの可能性がある。口径は23.6cm。13世紀代の所産と考えられる。

#### 第4層出土遺物(39)

39は須恵器杯身。口縁部は内傾しながら直線的に伸びるほか、端部には内傾のにぶい平坦面を認める。受け部は若干上向きに短く伸びる。口径は12.0cmを測る。6世紀前半の所産であろう。

#### 第7層出土遺物(40~42)

40~42は古式土師器である。40は壺。口縁部は内湾し、端部付近が小さく直立する個体である。外面調整は、口縁端部付近に横ナデを施すほか、頸部付近には継位ナデも見える。内面は横位～斜位にミガキが行われる。口径は12.6cmを測る。41は壺。短く外反する口縁部と、上下に若干拡張し、外傾する平坦面を形成する個体である。調整は、内・外面とともに口縁端部付近が横ナデを行なうほかはナデで仕上げる。口径は18.4cmである。42は高杯の柱状部～裾部細片である。柱状部

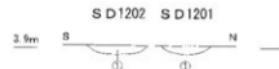


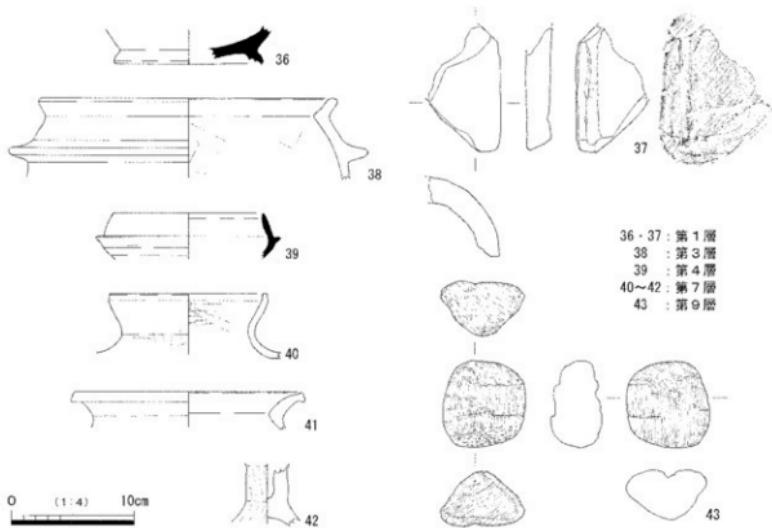
第29図 1区 第12面平面図 ( $S = 1/100$ )

は直立し、裾部との境界には不明瞭ながらも変化点を認める。調整は、外面が縦位ミガキを施すほか、裾部内面に板ナデを行う。

#### 第9層出土遺物(43)

43は木製品である。三角柱を呈する個体である。第30図 1区 SD1201・1202断面図 ( $S = 1/40$ ) 用途等は不明。





第31図 1区 地層内出土遺物実測図

## 第5章 2区の調査成果

### 第1節 基本層序

現地表(T.P.+8.4m前後)下1.6m前後までは、現代の客土・盛土層および搅乱(第0層)である。以下現地表下3.7m前後までの2.1m間で27層におよぶ基本層序を抽出した。第1層は近～現代の旧作土層(T.P.+6.7～6.8m)である。上面が第1面(近～現代)である。第2層は近世以降の作土層(T.P.+6.6～6.7m)である。第3層は近世頃の作土層(T.P.+6.3～6.6m)である。第4層は近世頃の島畑形成層(T.P.+6.3～6.7m)に相当する。上面が第2面(近世以降)である。第5層は中世頃の土壤化層(T.P.+6.3m)である。上面が第3面(中世)にあたる。第6層は調査区の中央～南部に薄く広がる河川堆積層(T.P.+6.2～6.3m)である。上面は第4面(古代相当)である。第7層は調査区の中央～南部に展開する畑作土層(T.P.+6.1～6.2m)である。上面が第5面(古代相当)である。第8層は河川堆積層(T.P.+6.2～6.3m)である。第9層は作土層(T.P.+5.8～6.1m)である。上面が第6面(古墳時代中期相当)にあたる。第10層は調査区の南部で確認した河川堆積層(T.P.+6.0m)である。第11層は黒褐色を呈した作土層(T.P.+5.8～6.0m)である。上面が第7面(古墳時代前期相当)である。第12層は湿地性堆積層(T.P.+5.8～5.9m)である。第13層湿地性堆積層(T.P.+5.5～5.7m)には地震による変形構造を認める。上面が第8面(古墳時代前期相当)である。第14層は湿地性堆積層(T.P.+5.5～5.6m)である。第15層は黒色を呈した土壤層(T.P.+5.1～5.4m)である。上面が第9面(古墳時代初頭)である。第16層も土壤化層(T.P.+5.0～5.3m)である。上面が第10面(古墳時代初頭)である。第17層は河川堆積層(T.P.+4.9～5.3m)である。第18層は調査区北部で確認した湿地性堆積層(T.P.+4.9～5.1m)である。第19層は河川堆積層(T.P.+4.9～5.2m)で、第11面検出のN R 1101埋土に相当する。第20層は湿地性堆積層(T.P.+4.8～5.0m)で、上面が第11面(弥生時代後期初頭)にあたる。第21層(T.P.+4.7～4.8m)・第22層(T.P.+4.6m)は湿地性堆積層である。第23層は河川堆積層(T.P.+4.5～4.7m)である。第24層は湿地性堆積層(T.P.+4.4m)である。第25層(T.P.+4.3m)、第26層(T.P.+4.2～4.3m)は土壤化層で、作土層の可能性もある。第27層は河川堆積層(T.P.+4.1m以下)である。

第0層：現代の客土・盛土層、および搅乱

第1層：暗灰色(N3/)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

旧作土層(T.P.+6.7～6.8m)である。調査区のほぼ全域で確認したグライ化の顯著な搅拌層で、層厚は10～20cmである。上面が第1面(近～現代)に相当する。

第2層：オリーブ灰色(2.5GY5/1～5GY5/1)粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト

近世以降の作土層(T.P.+6.6～6.7m)である。調査区全域に分布する搅拌層で、層厚は30cm前後を測る。概ね3～4層に細分できた。下面には、鋤溝による窪みを認める。

第3層：灰オリーブ色(5Y5/2～5Y5/3)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

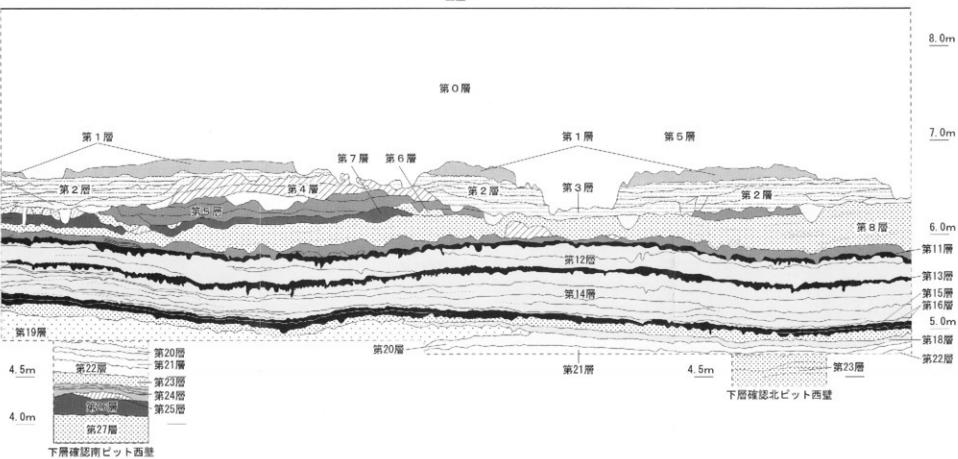
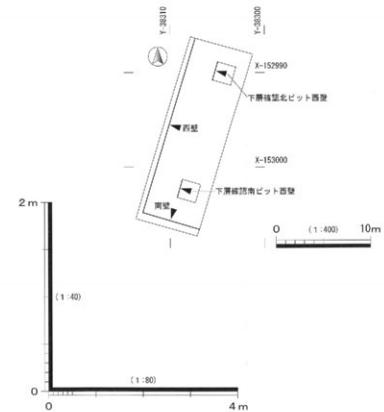
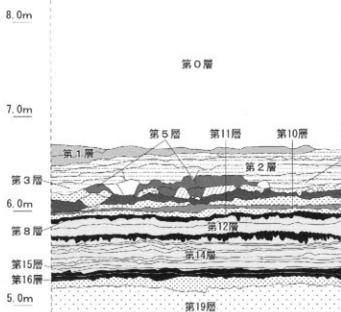
近世頃に比定される作土層(T.P.-6.3～6.6m)である。部分的に第2層の搅拌による削平を受けるが、概ね調査区全域に展開する。層厚は10cm前後。下面には、鋤溝による窪みを確認した。グライ化が進行するが、部分的に炭酸化鉄分の沈着を認める。

9.0m

9.0m

南壁

西壁



第0層：粘土・盛土層、および擾乱層

第1層：暗灰色粗粒砂～細緻混粘土質シルト（旧作土層）

第2層：オリーブ灰色粗粒砂～細緻混粘土質シルト～シルト（作土層）

第3層：灰オリーブ色粗粒砂～細緻混粘土質シルト（作土層）

第4層：「ぶい」褐色～明黄色粗粒砂～細緻混粘土質シルト（鳥糞形成層）

第5層：褐色～「ぶい」褐色粗粒砂～細緻混粘土質シルト～極細粒砂（土壤化層）

第6層：灰白色粗粒砂～中粒砂（河川堆積層）

第7層：黄褐色シルト（鉢作土層）

第8層：灰黄色粗粒砂～中粒砂（河川堆積層）

第9層：灰色シルト質粘土～粘土質シルト（作土層）

第10層：オリーブ灰白色シルト～極細粒砂（河川堆積層）

第11層：黑褐色シルト質粘土～粘土質シルト（作土層）

第12層：灰黃褐色～灰褐色シルト質粘土（湿地性堆積層）

第13層：灰色シルト質粘土（湿地性堆積層）

第14層：灰色～黃褐色シルト質粘土（湿地性堆積層）

第15層：黑色粗粒砂～細緻粘土質シルト（土壤化層）

第16層：黃灰色粘土質シルト～シルト（土壤化層）

第17層：オリーブ灰色粘土質シルト～シルト（河川堆積層）

第18層：オリーブ灰色シルト質粘土（湿地性堆積層）

第19層：暗オリーブ灰色～淺黃色シルト～中粒砂（河川堆積層）

第20層：暗オリーブ灰色シルト質粘土（湿地性堆積層）

第21層：暗灰色シルト質粘土（湿地性堆積層）

第22層：オリーブ灰色シルト質粘土（湿地性堆積層）

第23層：オリーブ灰色～灰黃褐色粘土質シルト～極粗粒砂（河川堆積層）

第24層：灰オリーブ色～黑褐色シルト質粘土～粘土質シルト（湿地性堆積層）

第25層：暗灰色粗粒砂～細緻混粘土質シルト～極細粒砂（土壤化層）

第26層：暗青灰色粘土質シルト～細粒砂（土壤化層）

第27層：「ぶい」黃褐色中粒砂～粗粒砂（河川堆積層）

第32図 2区 断面図 (S=縦:1/40 横:1/80)

第4層：にぶい褐色(7.5YR5/3)～明褐色(7.5YR5/4)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

調査区中央やや南よりで部分的に分布する島畑形成層(島畑201に相当 T.P.+6.3～6.7m)である。雲状の酸化マンガンの沈着が顕著である。層厚は約20cmで、2層に細分できた。7～8世紀に比定される土師器(44)が出土した。上面が第2面(近世以降)である。

第5層：褐色(7.5YR4/4)～にぶい褐色(7.5YR5/3)粗粒砂～細礫混粘土質シルト～極細粒砂

第4層島畑形成層の下層で確認した土壤化層(T.P.+6.3m)である。第3層作土層に削平されつつ、調査区北部や中部、南部で部分的に分布する。層厚は約20cm。2層に細分できた。9世紀代に比定される土師器細片(57～63)が出土した。上面が第3面(中世)である。

第6層：灰白色(2.5Y7/1)細粒砂～中粒砂

シート状に堆積した河川堆積層(T.P.+6.2～6.3m)で、調査区南部に分布する。本調査区近辺に存在する河川からの溢流堆積物と考えられる。層厚は約10cm。調査区北部では第2・3層の攪拌により削平を受けた可能性が高い。上面は第4面(古代相当)にあたる。

第7層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト

調査区の中央～南部に展開する畑作土層(T.P.+6.1～6.2m)である。攪拌により灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂～中粒砂ブロック土(1～2cm)の混在が顕著である。層厚は10～12cm。上面において第5面(古代相当)を検出した。

第8層：灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂～中粒砂

調査区全域に広がる河川堆積層(T.P.+6.2～6.3m)である。調査区南部では層厚10cm未満であるが、北部に向かうにつれて層厚を増し、北端では40cm前後になる。北部ではラミナ構造の発達が顕著である。古代に比定される土師器細片(64・65)が出土した。

第9層：灰色(N4/)シルト質粘土～粘土質シルト

調査区全域に分布する作土層(T.P.+5.8～6.1m)である。上面には緩やかな起伏を認める。層厚は約10cmである。上面が第6面(古墳時代中期相当)である。

第10層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト～極細粒砂

調査区南部で確認した河川堆積層(T.P.+6.0m)である。シート状に薄く形成された地層で、調査区周辺に存在する河川からの溢流堆積物に相当する。層厚は10cm未満。

第11層：黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土～粘土質シルト

黒褐色を呈した作土層(T.P.+5.8～6.0m)で、調査区全域に分布する。層厚は10cm前後。上面は、第9・10層を転写するように緩やかに凹凸を成す。上面が第7面(古墳時代前期相当)にあたる。

第12層：灰黄褐色(10YR4/2)～褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土

調査区全域に形成された湿地性堆積層(T.P.+5.8～5.9m)である。植物遺体をラミナ状に含む粘性の強い地層である。層厚は約30cm。層界が不明瞭であるが複数に細分できた。

第13層：灰色(5Y4/1)シルト質粘土

灰色を呈した湿地性堆積層(T.P.+5.5～5.7m)である。炭化物や植物遺体をラミナ状に含むほか、炭酸カルシウム塊が混在する地層で、層厚は10cm前後。本層には、本層形成時に発生した地震による変形構造が認められた。上面が第8面(古墳時代前期相当)である。

第14層：灰色(10Y5/1)～黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土

湿地性堆積層(T.P.+5.5~5.6m)である。非常に細かい植物遺体ラミナ層から成る地層で、層厚は40~50cmを測る。第9・11~13層同様、上面において緩やかな起伏を認める。

第15層：黒色(10VR2/1)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

黒色を呈した土壤層(T.P.+5.1~5.4m)である。調査区全域に存在する地層で、層厚は10cm未満である。古墳時代初頭(庄内式期)の遺物(51~54)が極少量出土した。上面が第9面(古墳時代初頭)に相当する。

第16層：黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト～シルト

第15層の土壤化の影響が若干残った層界の不明瞭な地層(T.P.+5.0~5.3m)である。炭化物や植物遺体を含むほか、オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土質シルトのブロック(1~2cm大)も混在する。層厚は10cm未満。上面が第10面(古墳時代初頭)に相当する。

第17層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土質シルト～シルト

オリーブ灰色が鮮やかな河川堆積層(T.P.+4.9~5.3m)である。調査区全域に分布する。層厚は15cm前後である。

第18層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質粘土

調査区の北部で確認した湿地性堆積層(T.P.-4.9~5.1m)である。層厚は10cm未満。

第19層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)～浅黄色(5Y7/3)シルト～中粒砂

調査区の中央から南部に存在する砂礫優勢の河川堆積層(T.P.+4.9~5.2m)である。最大層厚は30cm以上である。南部ではラミナ構造が顕著であるが、北部では不明瞭になる。第11面検出のN R1101の埋土に相当する。

第20層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土

植物遺体をラミナ状に含む湿地性堆積層(T.P.+4.8~5.0m)である。調査区北部に分布する地層で、南部はN R1101に削平される。層厚は10cm前後。上面において第11面(弥生時代後期初頭)を検出した。

第21層：暗灰色(N3/)シルト質粘土

湿地性堆積層(T.P.+4.7~4.8m)である。炭化物や植物遺体をラミナ状に含む粘性の強い地層である。層厚は約10cmである。

第22層：オリーブ灰色(5GY5/1)シルト質粘土

調査区北端や下層確認南ピットで確認した湿地性堆積層(T.P.+4.6m)である。炭化物や植物遺体をラミナ状に含む粘性の強い地層である。層厚は約10cmである。

第23層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)～灰黄色(2.5Y7/2)粘土質シルト～極粗粒砂

下層確認北・南ピットで確認した河川堆積層(T.P.+4.5~4.7m)である。層厚は下層確認南ピットで10cm前後、下層確認北ピットで30cm以上を測る。ラミナ構造の発達した地層である。調査区北部やさらに北に流心をもつ河川に伴う砂礫層の可能性がある。

第24層：灰オリーブ色～黒褐色シルト質粘土～粘土質シルト

下層確認南ピットで確認した湿地性堆積層(T.P.+4.4m)である。層厚は10~20cmである。炭化物や植物遺体のラミナを含む地層で、3層に細分できた。

第25層：暗灰色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～極細粒砂

下層確認南ピットで確認した土壤化層(T.P.+4.3m)である。南東～北西方向に延びる畦

畔の形成層の可能性も考えられる。層厚は10cm未満。

第26層：暗青灰色(5B4/1)粘土質シルト～細粒砂

下層確認用ピットで確認した土壤化層(T.P.+4.2~4.3m)である。第25層畔に付随する作土層の可能性が高い。層厚は20cmを測る。

第27層：にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂～粗粒砂

下層確認用ピットで確認した河川堆積層(T.P.+4.1m以下)である。ラミナ構造の発達が顕著である。層厚は30cm以上である。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 第1面（近～現代）

第0層を除去し、第1層上面(T.P.+6.8m付近)において作土層を確認した。顕著な遺構は検出されなかつた。

### 第2面（近世以降）

第4層上面(T.P.+6.3~6.7m)において溝を11条(S D201~211)、水田を1筆(水田201)、鳥畠を1基(鳥畠201)検出した。

S D201は、調査区の北部で検出した東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.70m以上、幅0.72m、深さ0.10mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層である。土師器細片が極少量出土した。図化は不可。

S D202は、S D201の南側0.40mを並行して伸びる溝である。検出規模は、長さ5.70m以上、幅0.32m、深さ0.06mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層。出土遺物はなし。

S D203は、調査区北部で検出した東西に直線的に伸びる溝である。南部は水田201に切られるほか、部分的にS D201や202に切られる。検出規模は、長さ5.70m以上、幅2.50m以上、深さ0.10mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D204は、調査区北端で検出した南北に直線的に伸びる溝である。北部は調査区外に至るほか、南部はS D203に切られる。検出規模は、長さ0.40m以上、幅0.27m、深さ0.07mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層である。出土遺物はなし。

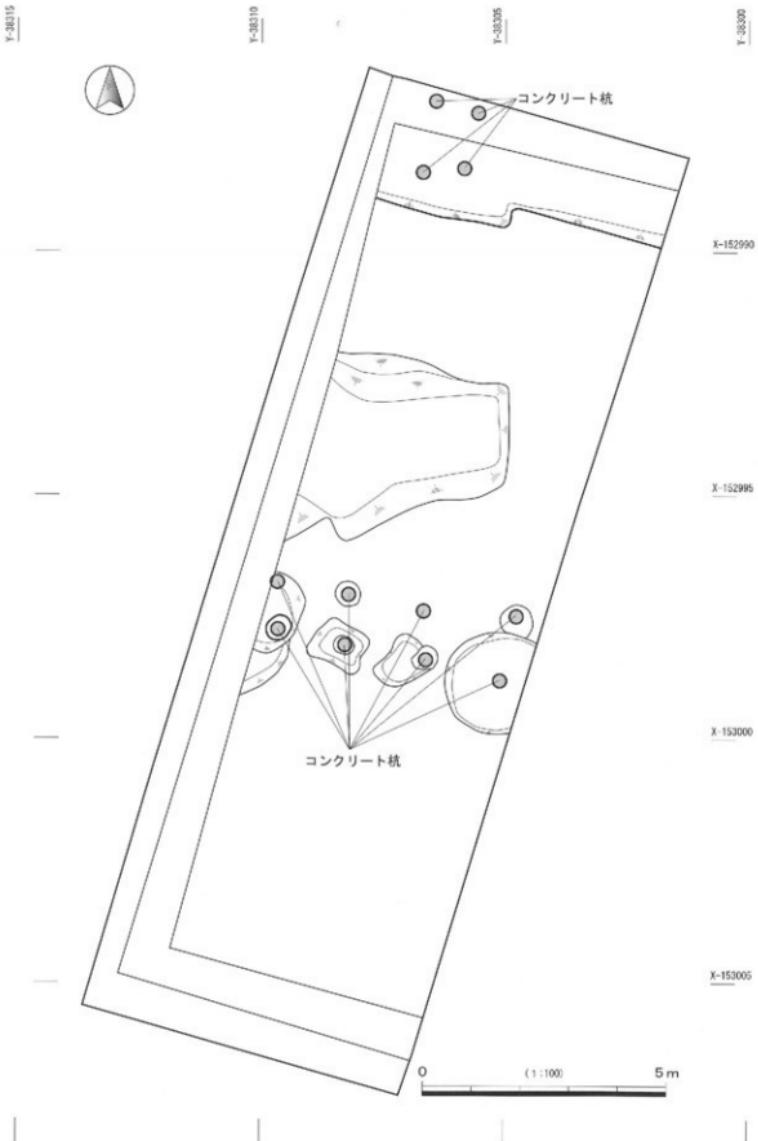
S D205は、調査区の北部を東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.10m以上、幅0.25m、深さ0.10mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層。出土遺物はなし。

S D206は、調査区のほぼ中央を東南東～西北西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.70m以上、幅0.24m、深さ0.05mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D207・208は、調査区北部を南北に並行して伸びる溝である。北部をS D203に切られる。検出規模は、長さ2.60m以上、幅0.25m、深さ0.10mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D209は、調査区の南東部を東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ1.06m以上、幅0.20m、深さ0.08mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層。出土遺物はなし。

S D210・211は、調査区南端を南北に並行して伸びる溝である。検出規模は、長さ2.80m以上、



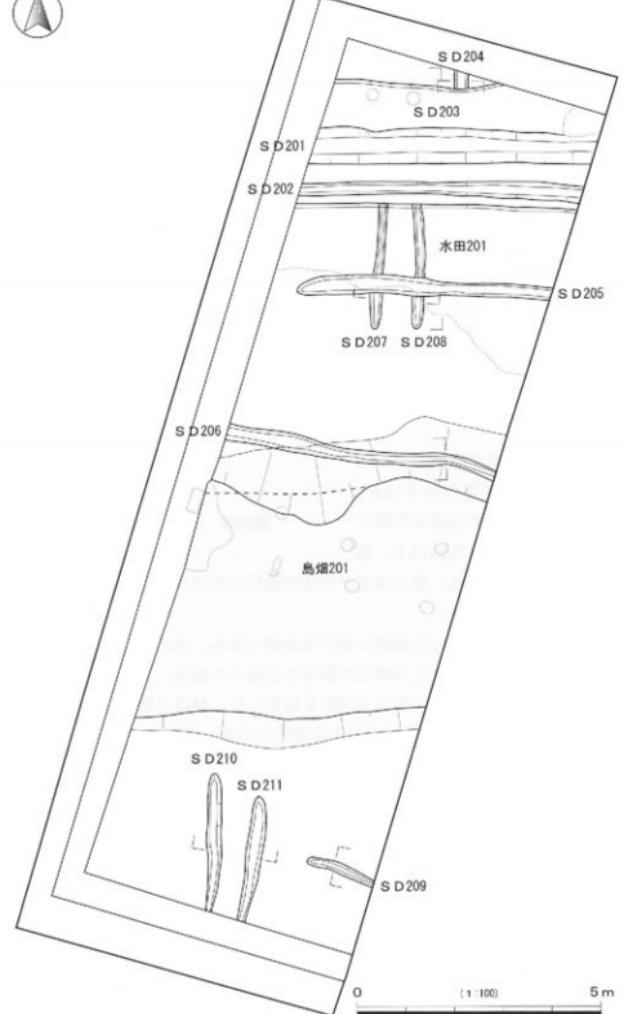
第33図 2区 第1面平面図 ( $S=1/100$ )

Y-38215

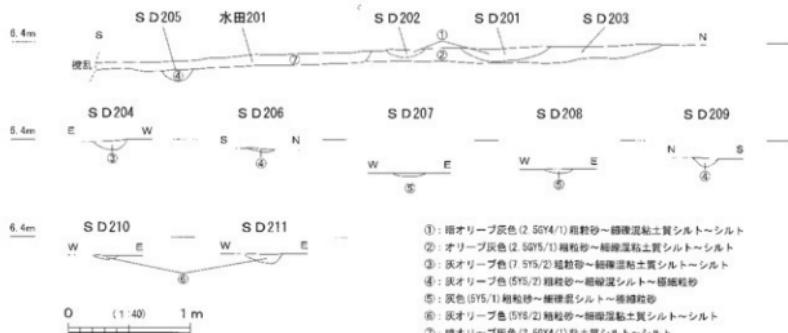
Y-38210

Y-38205

Y-38200



第34図 2区 第2面平面図 (S=1/100)



幅0.25m、深さ0.08mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層。出土遺物はなし。

水田201は、調査区北部で検出した水田である。北部をSD 203に切られるほか、南部は攪乱に削平されるため全容は不明である。検出規模は、東西長5.70m以上、幅3.00m以上、深さ0.08mである。埋土はグライ化の進行したブロック土の単層である。出土遺物はなし。

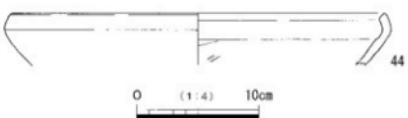
島畠201は、中央やや南で検出した東西に伸びる島畠である。検出規模は、長5.70m以上、幅6.00m、高さ0.30mである。島畠形成土は酸化の顕著な2層から成る。形成土層内には土師器や須恵器の細片が少量混在していた。この内1点(44)を図化した。44は土師器鉢である。体部は上外方に内湾気味に開き、口縁部は端部付近で内傾する個体である。端面には内傾する平坦面を認める。調整は、口縁部が内・外面ともに横ナデを施すほか、体部内面には板ナデを行う。口径は30.3cmを測る。7~8世紀の所産であろう。

### 第3面（中世）

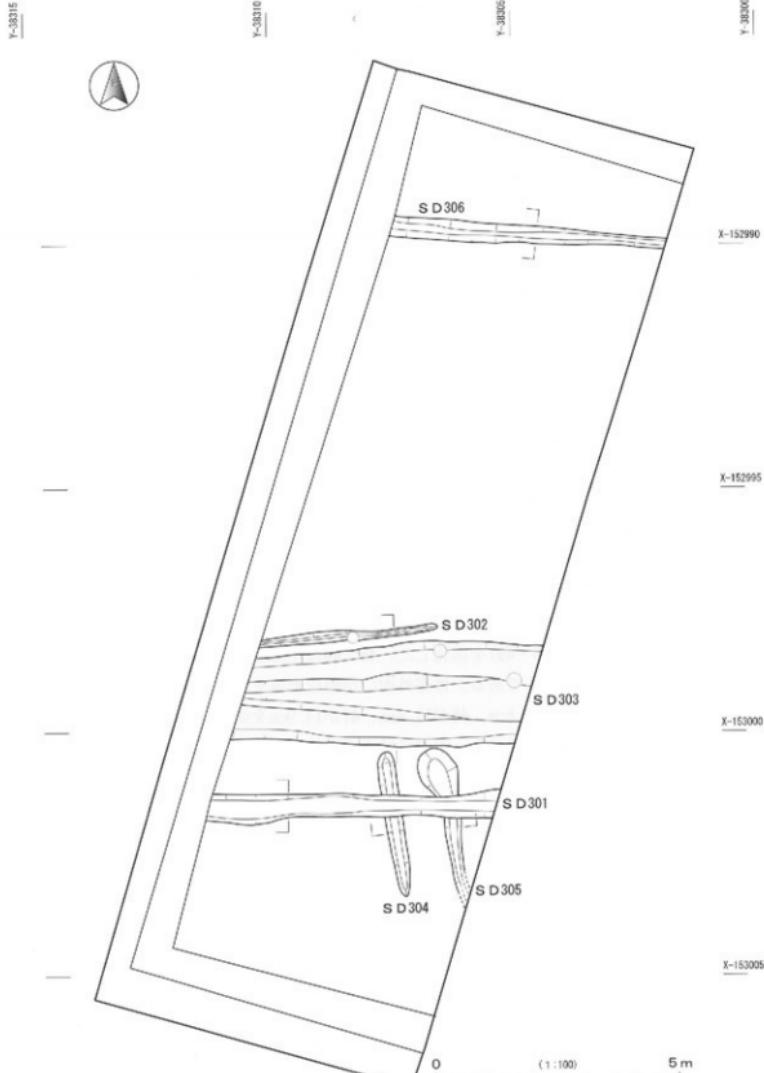
第5層上面(T.P.+6.3m付近)において溝を6条(SD 301~306)検出した。これらの溝群は耕作に伴う勤溝と思われる。このうちSD 303は、島畠201の直下に転写するように位置するほか、本面検出の他の溝に比して幅が広いなどの特徴を有することから、坪境溝の可能性が推測される。

SD 301は、調査区の南部で検出した東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.90m以上、幅0.70m、深さ0.08mである。埋土はブロック土の単層である。土師器や瓦器の細片が極少量出土した。いずれも図化はできなかった。

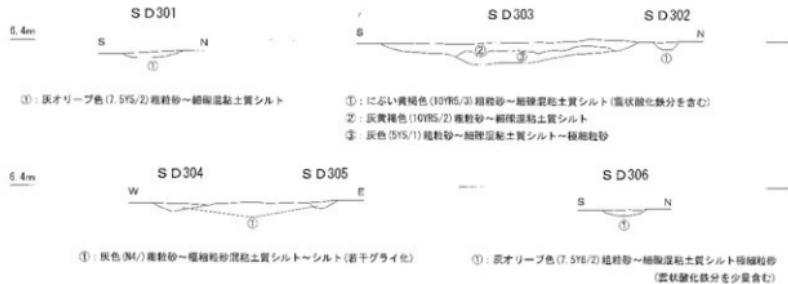
SD 302は、調査区の中央やや南で検出した東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長



第36図 2区 島畠201出土遺物実測図



第37図 2区 第3面平面図 ( $S = 1/100$ )



第38図 2区 第3面造構断面図 ( $S=1/40$ )

さ3.62m以上、幅0.20m、深さ0.06mである。埋土はブロック土のである。土師器細片が極少量出土した。固化は不可であった。

S D 303は、調査区の中央やや南で検出した東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.90m以上、幅2.10m、深さ0.17mである。埋土はブロック土の単層で、土師器や須恵器の細片が出土した。この内5点(45~49)を図化した。45~49は土師器楕の細片である。45~47は口縁部外面に一段のナデを施す個体である。体部外面に指頭成形痕を認めるほか、内面には横ナデやハケナデを行う。口径は45が $14.8\text{cm}$ 、46が $11.8\text{cm}$ 、47が $14.9\text{cm}$ を測る。48・49は高台部細片。高台形状はいずれも断面三角形を呈する。内面にはナデが見えるほか、底面には回転ナデを認める。高台径は48が $7.0\text{cm}$ 、49が $6.0\text{cm}$ である。帰属時期は9世紀代と推測される。

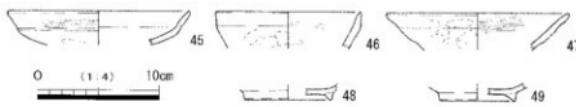
S D 304・305は、調査区の南東部で検出した南北に並行して伸びる溝である。検出規模は、長さ3.00m、幅0.25~0.47m、深さ0.06mである。埋土はブロック土の単層。S D 304からは土師器細片が極少量(図化は不可)出土した。

S D 306は、調査区の北部で検出した東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.90m以上、幅0.36m、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

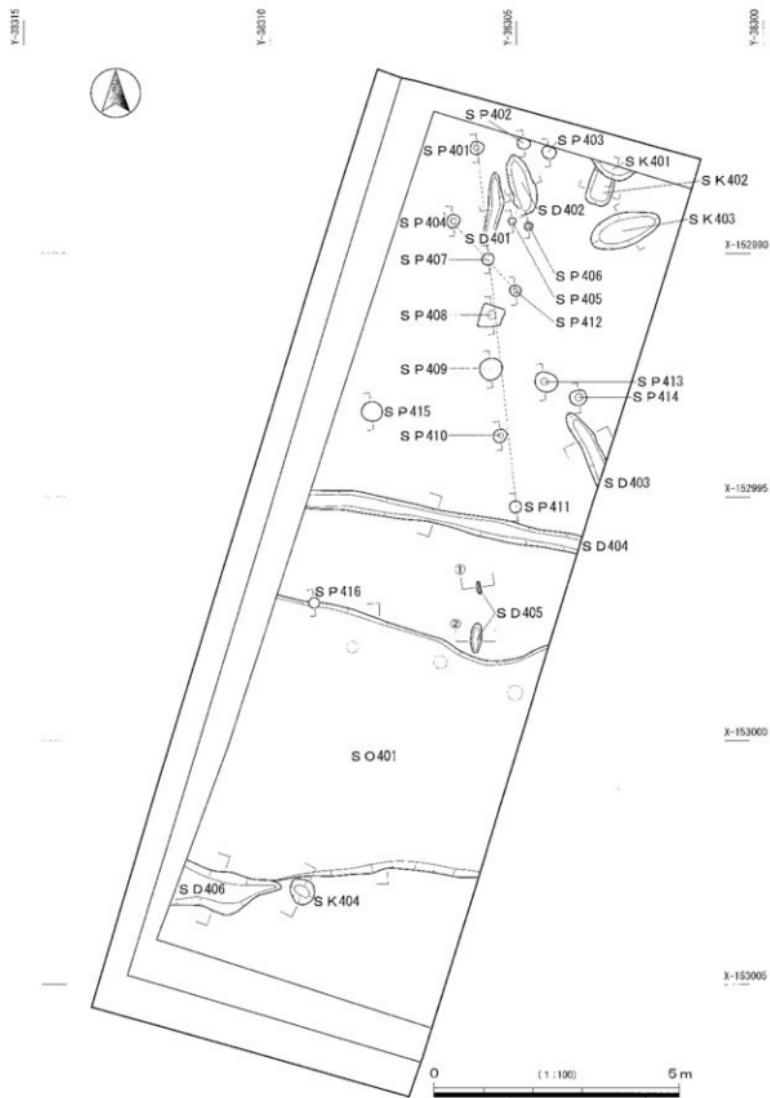
#### 第4面(古代相当)

第6層上面(T.P.+6.2~6.3m)において土坑を4基(S K 401~404)、溝を6条(S D 401~406)、柱穴を16個(S P 401~416)、落ち込みを1ヶ所(S O 401)検出した。

S K 401は、調査区の北端で検出した土坑である。北部が側溝に切られるため全容は不明であるが、円形~橢円形を呈したと推測される。検出規模は、東西長0.92m、南北長0.36m以上、深さ0.16mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。



第39図 2区 S D 303出土遺物実測図



第40図 2区 第4面平面図 (S=1/100)

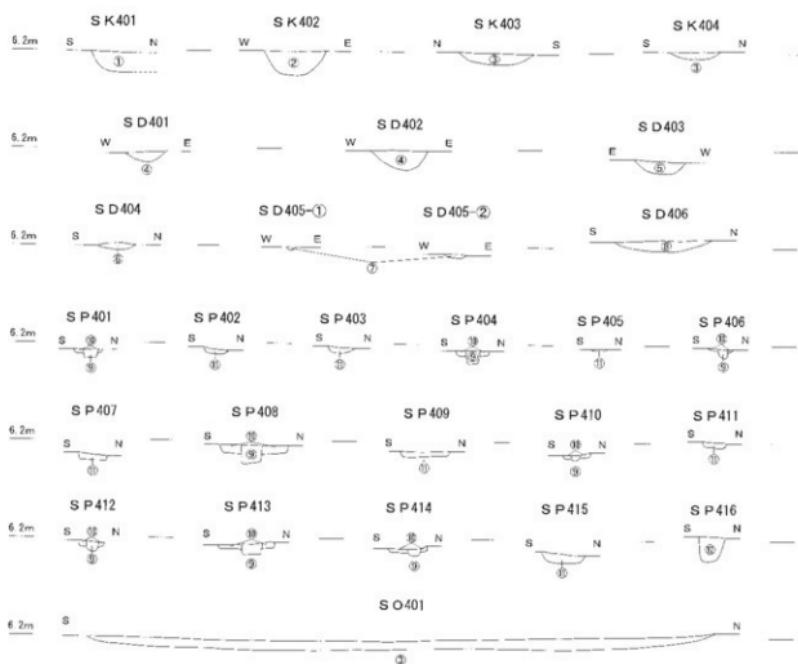
S K 402は、S K 401の南に隣接して検出した土坑である。北部をS K 401に切られるため全容は不明であるが、南西-北東主軸の隅丸長方形を呈したと推測される。検出規模は、長さ0.60m以上、幅0.47m、深さ0.16mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S K 403は、S K 402の南東約0.30mで検出した南西-北東主軸の土坑である。検出規模は、長さ1.50m、幅0.40m、深さ0.12mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S K 404は、調査区の南部で検出した不整円形土坑である。検出規模は、径0.50m、深さ0.06mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D 401は、調査区の北部で検出した南北に伸びる溝である。検出規模は、長さ1.25m、幅0.34m、深さ0.08mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D 402は、S D 401の東に位置する南北-北西に伸びる溝である。検出規模は、長さ1.25m、



- ①: 黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト
- ②: 細皮黄色(2.5Y6/2)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト～シルト
- ③: 灰色(5Y5/1)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト～シルト
- ④: 細皮黄色(2.5Y4/2)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト～シルト
- ⑤: 黄褐色(2.5Y4/1)シルト質粘土～粗粒砂シルトブロック(2~3cm大)
- ⑥: 深オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト～シルト

- ⑦: 稲灰色(3/0)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト(植物遺体を含む)
- ⑧: 深オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト～シルト
- ⑨: 綠オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト(柱部分)
- ⑩: オリーブ灰色(2.5GY5/1)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト～シルト(彫形部分)
- ⑪: 成熟黃色(2.5Y5/2)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト～シルト
- ⑫: 深オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗粒砂～細緻泥粘土質シルト

第41図 2区 第4面遺構断面図 (S=1/40)

幅0.47m、深さ0.18mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D403は、調査区の中央東端に位置する南東-北西に伸びる溝である。検出規模は、長さ1.50m以上、幅0.42m、深さ0.10mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D404は、調査区の中央に位置する南東-北西に伸びる溝である。検出規模

は、長さ5.50m以上、幅0.32m、深さ0.06mである。埋土はブロック土の単層である。土師器や須恵器の細片が極少量出土した。この内1点(50)を図化した。50は須恵器器台と考えられる口縁部-口縁部の細片である。口縁部は上外方に内湾気味に開くほか、口縁端部にはほぼ水平な平坦面を形成する個体である。調整は回転ナデが主体であるが、口縁部外面下位には横位ケズリを確認した。口径は34.9cmを測る。6世紀後半の所産と考えられる。

S D405は、調査区中央やや南で検出した南北に伸びる溝である。南北2本に分断されるが、埋土の状況から一連の溝と判断した。検出規模は、長さ1.50m、幅0.08~0.20m、深さ0.25~0.60mである。埋土は黒色を呈したブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D406は、調査区の南西部で検出した東西に伸びる溝である。検出規模は、長さ2.20m以上、幅0.80m、深さ0.10mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S P401~416は調査区の北半で検出した柱穴群である。掘形は概ね円形を呈するが、S P408のように方形掘形のものも存在する。配列の規格性を見出すことは困難であったが、わずかにS P401とS P407~411や、S P404・407・412などが一直線上に並ぶ可能性が推測される。検出規模は、径0.15(S P405)~0.45m(S P409)を測り、0.25m前後のものが多い。掘形の中央付近には柱痕跡(径0.08m)を認める。深さは0.10m前後である。出土遺物は、S P414の掘形内から土師器細片が極少量(図化は不可)出土したのみである。

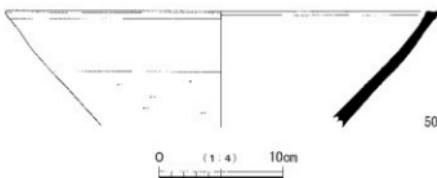
S O401は、調査区の南部に広がる落ち込みである。検出規模は、東西長5.60m以上、南北長5.50m、深さ0.10mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

## 第5面（古代相当）

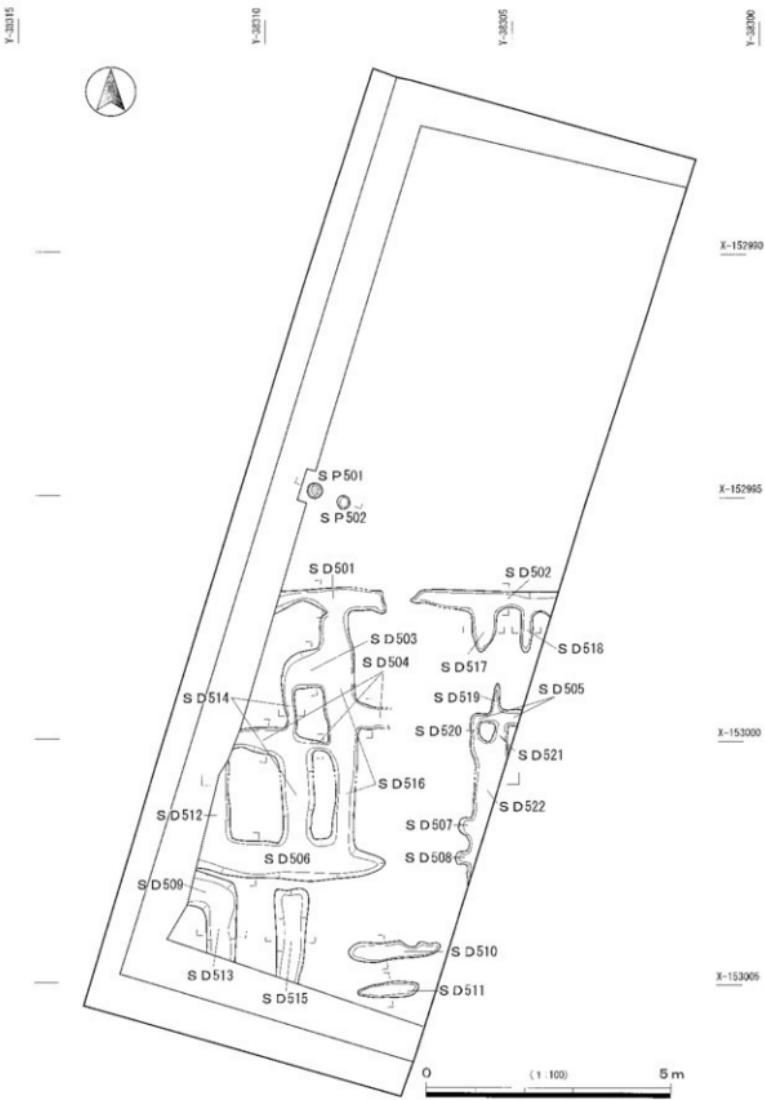
第7層上面(T.P.+6.1~6.2m付近)において溝を22条(S D501~522)、柱穴を2個(S P501・502)検出した。

S D501~522は、調査区の南半で検出した溝群である。南北に伸びる溝群(S D501~511)と東西に伸びる溝群(S D512~522)に区分される。検出規模は、いずれも長さ0.50~4.00m以上、幅0.30~0.80m、深さ0.10m前後を測る。埋土は、本調査面上を覆う第6層河川堆積層に相当する。出土遺物は、各溝から土師器や須恵器の細片が極少量出土(図化は不可)した。これらの溝群は、畑耕作に伴う歴溝と推測される。なお該部分は、先述した第6層河川堆積層に削平を受けており、平面的に検出することはできなかった。

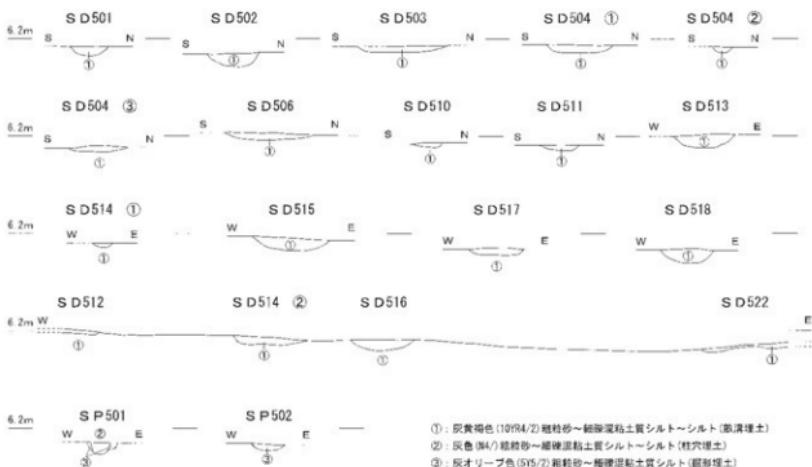
S P501は、調査区の中央西端で検出した円形掘形の柱穴である。検出規模は、径0.30m、深



第42図 2区 S D404出土遺物実測図



第43図 2区 第5面平面図 ( $S=1/100$ )



第44図 2区 第5面遺構断面図 (S=1/40)

さ0.08mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなかった。

S P502は、S P501の南東に隣接して検出した円形掘形の柱穴である。検出規模は、径0.26m、深さ0.06mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなかった。

#### 第6面（古墳時代中期相当）

第9層上面(T.P.-5.9~6.0m)において溝を4条(S D601~604)、畦畔を8条(畦畔601~608)、水田を8箇(水田601~608)検出した。このうち溝群については、溝の主軸に対して直角に刻まれた無数の工具痕を確認した。鍬などの工具により溝を掘削した際の痕跡と推測される。遺構の性格としては、土取り溝の可能性が高い。また畦畔群に関しては、畦畔601が幅や高さの点で他の畦畔を凌駕しており、区画の基準となる畦畔であった可能性が考えられる。

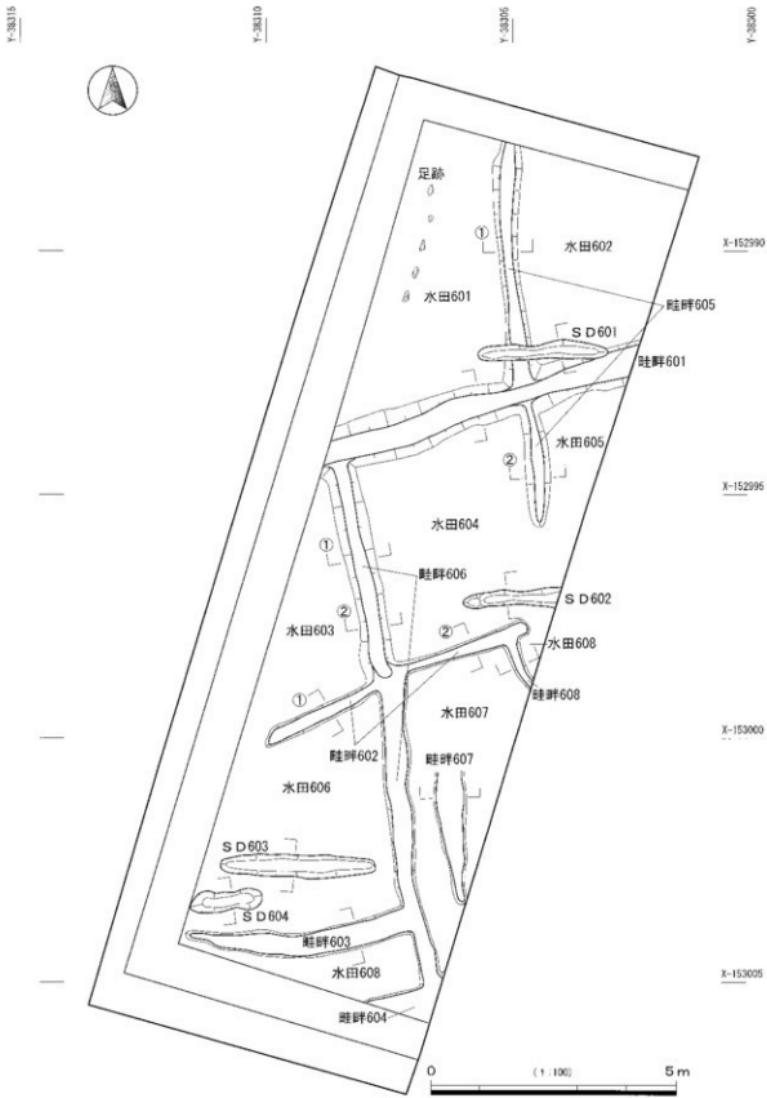
S D601は、調査区の北部で検出した東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ2.65m、幅0.30m、深さ0.20mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D602は、調査区の中央東端で検出した東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ2.08m以上、幅0.33m、深さ0.12mである。埋土はブロック土の単層である。

S D603は、調査区の南西部で検出した東西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ3.12m以上、幅0.45m、深さ0.16mである。埋土はブロック土の2層から成る。

S D604は、S D603の南西約0.30mで検出した東西に伸びる溝である。検出規模は、長さ1.50m以上、幅0.40m、深さ0.09mである。埋土はブロック土の単層である。

畦畔601は、調査区の北部を南西~北東方向に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ6.50m以上、



第45図 2区 第6面平面図 (S=1/100)

幅1.00m、高さ0.20mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

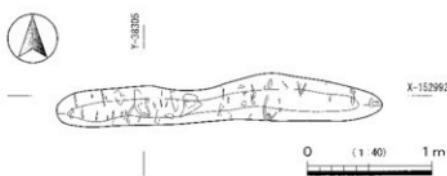
畦畔602は、調査区の中央やや南を南西-北東方向に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ5.85m、幅0.30m、高さ0.17mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

畦畔603は、調査区の南部で検出した南西-北東方向に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ4.90m、幅0.50m、高さ0.07mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

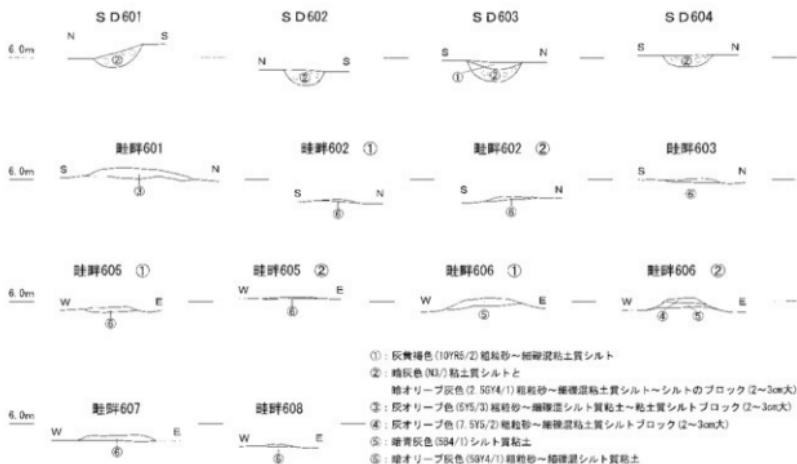
畦畔604は、調査区の南端で検出した南西-北東方向に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ1.80m以上、幅0.70m以上、高さ0.08mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

畦畔605は、調査区の北部で検出した南東-北西に伸びる畦畔である。畦畔601の北と南に取り付く畦畔で、検出規模は、長さ7.80m以上、幅0.50m、高さ0.05mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

畦畔606は、調査区の南半で検出した南東-北西に伸びる畦畔である。北端は畦畔601に取り付く。検出規模は、長さ10.50m以上、幅0.70m、高さ0.15mである。畦畔形成土はブロック土の2層から成る。出土遺物はなし。



第46図 2区 SD 601平面図



第47図 2区 第6面遺構断面図 (S=1/40)

畦畔607は、調査区の南東部、畦畔606の東約0.40mで検出した南東-北西に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ2.80m以上、幅0.58m、高さ0.06mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

畦畔608は、調査区の中央東端で検出した南東-北西に伸びる畦畔である。北端は畦畔602に取り付く。検出規模は、長さ1.50m以上、幅0.30m、高さ0.05mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

水田601~608については、調査面積が狭かったことなどから、詳細は不明である。わずかに水田604において、一筆あたりの平面形状が南東-北西主軸の長方形(長さ4.00m 幅3.00m 面積12.00m<sup>2</sup>)を呈したことが推測される。

その他、調査区北西部では、北から南に向かって歩いた際に形成されたヒトの足跡を検出した。歩幅は約0.40mを測る。

#### 第7面 (古墳時代前期相当)

第11層上面(T.P.+5.8~6.0m)において畦畔を5条(畦畔701~705)、水田を6筆(水田701~706)検出した。

畦畔701は、調査区の北部で検出した南西-北東に伸びる畦畔である。東端で畦畔702に取り付くもので、検出規模は、長さ6.00m以上、幅0.50m、高さ0.03mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

畦畔702は、調査区の北東隅で検出した南東-北西に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ1.50m以上、幅0.80m以上、高さ0.03mである。畦畔形成土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

畦畔703は、調査区の中央やや南で検出した南西-北東に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ3.00m以上、幅0.60m、高さ0.03mである。畦畔形成土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

畦畔704は、調査区の南東部で検出した南東-北西に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ4.70m以上、幅0.60m、高さ0.03mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

畦畔705は、調査区の南部で検出した南西-北東に伸びる畦畔である。東端は畦畔704に取り付く。検出規模は、長さ4.80m以上、幅0.65m、高さ0.03mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

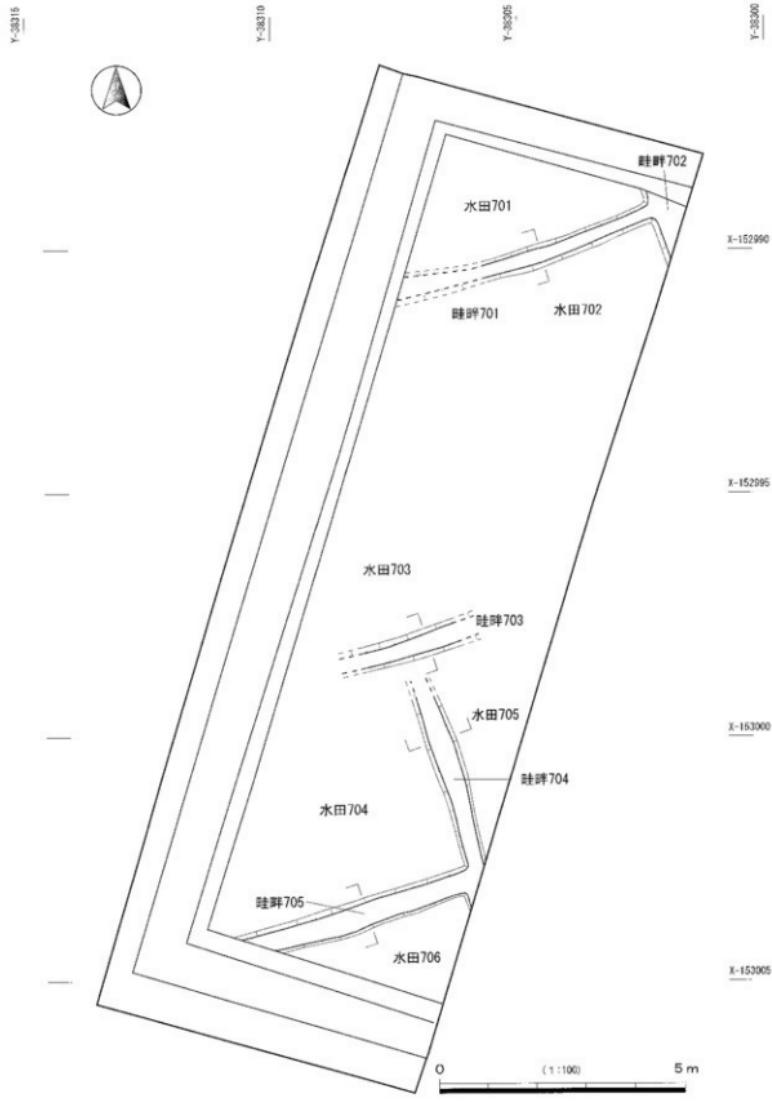
水田701~706に関しては、いずれも調査区外に至ることや、畦畔701~705の残存状態が不良であったことから、平面形状が方形区画の水田であったこと以外は、不明である。

#### 第8面 (古墳時代前期相当)

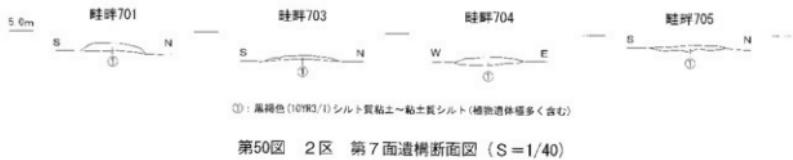
第13層上面(T.P.-5.5~5.7m)において地震による地層の変形構造を確認した。調査基盤層で



第48図 2区 第6面検出足跡平面図



第49図 2区 第7面平面図 ( $S = 1/100$ )



ある第13層が水没かりの状態時に発生した地震による変形構造で、横搖れにより泥が巻き上がり、平面においてマーブル文様を、断面では焰文様が形成される。地震の発生時期は不明であるが、層位的には古墳時代初頭頃が想定される。

#### 第9面（古墳時代初頭）

第15層上面(T.P.+5.1~5.4m)において土坑を4基(S K901~904)、溝を3条(S D901~903)検出した。

S K901は、調査区の北西隅で検出した土坑である。西部が調査区外に至るため全容は不明であるが、概ね不整形方形を呈していたと考えられる。検出規模は、東西長0.60m、南北長1.20m、深さ0.03mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S K902は、調査区の北西部で検出した南西-北東主軸の不整形円形土坑である。検出規模は、東西長0.15m、南北長0.45m、深さ0.03mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S K903は、S K902の東に隣接した地点に位置する。南東-北西主軸の不整形円形土坑で、検出規模は、東西長0.45m、南北長0.13m、深さ0.02mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

S K904は、調査区の北西部で検出した土坑である。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出規模は、東西長0.20~0.46m、南北長1.60m、深さ0.08mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D901は、調査区の北部で検出した南西-北東に伸びる溝である。検出規模は、長さ4.80m、幅0.33m、深さ0.03mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D902は、S D901の南約0.90mに位置する南西-北東に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ1.40m、幅0.28m、深さ0.04mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

S D903は、調査区の中央やや東を南南西-北北東に伸びる溝である。検出規模は、長さ3.80m、幅0.40m、深さ0.04mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

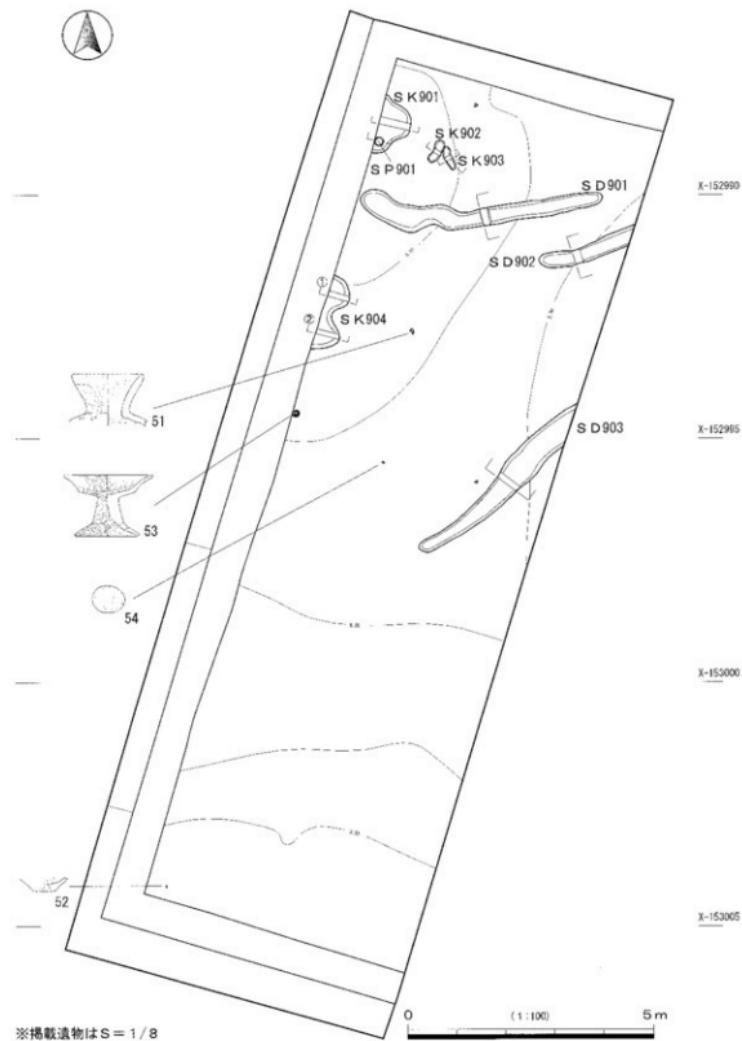
その他、本面構築基盤層である第15層内からは古墳時代初頭(庄内式期)に比定される古式土師器や石製品が少量出土した。4点(51~54)を図化した。51は直口する口縁部をもつ壺。口縁部は上外方に直線的に開き、端部は丸く終息する個体である。調整は、外面は縦位ハケナデ後、口縁端部付近を横ナデで仕上げるほか、内面には横位ハケナデを認める。口径は11.1cmを測る。52は壺と推測される体部下位-底部である。底径は3.9cmである。53は高杯。ほぼ完形を成す個体である。口縁部は大きく外反し、端部を丸く終息させるもので、若干開く柱状部に「ハ」字状に大

Y-38315

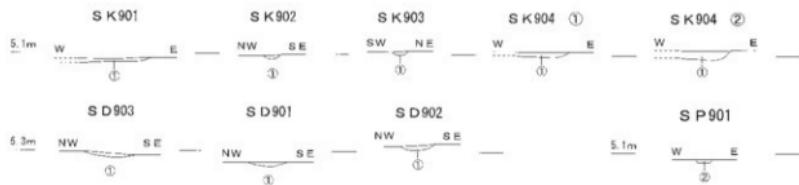
Y-38310

Y-38305

Y-38300

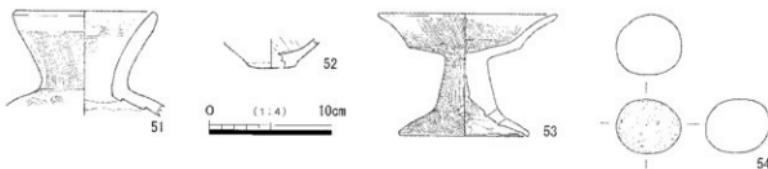


第51図 2区 第9面平面図 (S=1/100)



① 黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土(炭化物・植物遺体混在) ② 青オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土

第52図 2区 第9面選構断面図 (S=1/40)



第53図 2区 第15層出土遺物実測図

きく開く裾部が付く。裾端部は内側に丸く肥厚させる。調整は内・外面ともに縦位を主体としたミガキを密に施すほか、裾部内面には横位板ナデを加える。柱状部と裾部の境界付近には円形透孔を4方向から穿っている。口径は13.8cm、裾径は10.4cm、器高は10.0cmを測る。当該期の高杯に比して、やや小ぶりであり、器壁も厚い点が特徴的である。ミニチュア土器に区分されるべき個体と言えよう。54は石製品である。研磨により球体を呈する個体である。用途等は不明。

#### 第10面（古墳時代初頭）

第16層上面(T.P.+4.9~5.3m)において土坑を10基(SK1001~1010)、溝を3条(SD1001~1003)検出した。

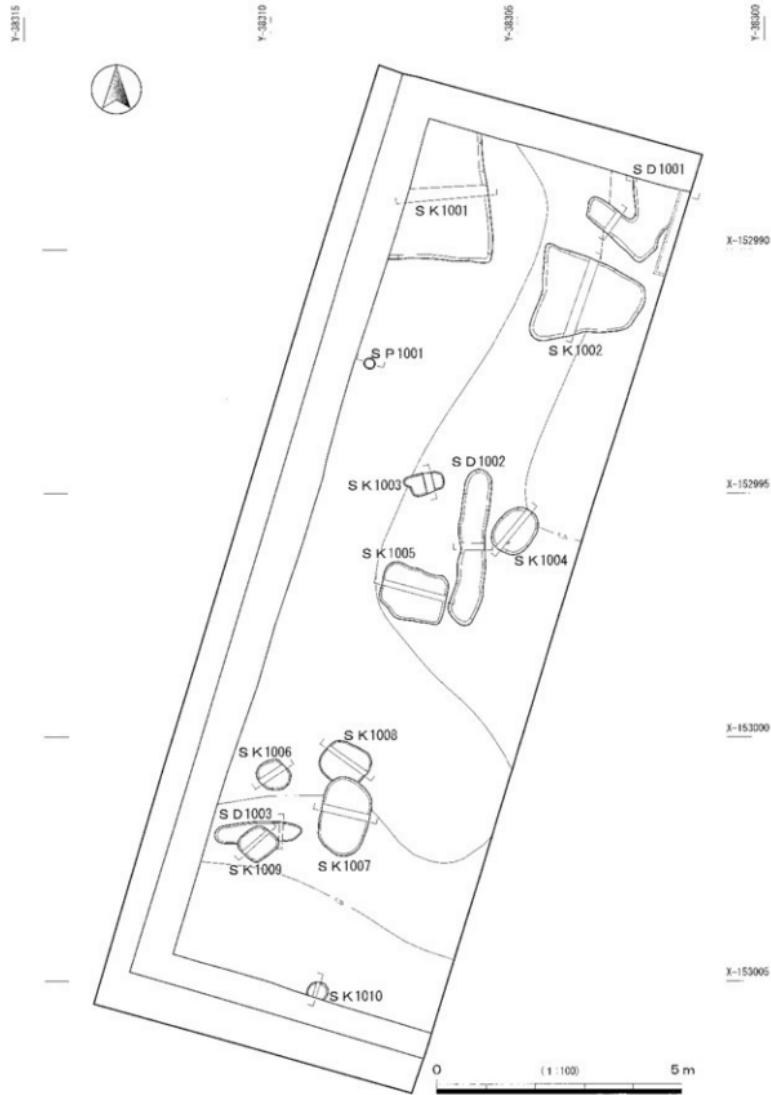
SK1001は、調査区の北西隅で検出した土坑である。北部と西部が調査区外に至るため全容は不明であるが、概ね方形を呈したと推測される。検出規模は、東西長2.00m以上、南北長3.00m以上、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

SK1002は、調査区の北東部で検出した不整形土坑である。検出規模は、東西長2.00m、南北長1.70m以上、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

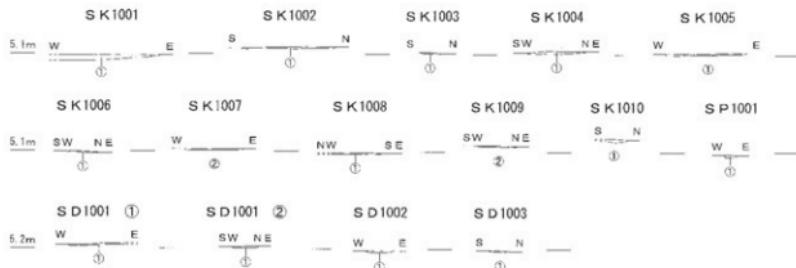
SK1003は、調査区のほぼ中央で検出した東西主軸の不整形円形土坑である。検出規模は、長さ0.80m、幅0.40m以上、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

SK1004は、SK1003の南東約1.50mで検出の南西-北東を向く楕円形土坑である。検出規模は、長さ1.00m、幅0.80m以上、深さ0.05mを測る。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

SK1005は、SK1003の南約1.50mで検出した東西主軸の不整隔丸方形土坑である。検出規模



第54図 2区 第10面平面図 ( $S=1/100$ )



① 黒色(10YR2/1)粗粒砂～細粒混和土質シート(炭化物・植物遺体混在) ② 黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土(炭化物・植物遺体混在)

第55図 2区 第10面遺構断面図 (S=1/40)

は、長さ1.30m、幅1.10m以上、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

**SK1006**は、調査区の南西部で検出したほぼ円形を呈した土坑である。検出規模は、径0.60m、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

**SK1007**は、**SK1006**の南東約0.80mで検出した南北主軸の楕円形土坑である。検出規模は、長さ1.60m、幅1.00m以上、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

**SK1008**は、**SK1006**の北東約0.60mで検出した南東～北西主軸の隅丸長方形土坑である。南東部は**SK1007**に切られる。検出規模は、長さ1.00m、幅0.80m以上、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

**SK1009**は、**SK1006**の南約0.80mで検出した南西～北東主軸の隅丸長方形土坑である。検出規模は、長さ0.70m、幅0.60m以上、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

**SK1010**は、調査区の南端で検出した土坑である。掘形は概ね円形を呈したと考えられる。検出規模は、径0.40m、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

**SD1001**は、調査区の北東隅で検出した溝である。北部と東部が調査区外に至るため全容は不明であるが、L字状に屈曲した掘形を確認した。検出規模は、東西長2.00m以上、南北長1.50m以上、深さは0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

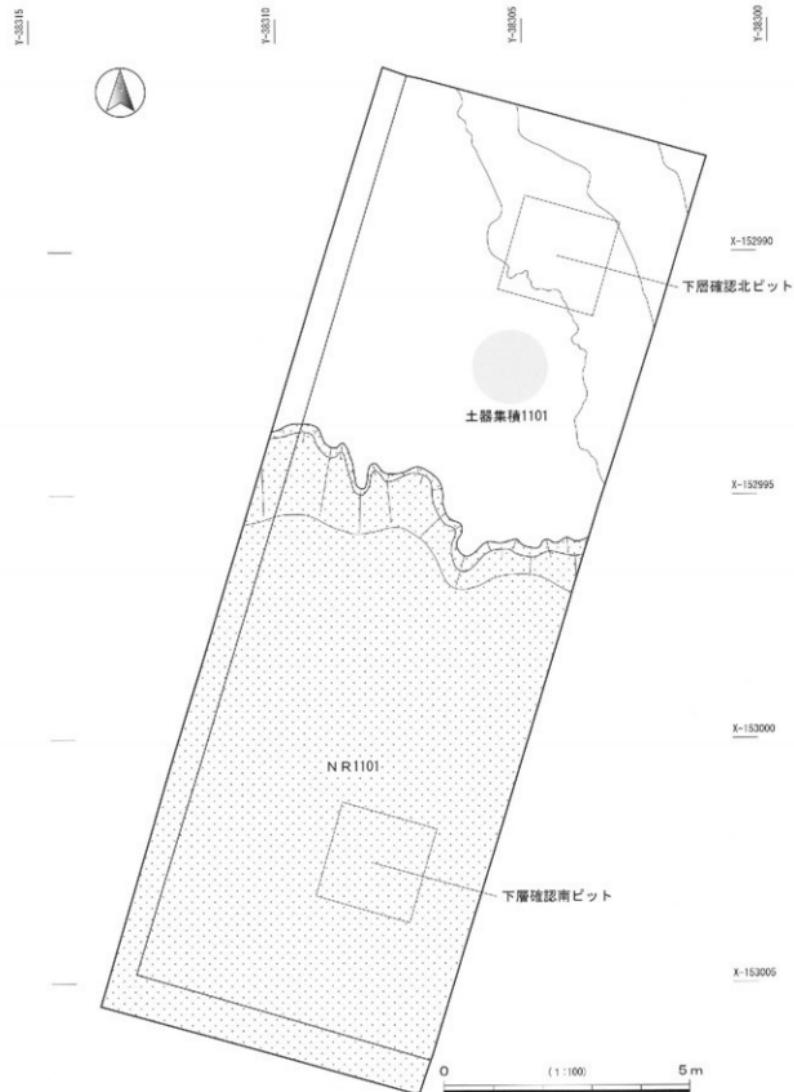
**SD1002**は、調査区のほぼ中央で検出した南北に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ3.20m、幅0.40m、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

**SD1003**は、調査区の南西部で検出した東西に直線的に伸びる溝である。一部を**SK1009**に切られる。検出規模は、長さ1.80m、幅0.40m、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

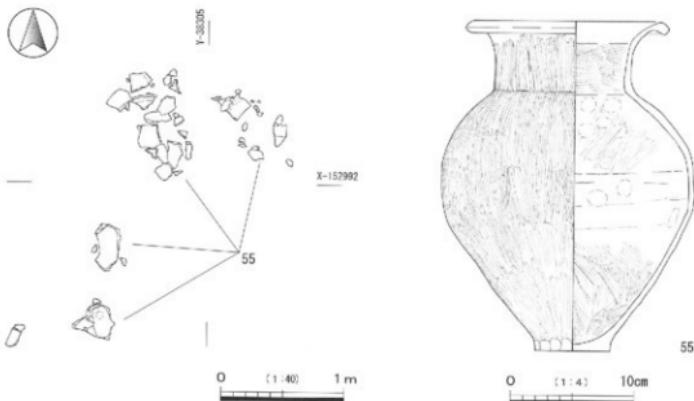
### 第11面（弥生時代後期初頭）

第20層上面(T.P.+4.9~5.0m)において河川を1条(NR1101)、土器集積を1ヶ所(土器集積1101)検出した。

**NR1101**は、調査区の南半で検出した東西に伸びる河川で、長さ6.80m以上、幅12.40m以上、



第56図 2区 第11面平面図 ( $S=1/100$ )



第57図 2区 土器集積1101平面図・土器集積1101出土遺物実測図 (S=1/4)

深さ0.30mの規模を有する。埋土はシルト～砂礫優勢のラミナ層である。出土遺物はなかった。

NR1101の北肩付近(調査区の北部)では、土器集積1101を検出した。掘形が検出されなかったことや、土器集積がほぼ1個体(55)に復元できたことなどから勘案すると、意図的に置かれた個体の可能性が高い。55は、口径15.1cm、器高27.0cmを測る広口壺である。直立する口頭部と大きく外反する口縁部を形成する個体で、口縁端部は下外方に若干屈曲させ、内傾する端面を形成する。体部は、最大径(20.4cm)が中位より若干上に位置する無花果形を呈する。底部(径6.1cm)は若干突出し、平底を成す。調整は、外面が縦位ミガキを密に施すほか、口縁端部～口縁部にかけては横ナデで仕上げる。底部には指頭成形痕を認める。内面は、口縁端部～口縁部が横ナデ、口頭部が概ね横位ハケナデを行う。体部は、指頭成形後上位が右斜位ハケナデ、下位が縦位～左斜位にハケナデを施す。口頭部外面には記号文を認める。弥生時代後期初頭の所産である。

#### 地層内出土遺物

##### 第2層出土遺物(56)

56は白磁碗の細片である。口縁端部に玉縁を形成する個体で、口径は14.5cmを測る。胎土は純白色を帯びる。12世紀代に比定される。

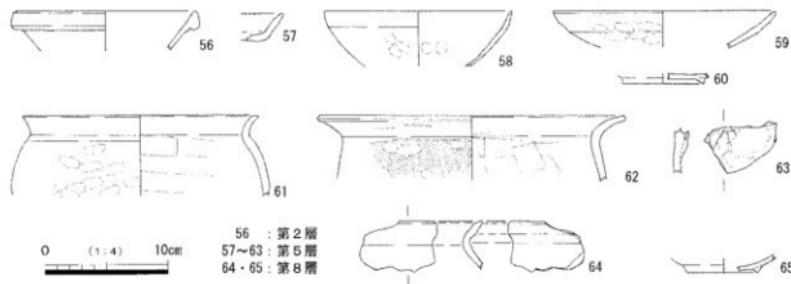
##### 第5層出土遺物(57～63)

57は土師器皿の細片と考えられる。口縁部は上方に短く開き、端部は丸く終息する個体である。調整は横ナデを行う。58～60は土師器椀。58・59は口縁端部～口縁部細片である。両者ともに外面には指頭成形痕を認めるほか、端部付近には横ナデを1段分施す。口径は58が15.2cm、59が17.8cmを測る。60は高台部(高台径6.4cm)。断面三角形の高台が付く個体で、調整は横ナデやナデを行う。61・62は土師器甕。61は短く外反する口縁部とほぼ水平な口縁端面を形成する個体

である。調整は、口縁部～頸部外面が横ナデ、体部外面が指頭成形後ナデ、口縁部内面が横ナデ、体部内面が横位板ナデを施す。口径は19.0cmである。62は大きく外反する口縁部と外傾する口縁端面を有する個体である。調整は口縁部内・外面に横ナデを施すほか、体部外面には縦位ハケナデ、内面に横位板ナデを行う。口径は24.6cmを測る。63は土師器壺の把手。把手は退化の顕著な舌状を形成する。いずれも9世紀代の所産と考えられる。

#### 第8層出土遺物(64・65)

64は土師器壺である。上方方に短く聞く口縁部と内傾する小さな口縁端面を形成する個体で、口縁部内面にはハケナデを認める。65は土師器壺の高台部である。高台部は断面三角形を呈する。調整はナデを施す。高台径は5.7cmを測る。



第58図 2区 地層内出土遺物実測図

# 第6章 3区の調査成果

## 第1節 基本層序

現地表(T.P.+8.4m前後)下1.5m前後までは、客土・盛土層、および搅乱(第0層)である。以下現地表下4.3m前後までの2.8m間で12層におよぶ基本層序を抽出した。第1層は近～現代の旧作土層(T.P.+6.8～6.9m)である。第2層は近世以降の作土層(T.P.+6.7m)で、上面が第1面(近～現代)にあたる。第3層は作土層(T.P.-6.5～-6.6m)で、上面が第2面(近世)である。第4層は作土層(T.P.+6.4m)で、上面が第3面(中世)に相当する。第5層は河川堆積層(T.P.+6.1～-6.5m)である。本層下面が第4面(古代相当)にあたる。第6層は弥生時代後期の遺物を含む土壤化層(T.P.+5.5～-6.1m)で、上面が第5面(古墳時代相当)である。第7層は河川堆積層(T.P.+5.2～-5.8m)である。上面が第6面(弥生時代後期後半～末)に相当する。第8層は河川堆積層(T.P.+5.0～-5.3m)で、N R701(弥生時代中～後期相当)の埋土にあたる。第9層は湿地性堆積層(T.P.+5.0～-5.2m)である。第10層は弥生時代中期の遺物を含む土壤化層(T.P.+4.7～-4.9m)で、上面は第8面(弥生時代中期)である。第11層は弥生時代前期の遺物を含む土壤化層(T.P.+4.6～-4.8m)で、上面は第9面(弥生時代前期)である。第12層は河川堆積層(T.P.+4.6～-4.7m以下)に相当する。

第0層：現代の客土・盛土層、および搅乱

第1層：暗青灰色(5BG3/1)～暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

近～現代の旧作土層(T.P.+6.8～6.9m)である。調査区西端を除き、ほぼ全域で確認した搅乱層で、層厚は20～30cmである。グライ化が顕著である。

第2層：暗青灰色(5BG4/1)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

近世以降の作土層(T.P.+6.7m)である。調査区の全域に分布する搅乱層である。層厚は10～30cm。3層に細分できた。上面が第1面(近～現代)にあたる。

第3層：白灰色(2.5Y7/1)～褐色(10YR4/6)粗粒砂～細礫混粘土質シルト～中粒砂

砂礫優勢の作土層(T.P.+6.5～-6.6m)である。部分的に第2層に削平を受けた搅乱層である。下方では雲状に碳化鉄分の沈着が顕著である。下面では、踏み込みによる変形構造も確認した。層厚は10～40cmである。上面が第2面(近世)に相当する。

第4層：灰色(7.5Y4/1)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

シルト質粘土優勢の作土層(T.P.+6.4m)である。調査区全域に展開する搅乱層である。層厚は20cm前後を測る。上面が第3面(中世)である。

第5層：灰色(7.5Y4/1)～白灰色(2.5Y7/1)シルト質粘土～粗粒砂

植物遺体ラミナを含む河川堆積層(T.P.+6.1～-6.5m)である。調査区全域に分布し、層厚は40～60cmである。4～5層に細分できた。本層下面(T.P.+5.5～-5.8m)においてN R401を検出した。

第6層：オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂～細礫混シルト質粘土～粘土質シルト

オリーブ黒色を呈した土壤化層(T.P.+5.5～-6.1m)である。調査区全域に展開し、層厚は10～40cmを測る。弥生時代後期の遺物包含層で、上面は第5面(古墳時代相当)にあたる。

9.0m

西壁

8.0m

第0層

第1層

第2層

第4層

第5層

第7層

第8層

第10層

第11層

第12層

北壁

第0層

第3層

第2層

第5層

第7層

第8層

第9層

第11層

第12層

9.0m

8.0m

7.0m

6.0m

5.0m

第10層

第11層

4.0m

7.0m

6.0m

5.0m

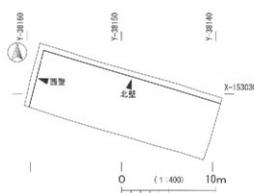
4.0m

2m

0

(1:80)

0 4 m



第59図 3区 断面図 (S = 縦:1/40 横:1/80)

第0層：客土・盛土層 および埋乱層

第1層：暗青灰色～暗灰黄色粗粒砂～細緻混粘土質シルト(旧作土層)

第2層：暗青灰色粗粒砂～細緻混粘土質シルト(作土層)

第3層：白灰色～褐色粗粒砂～細緻混粘土質シルト～中粒砂(作土層)

第4層：灰色粗粒砂～細緻混粘土質シルト(作土層)

第5層：灰色～白色シルト質粘土～粗粒砂(河川堆積層)

第6層：オリーブ黑色粗粒砂～細緻混シルト質粘土～粘土質シルト(土壤化層・弥生時代後期遺物包含層)

第7層：白灰色～青灰色シルト～粗粒砂(河川堆積層)

第8層：青灰色～白灰色極細粒砂～粗粒砂(河川堆積層・N R701埋土に相当)

第9層：暗オリーブ灰色～青灰色シルト質粘土～粘土質シルト(湿地性堆積層)

第10層：オリーブ黑色粗粒砂～細緻混シルト質粘土～粘土質シルト(土壤化層・弥生時代中期遺物包含層)

第11層：灰色粗粒砂～細緻混粘土質シルト(土壤化層・弥生時代前期遺物包含層)

第12層：青灰色細粒砂～粗粒砂(河川堆積層)

第7層：白灰色(2.5Y7/1)～青灰色(5BG5/1)シルト～粗粒砂

河川堆積層(T.P.+5.2～5.8m)である。調査区全域に広がるラミナ構造の発達した地層である。部分的に植物遺体ラミナも認める。層厚は40cm前後。上面において第6面(弥生時代後半～末)を検出した。

第8層：青灰色(5BG5/1)～白灰色(2.5Y7/1)極細粒砂～粗粒砂

河川堆積層(T.P.+5.0～5.3m)で、NR701の埋土に相当する。層厚は10～30cm。ラミナ構造を認める。

第9層：暗オリーブ灰色(5GY4/1)～青灰色(5BG6/1)シルト質粘土～粘土質シルト

シルト質粘土～粘土質シルト優勢の湿地性堆積層(T.P.+5.0～5.2m)である。調査区全域に存在する。植物遺体を含む微細なラミナが発達した地層で、層厚は20～30cmである。

第10層：オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂～細礫混シルト質粘土～粘土質シルト

オリーブ黒色を帯びた土壤化層(T.P.+4.7～4.9m)である。調査区全域に分布する。弥生時代中期の遺物包含層で、層厚は10cm未満である。上面は第8面(弥生時代中期)である。

第11層：灰色(10Y4/1)粗粒砂～細礫混粘土質シルト

灰色を呈した土壤化層(T.P.+4.6～4.8m)である。調査区全域に広がる弥生時代前期の遺物包含層である。下面の層界は不明瞭である。層厚は10～20cmを測る。上面において第9面(弥生時代前期)を検出した。

第12層：青灰色(5BG5/1)極細粒砂～粗粒砂

グライト化の顯著な河川堆積層(T.P.+4.6～4.7m以下)である。下方に向うにつれて、粒度組成は粗くなる。ラミナ構造を認める。層厚は50cm以上である。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 第1面(近～現代)

第0・1層を除去し、第2層上面(T.P.+6.7m付近)において溝を2条(SD101・102)検出した。いずれも耕作に伴う鋤溝と考えられる。

SD101は、南南東～北北西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.60m以上、幅0.87m、深さ0.15mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

SD102は、SD101の東約3.0mを並行に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.60m以上、幅0.60m、深さ0.07mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

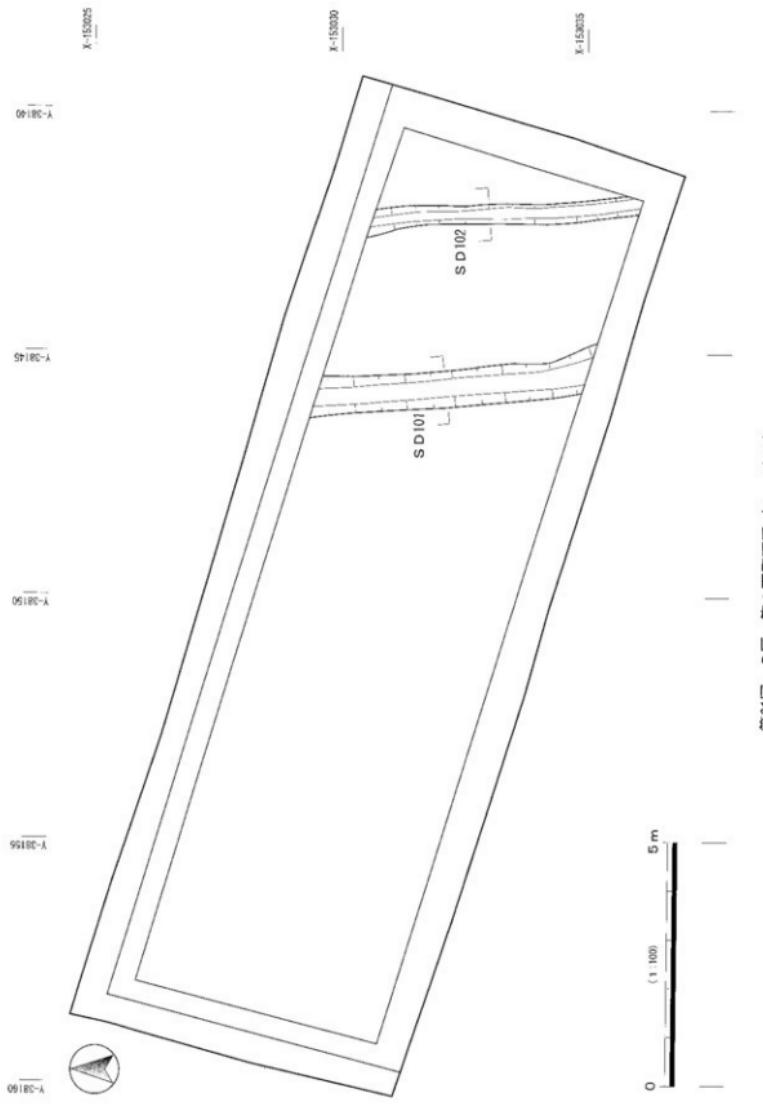
### 第2面(近世)

第3層上面(T.P.+6.5～6.6m)において土坑を1基(SK201)、溝を5条(SD201～205)検出した。この内、溝については、耕作に伴う鋤溝と推測される。

SK201は、調査区の北西隅で検出した南北主軸の不整梢円形土坑である。検出規模は、長さ1.72m、幅0.85m、深さ0.04mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなかった。

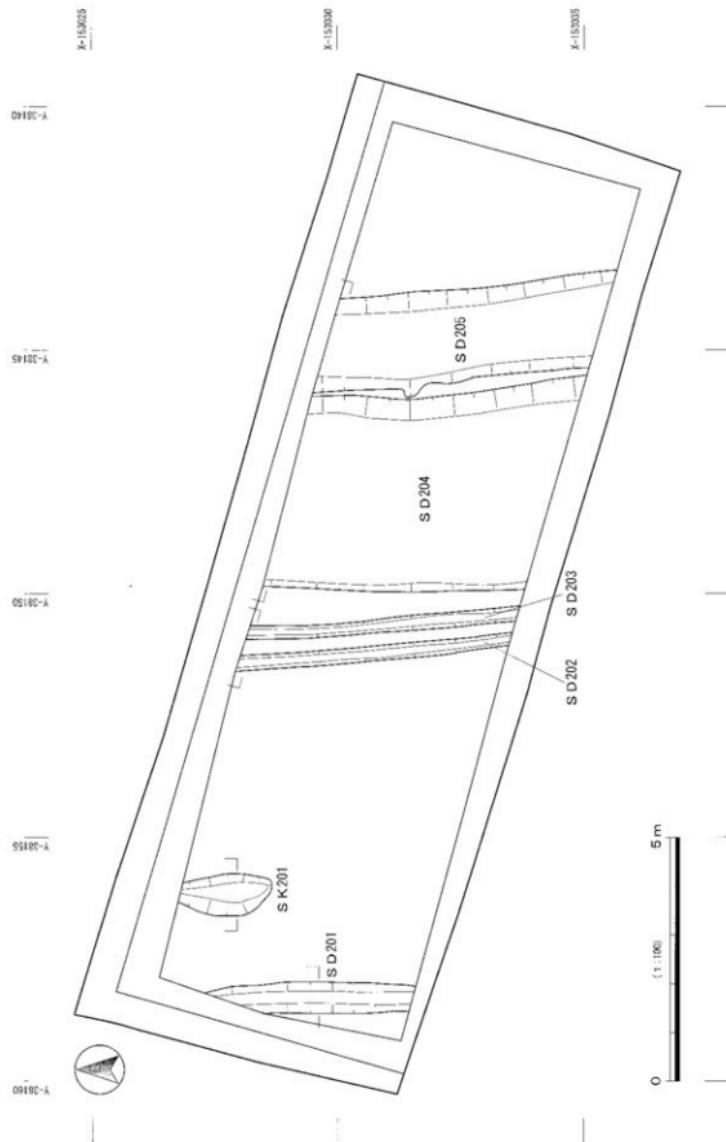


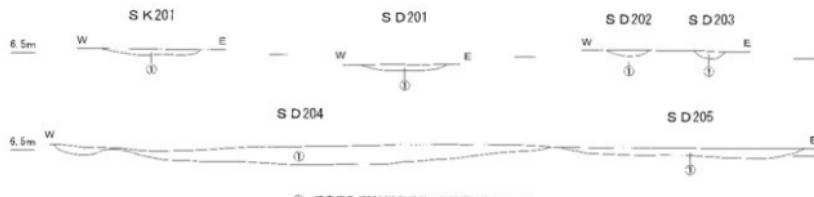
第60図 3区 SD101・102断面図 (S=1/40)



第61圖 3區 第1面平面圖 ( $S=1/100$ )

第62図 3区 第2面平面図 ( $S=1/100$ )





第63図 3区 第2面遺構断面図 ( $S = 1/40$ )

SD 201は、調査区の西端で検出した南南東～北北西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ3.78m以上、幅0.87m、深さ0.05mを測る。埋土はブロック土の単層である。本遺構からは、磁石の細片が1点(66)出土した。66は刷面を3面持つ個体で、長さ7.0cm以上、幅5.2cmを測る。

SD 202・203は、調査区のほぼ中央を南南東～北北西に直線的に伸びる並行溝である。検出規模は、いずれも長さ5.60m以上、幅0.35m、深さ0.06mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなかった。

SD 204は、SD 203の東約0.5mを南南東～北北西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.60m以上、幅4.00m、深さ0.15mである。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

SD 205は、SD 204の東約0.2mに位置する南南東～北北西に直線的に伸びる溝。検出規模は、長さ5.60m以上、幅2.02m、深さ0.17mを測る。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。



第64図 3区 SD 201出土遺物実測図

### 第3面（中世）

第4層上面(T.P.+6.4m付近)において溝を1条(SD 301)検出した。SD 301は、調査区のほぼ中央を南南東～北北西に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ5.60m以上、幅0.70m、深さ0.11mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。耕作に伴う鋤溝であろう。

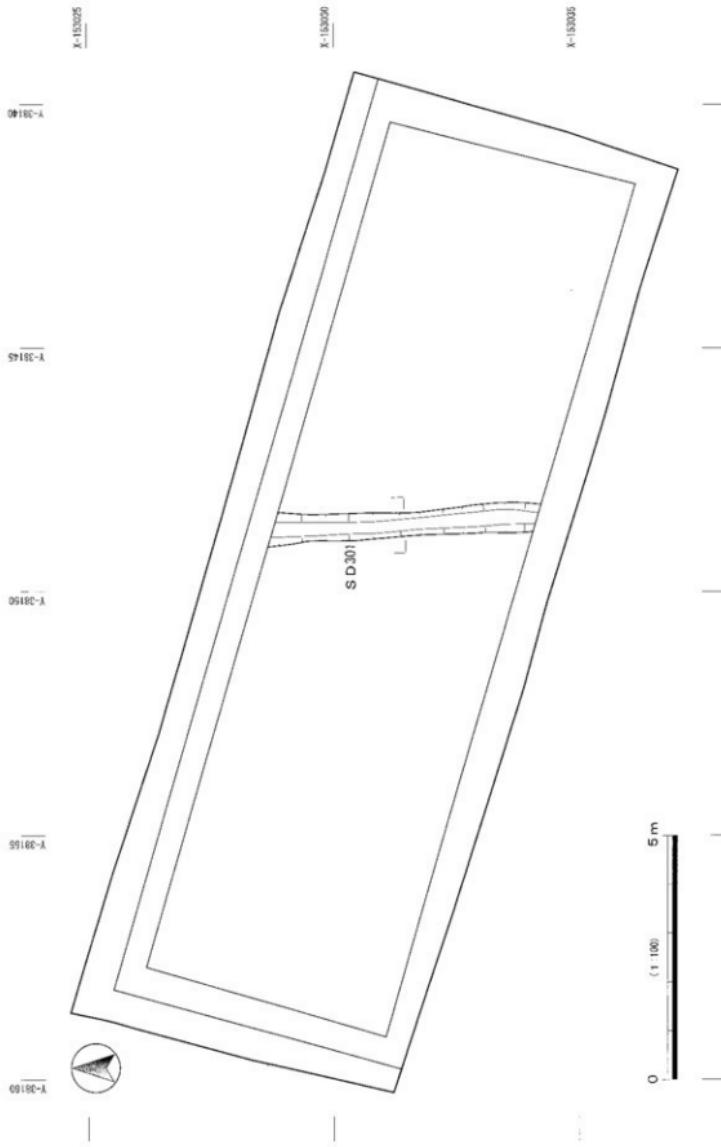
### 第4面（古代相当）

第5層下面(T.P.+6.1～6.5m)において河川を1条(NR 401)検出した。NR 401は、概ね南東

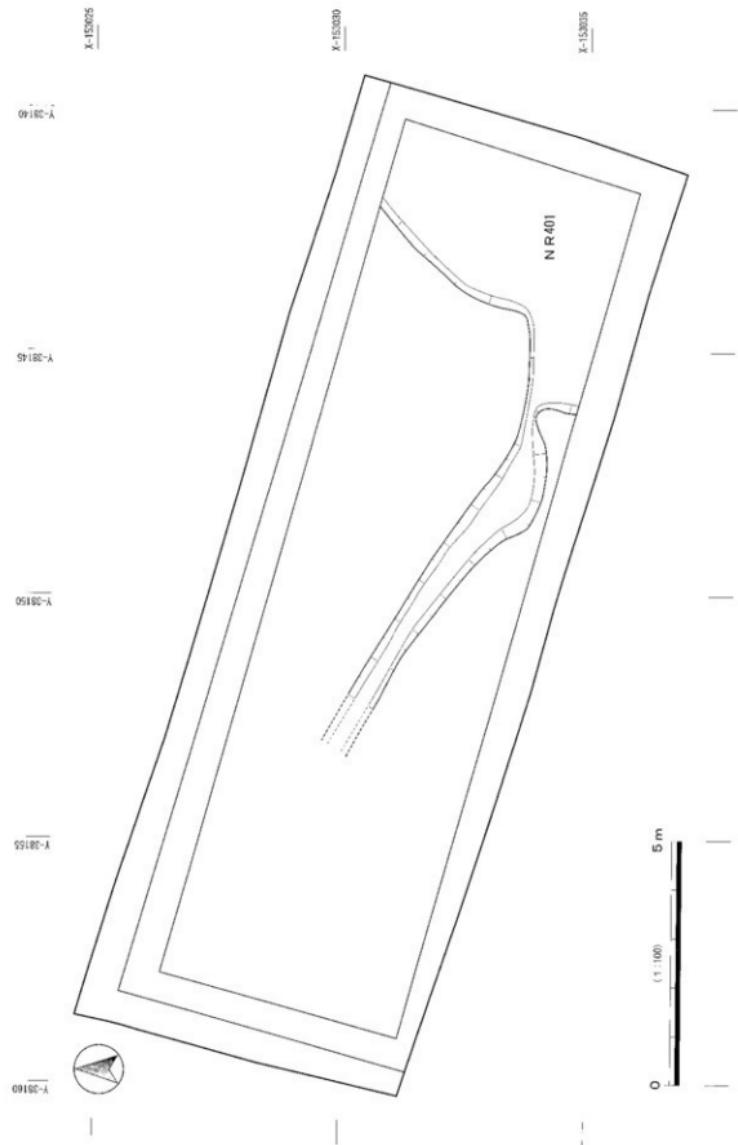


第65図 3区 SD 301断面図 ( $S = 1/40$ )

第66図 3区 第3面平面図 ( $S=1/100$ )



第67圖 3區 第4面平面圖 ( $S=1/100$ )



– 北西方向に伸びる河川と推測される。検出規模は、長さ11.82m以上、幅0.52~5.72m以上、深さ0.23mを測る。埋土はラミナ構造の発達したシルト層である。出土遺物はなし。

#### 第5面（古墳時代相当）

第6層上面(T.P.+5.5~6.1m)において畦畔を3基(畦畔501~503)検出した。

畦畔501は、調査区の北東部で検出した南西–北東に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ1.08m以上、幅0.93m、高さ0.08mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

畦畔502は、畦畔501の南西に隣接する地点で検出した南西–北東に伸びる畦畔である。検出規模は、長さ4.16m以上、幅1.08m、高さ0.14mを測る。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

畦畔503は、畦畔502の東側にはほぼ直角に取り付く畦畔である。北西–南東に伸びるもので、検出規模は、長さ1.37m以上、幅0.78m、高さ0.04mである。畦畔形成土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

#### 第6面（弥生時代後期）

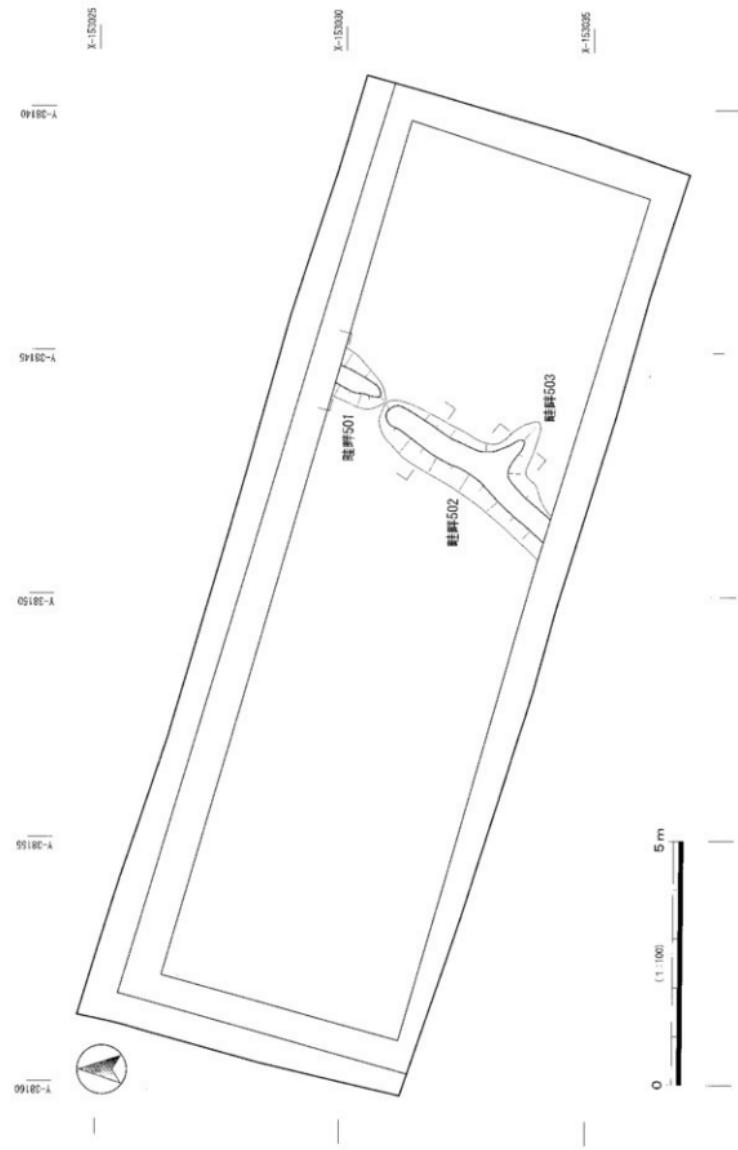
第7層上面(T.P.+5.2~5.8m)において井戸を1基(S E601)、土坑を1基(S K601)、溝を15条(S D601~615)、柱穴を2個(S P601・602)、土器集積を1ヶ所(土器集積601)検出した。

S E601は、調査区の中央やや西で検出した井戸である。掘形平面は、東西主軸の楕円形を呈する。検出規模は、東西長3.60m、南北長3.00mである。深さは1.50mで、検出面から0.40m前後緩やかに傾斜した後、角度を軽じてさらに約1.10m下がり底面に達する。掘形のほぼ中央からは、U字状に削り込まれた板材から成る平面楕円形の井戸枠(東西長0.50m 南北長0.40m)が検出された。埋土は、廃絶時に形成されたブロック土層(①層)、井戸枠内埋土層(②層)、掘形埋土層(③層)に区分される。①層は、井戸の最上位に認められるブロック土層である。本層はさらに2層(①-1・①-2)に細分できた。この内①-1層からは、本井戸の最終段階に形成された土器集積を検出した。土器群は弥生土器で、壺、甕、鉢、高杯から成る。32点(67~98)を図化した。

67~71は壺である。67は広口直口壺。口縁部は若干開きながら上外方に直線的に伸びる個体で、底部は突出し、底面は平底を成す。体部内面には板ナデ調整が行われる。口径は11.1cm、器高は14.2cmを測る。68~70は広口壺。68は短く立ち上がる頸部と、大きく外反する口縁部から成る個体である。底部は、67同様突出し、平底を形成する。調整は、指頭成形後、体部外面には縦位ミガキを施す。体部内面は左斜位板ナデを行う。口径は10.2cm、器高は13.9cmを測る。69は、短く立ち上がる口頸部と大きく開く口縁部を有し、口縁端部にはほぼ直立する平坦面を認める個体であ

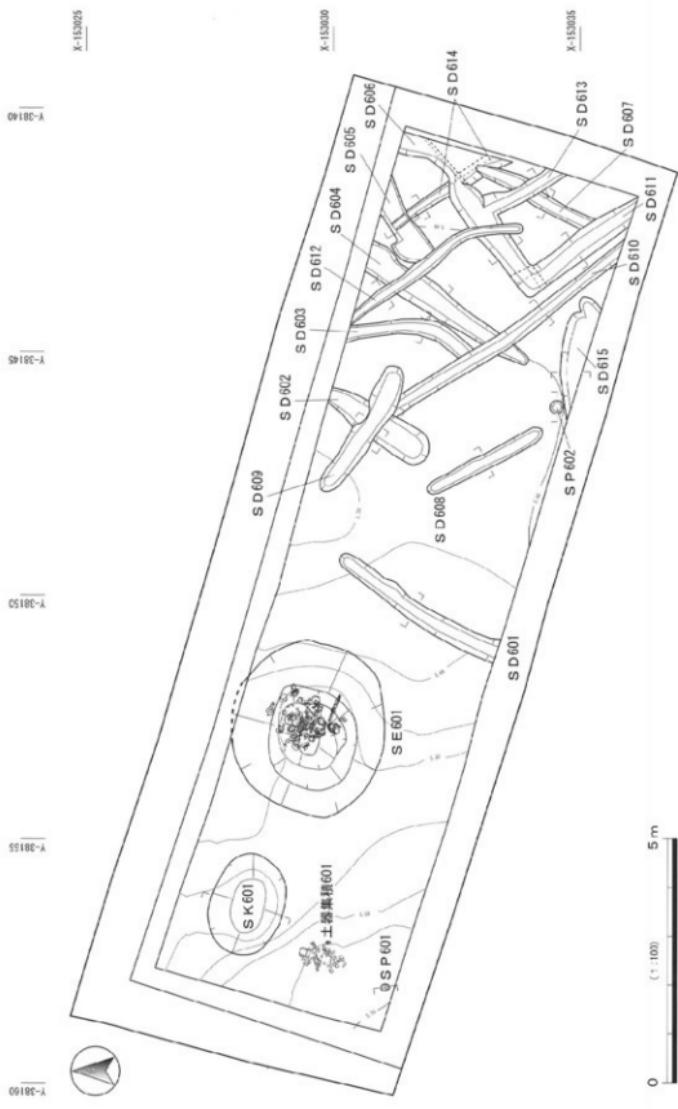


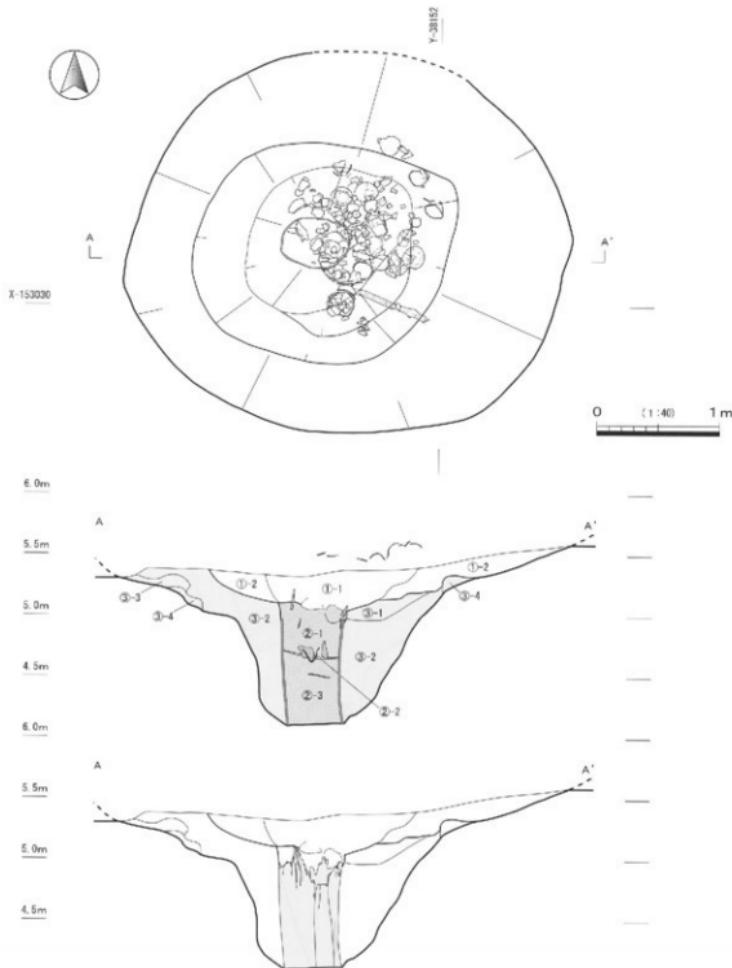
第68図 3区 畦畔501~503断面図 (S=1/40)



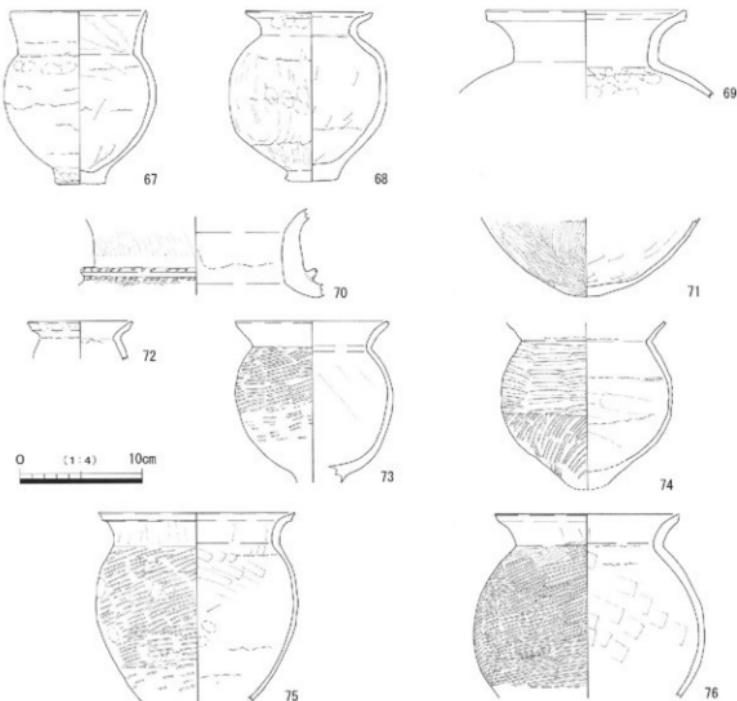
第69図 3区 第5面平面図 ( $S=1/100$ )

第70図 3区 第6面平面図 (S=1/100)





第71図 3区 SE601平・断・立面図 (S=1/40)



第72図 3区 S E 601 ①層出土遺物実測図 1

る。調整は磨滅のため不明瞭であるが、概ね横ナデを施すほか、肩部内面には指頭成形痕や指ナデを認める。口径は16.1cm。70は直立する頸部から大きく外反する口縁部を形成する個体で、頸部と肩部の変化点には断面長方形の突帯を張り付けている。突帯の上下にはキザミ目を施すほか、肩部外面には波状文が施される。調整は、頸部外面が左斜位ハケナデ後横ナデを行うほか、内面にはナデや横ナデを認める。71は体部下位～底部である。底部に小さな平底を形成する個体で、外面にはミガキを、内面には板ナデを施す。

72～90は壺である。72は口径8.4cmを測る小型の個体である。口縁部は外反し、口縁端部には内傾する平坦面が形成される。73・74は外反する口縁部と、突出した底部を有する個体である。体部は球形に近く、口縁端部の残る73については、口径12.4cm、体部最大径12.9cmと口径と体部最大径がほぼ等しい。いずれも体部外面には太筋のタタキを施すほか、内面は左斜位板ナデを行う。両者ともに体部は2分割で成形される。75・76は大きく外反する口縁部を有する個体である。

75は口縁端部を若干拡張し受け口状を成すほか、76は若干内傾する平坦面が形成される。調整は、体部外面に太筋のタタキを施すほか、内面は板ナデを行う。口縁部は横ナデ。口径は75が17.0cm、76が14.9cmである。77～82は、口縁部が外反した後、口縁端部付近でさらに小さく外反する個体である。体部は、最大径が中位より若干上に位置する倒卵形を呈する。調整は、体部外面が右上がりのタタキ、内面が左斜位の板ナデやナデを施す。口縁部は、指頭成形後、横ナデを2段以上行い、口縁端部付近の外反形状に作用する。内面は主として横ナデが行われるが、79や81のようにハケナデや、82のように板ナデを施す個体も認める。口径と体部最大径を比べると、体部最大径が口径を凌駕するが、80(口径16.6cm 体部最大径17.1cm)のように、ほぼ等しい個体も見受けられる。83～88は、外反する口縁部と丸く終息する口縁端部を有する個体である。体部は、最大径が中位より若干上位に位置し倒卵形を呈する個体(84～87)と、ほぼ中位に存在し球形を成す個体(88)が認められる。底部は、遺存する個体については、いずれも突出し、底面が平底を呈する個体(87)とドーナツ底の個体(86・88)に分類される。調整は、体部外面が概ね右上がりのタタキを施す。その後、体部下半に縦位ミガキを行う個体(86)も見受けられる。内面は左斜位板ナデを主体とするが、ハケナデを施す個体(86)も存在する。89は、外反する口縁部と、口縁端部上面に鈍い平坦面を形成する個体である。口縁端部外面には鈍い沈線を認める。調整は、体部外面が右上がりの太筋タタキ、内面が板ナデを施すほか、口縁部～頸部には横ナデを行う。口径は16.0cm。90は体部下半～底部。底部は突出し、ドーナツ底を呈する個体である。外面調整はタタキである。内面は、上位が縦位指ナデ、下位が左斜位板ナデを施す。2分割による成形である。

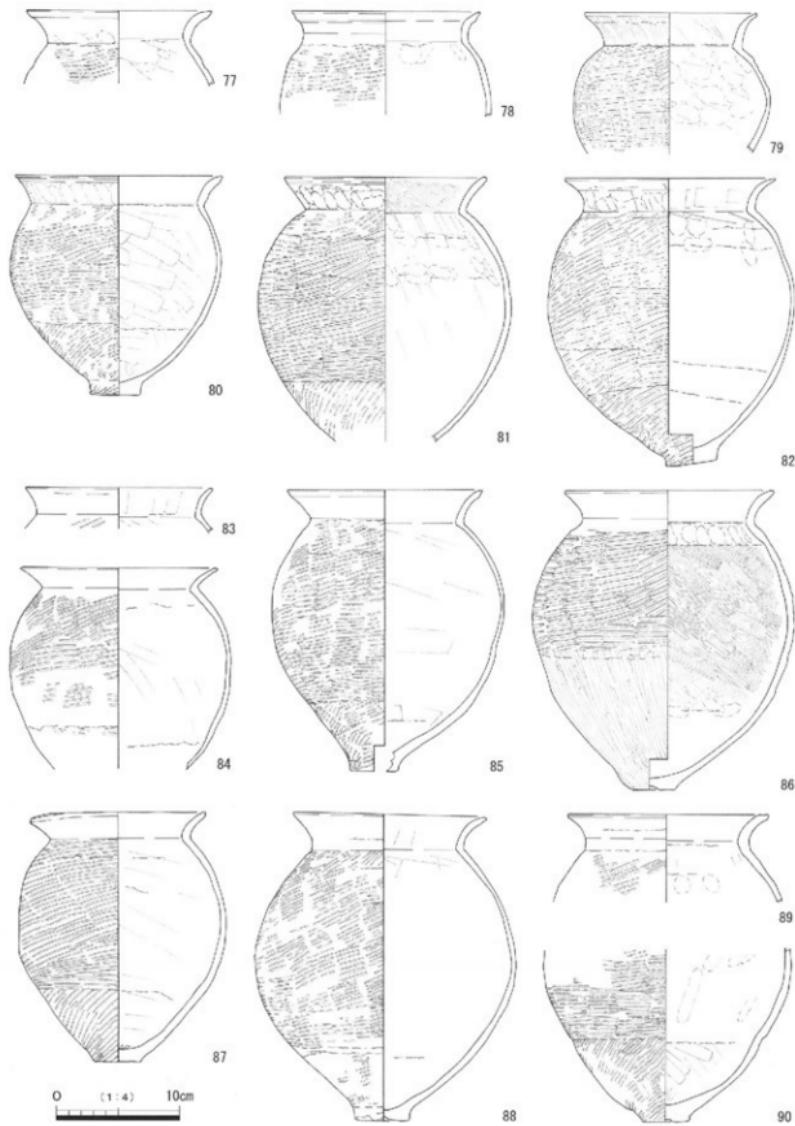
91～95は鉢である。91～94は、内湾気味に聞く口縁部と、突出した底部を有する個体である。口縁端部を見ると、丸く終息する(91・92)と、キザミ目を施す個体(93・94)に区分される。また、底部に穿孔を行なう個体(91・93・94)と平底の個体(92)を認める。外面調整は、右上がりタタキが行われ、その後縦位ミガキ(91)やハケナデ(93)を加える個体も見受けられる。内面は左斜位板ナデである。各個体の法量は、91が口径15.6cm、器高11.6cm、92が口径14.6cm、器高8.8cm、93が口径13.9cm、器高9.9cm、94が口径15.2cm、器高10.9cmである。95は、上外方に内湾しながら聞く部に大きく聞く口縁部が付く個体である。体部外面には縦位ミガキを施すほか、内面は左斜位板ナデを行う。口縁部～頸部は横ナデである。口径は23.0cmを測る。

96は台付鉢である。鉢部の形状が95に類似する個体である。脚部は、若干聞く短い柱状部と大きく聞く裾部から成る。調整は、鉢部が縦位ミガキを密に施した後、口縁部付近を横ナデで仕上げるほか、柱状部外面が縦位ミガキ、裾部がナデを行う。口径は16.1cm、器高は11.0cmを測る。

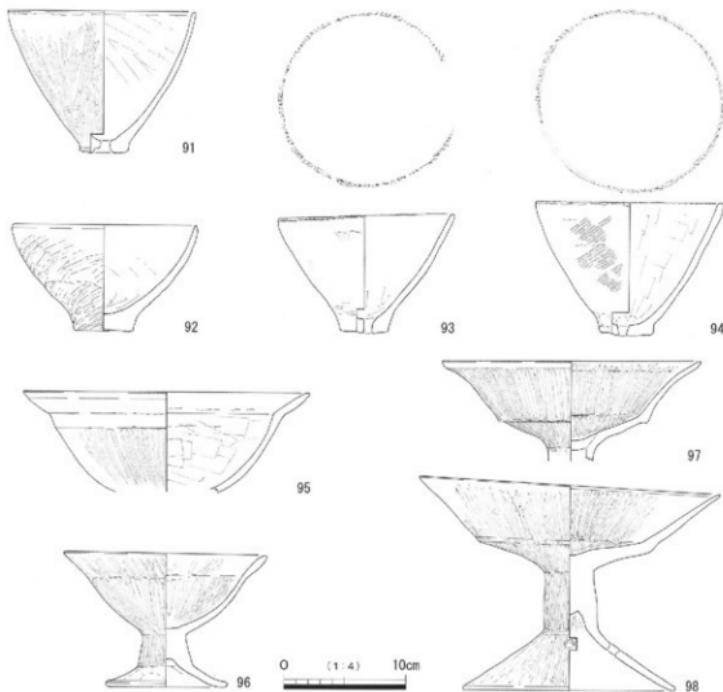
97・98は有稜高杯である。上外方に若干外反(97)、または直線的(98)に聞く杯部に大きく聞く口縁部が付く個体である。柱状部は短い筒状を呈し、裾部は『ハ』の字状に直線的に聞く。調整は、内・外面上ともに縦位ミガキを密に施す。柱状部が中空の個体(97)と中実の個体(98)が見受けられるほか、98は、裾部の最上位には円形透孔を4個穿つ。裾部内面はナデで仕上げる。口径は、97が20.8cm、98が24.2cmである。全容が明らかな98は、器高が17.4cmを測る。

以上の土器群は、概ね弥生時代後期後半～末の所産である。これらの土器群は、本井戸の廃絶時に行われた何らかの祭祀に関連するものとして注目される。

②層は、井戸枠内埋土に相当する。シルト質粘土優勢の泥状堆積物や植物遺体層で構成されており、さらに3層(②-1～②-3層)に細分できた。最上位に堆積した②-1層からは弥生土器が



第73図 3区 SE 601 ①層出土遺物実測図 2

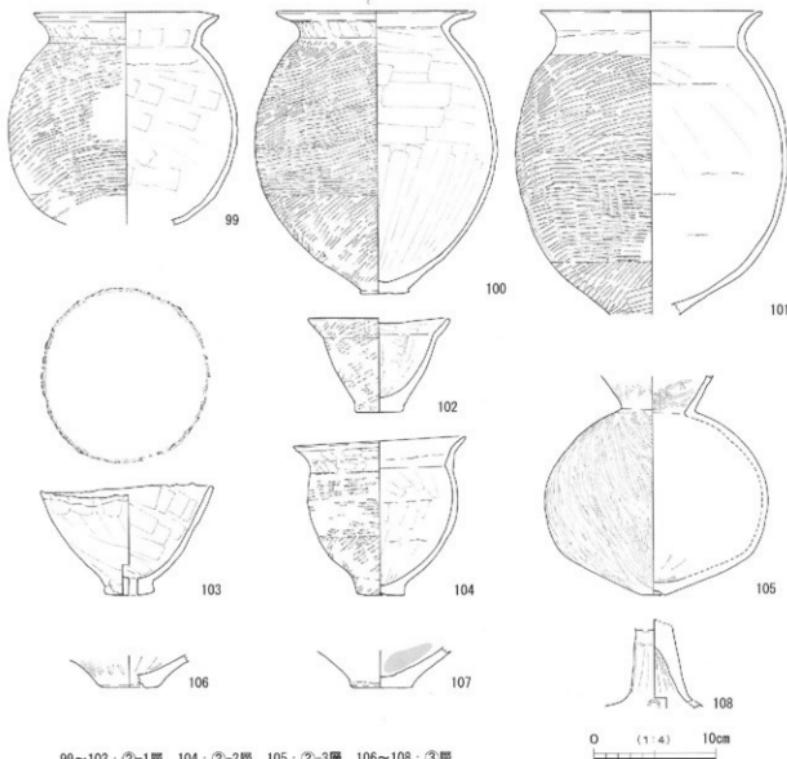


第74図 3区 S E 601 ①層出土遺物実測図 3

少量出土した。この内5点(99~103)を図化した。

99~102は壺である。この内99~101は、口縁部が外反し、体部中位付近に最大径を有する個体である。口縁端部は、横ナデにより内傾するにぶい平坦面を持つ個体(99)と、丸く終息する個体(100・101)を認める。体部は、ほぼ球形を呈する個体(99)と倒卵形を成す個体(100・101)がある。調整は、いずれも体部外面が右上がりのタタキを施すほか、内面は左斜位板ナデである。口縁部～頸部は、外面が指頭成形後横ナデ、内面が板ナデやナデを行う。100・101の体部は2分割成形である。口径は、99が15.1cm、100が16.0cm、101が18.1cmである。底部まで遺存していた100は、器高が23.2cmを測る。102は小型の壺である。内湾気味に上外方に開く口縁部と、さらに大きく開く口縁部から成る個体である。底部は突出し、平底を形成する。調整は外面が右上がりのタタキ、内面が左斜位板ナデである。口縁部はタタキ出しにより形成される。口径は11.4cm、器高は7.7cmである。ミニチュア土器の可能性が考えられる。

103は鉢である。内湾しながら上外方に開く口縁部と、突出した底部を有する個体である。底面は平底で、中央から若干外れたところに穿孔を行う。調整は、外面が指頭成形後ナデ、内面が



99～103 : ②-1層 104 : ②-2層 105 : ②-3層 106～108 : ③層

0 (1-4) 10cm

第75図 3区 S E 601 ②・③層出土遺物実測図

左斜位板ナデを施す。口縁端部にはキザミ目で加飾している。口径は14.1cm、器高は8.8cmを測る。

井戸棒中位に堆積した②-2層からは、壺が1点(104)出土した。半球形の体部に大きく外反した口縁部が付く個体である。口縁端部には横ナデにより内傾する鈍い平坦面が見える。底部は突出し、ドーナツ底を形成する。調整は、体部外面が右上がりやほぼ水平のタタキ、内面が左斜位板ナデを施す。口縁部は指頭成形後横ナデで仕上げる。口径は17.0cm、器高は13.0cmである。

井戸の最下層に堆積した②-3層からは壺(105)が1点出土した。105は広口壺と考えられる。扁球形を呈した体部と上外方に直線的に伸びる口縁部が付く個体である。底部は突出せず、若干上げ底を成す。調整は外面や口縁部内面が密にミガキを施すほか、体部内面は概ね左斜位板ナデを行う。体部最大径は18.2cm、残存器高は18.0cmである。

掘形埋土に相当する③層は、ブロック土から成る。本層からも弥生土器の細片が少量出土した。

3点(106～108)を図化した。106・107は壺や甕、鉢の底部と考えられる。両者ともに、底部は若干突出し、ドーナツ底(106)や平底(107)を形成する。106の調整は、外面がミガキ、内面が横位板ナデである。107はナデ調整である。

107の内面には黒色の付着物を確認した。108は高杯。柱状部から裾部へは曲線を描きながら移行する個体で、裾部最上位には円形透孔を4方向から穿つ。調整は、柱状部外間に縦位ミガキが施されるほか、裾部は内、外側ともにナデを行う。

S K 601は、調査区の北西隅で検出された東西主軸の楕円形土坑である。検出規模は、長さ2.09m、幅1.52m、深さ0.24mを測る。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D 601～615は、調査区の東半で検出された溝群である。溝群は、概ね南西～北東に伸びるもの(S D 601～607)と南東～北西に伸びるもの(S D 608～615)に区分される。いずれも、長さ1.00～5.40m以上、幅0.20～0.87m、深さ0.08～0.19mを測る。埋土はブロック土の単層である。耕作に伴う鏽溝の可能性を考えらる。この内S D 605からは、古式土師器壺の体部下位～底部細片(109)が出土した。109は、底部が突出せず、若干上げ底を呈する個体で、外面には右上がりのタタキが、内面には左斜位ハケナデが施される。

S P 601は調査区の南西隅で検出した南東～北西主軸の楕円形を呈した柱穴である。検出規模は、長さ0.18m、幅0.13m、深さ0.16mを測る。埋土はブロック土の単層。出土遺物はなし。

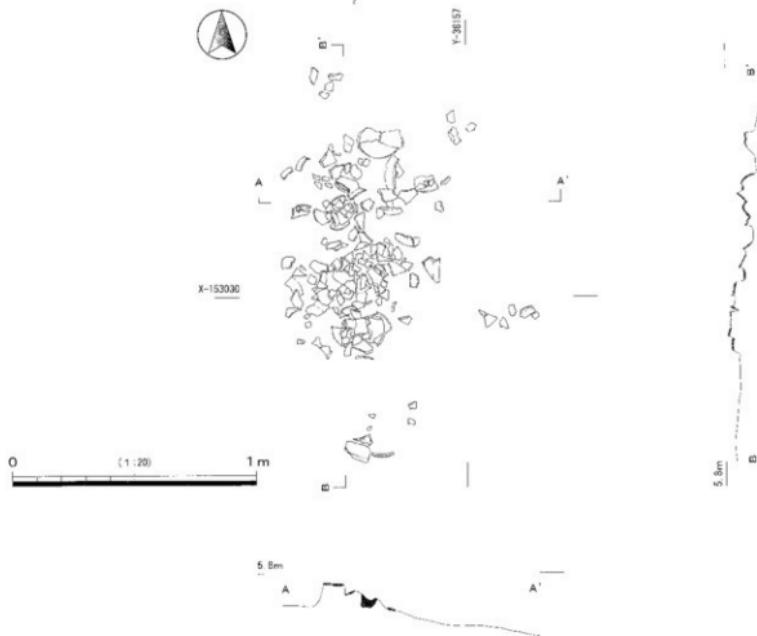
S P 602は調査区の南東で検出した円形掘形の柱穴である。検出規模は、径0.27m、深さ0.13mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

土器集積601は、調査区の南西隅で検出した。土器群は概ね1.0m四方の範囲に集中しており、一括性は高いものと考えられる。出土遺物は壺や甕、鉢、高杯で、20点(110～129)を図化した。

110～122は甕。この内110～112は、口縁端部を上方～上外方に若干拡張し、受け口状を呈する個体である。調整は体部外間に右上がり～水平なタタキを施すほか、内面はナデ(110・111)や左斜位板ナデ(112)を行う。口縁部～頸部外縁や口縁部内面は横ナデで仕上げる。112の体部は2分割成形である。口径は、110が15.0cm、111が<sup>a</sup>15.8cm、112が16.6cmを測る。113～116は、外傾する口縁端面上をキザミ目で加飾する個体である。調整は、体部外間に右上がりのタタキ、内面がナデである。口縁部～頸部外縁や口縁部内面は横ナデが主体であるが、横位板ナデの個体(114)も認める。口径は、113が18.5cm、114が19.0cm、115が20.0cm、116が19.0cmである。117は口縁部外縁の指頭成形痕が顕著に残る個体である。体部外間に右上がりタタキを施すほか、口縁部～体部内面は横位板ナデを行う。口径は14.4cm。118は、ほぼ直立する口縁端面が沈線状に窪む個体である。調整は、体部外間に右上がりタタキを施すほか、内面は左斜位板ナデである。口径は16.0cmである。119は、口縁端部上面に平坦面を形成する個体である。口径は24.9cmを測る。120は中位よりやや上方に体部最大径を有する扁平な体部に、外反する口縁部と突出した平底の底部が付く個体である。調整は、体部外間に右上がりやはば水平のタタキを、内面が縱位指ナデを施す。口縁部は横ナデで仕上げるが、外面上には指頭成形痕が顕著に残る。体部は2分割成形である。口径は14.4cm、体部最大径は14.4cmで、口径と体部最大径が等しい。器高は13.2cmを測る。121は倒卵形の体部に大きく外反する口縁部が付く個体である。口縁部は2段の横ナデにより鈍い変



第76図 3区 SD 605出土遺物実測図



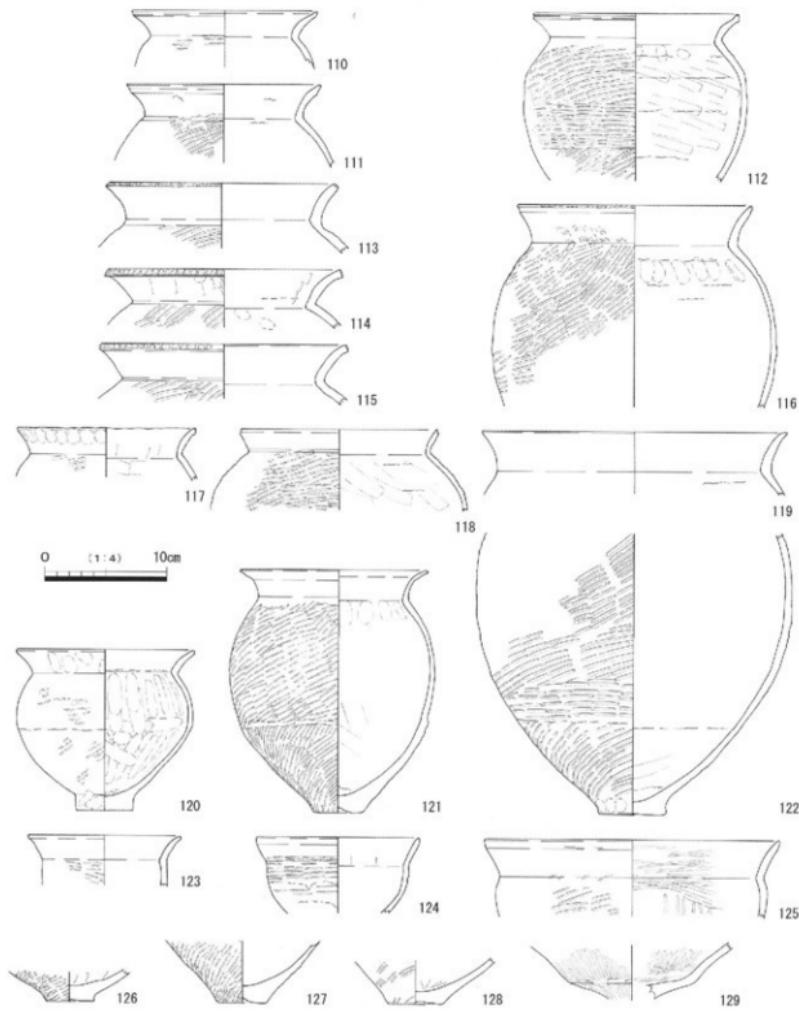
第77図 3区 土器集積601平・立面図 (S=1/20)

化点を認める。底部は若干突出し、上げ底を形成する。調整は、体部～底部外面が右上がりタタキを行うほか、体部内面は左斜位～縦位板ナデを行う。頸部内面付近には指ナデを施す。体部は2分割成形である。口径は15.4cm、器高は19.9cmである。122は体部中位～底部である。体部は、121同様倒卵形であったと考えられる。底部は突出し、平底を呈する。体部外面には右上がり～ほぼ水平の太筋タタキを施す。内面は概ね縦位板ナデである。体部は3分割以上で成形される。

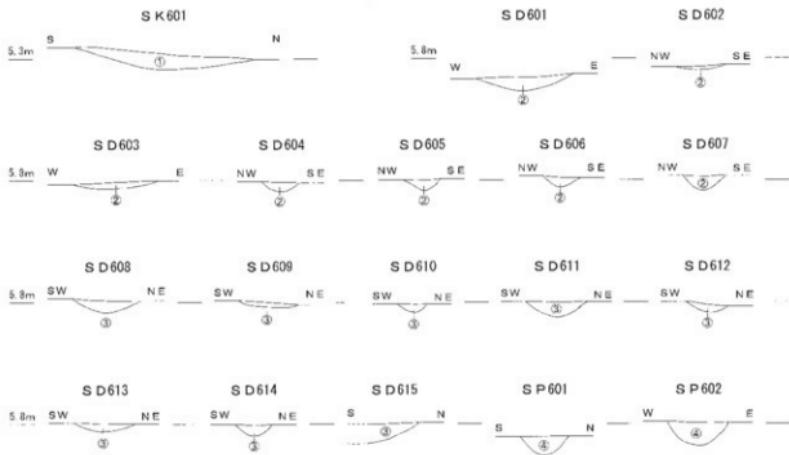
123～125は鉢である。いずれも体部下位が欠けており全容は不明であるが、上外方に外反しながら、あるいは直線的に開く口縁部と、扁球形の体部を有する個体であったと推測される。調整は、3者ともに口縁部外面が横ナデ、体部外面がほぼ水平～若干右上がりのタタキを施すのに対し、口縁部～体部内面は、板ナデやナデを行う個体(123・124)とミガキを施す個体(125)に分類される。口径は、123が12.4cm、124が13.3cm、125が24.0cmである。

126～128は、壺や甕、鉢の体部下位～底部である。底部が突出する個体(126)と、若干突出する個体(127・128)を認める。底面はいずれもドーナツ底を呈する。調整は、いずれも外面が右上がりタタキ、内面が板ナデを行う。

129は有稜高杯である。浅い杯部に若干外反しながら上外方に開く口縁部を有する個体である。



第78図 3区 土器集積601出土遺物実測図



- ①: オリーブ灰色(2.5Gy5/1)粗粒砂～無機混粘土質シルト  
 ②: 緑オリーブ灰色(2.5Gy4/1)粗粒砂～無機混粘土質シルト  
 ③: 黄オリーブ灰色(5Gy4/1)粗粒砂～無機混粘土質シルト  
 ④: 細灰色(N7/1)粗粒砂～細機混粘土質シルト

第79図 3区 第6面造構断面図 (S=1/40)

杯部と口縁部の境界を成す稜はやや不明瞭である。調整は、内・外ともに丁寧なミガキを施す。以上の遺物の帰属時期は、弥生時代後期に比定される。

#### 第7面（弥生時代中～後期相当）

第7層下面(T.P.+5.0~5.3m)において河川を1条(NR701)検出した。NR701は、おおむね南東～北西方向に伸びる河川と推測される。検出規模は、長さ18.0m以上、幅4.60m以上、深さ0.20mを測る。埋土は第8層(青灰色(5B65/1)～白灰色(2.5Y7/1)極細粒砂～粗粒砂のラミナ層)に相当する。出土遺物はなかった。

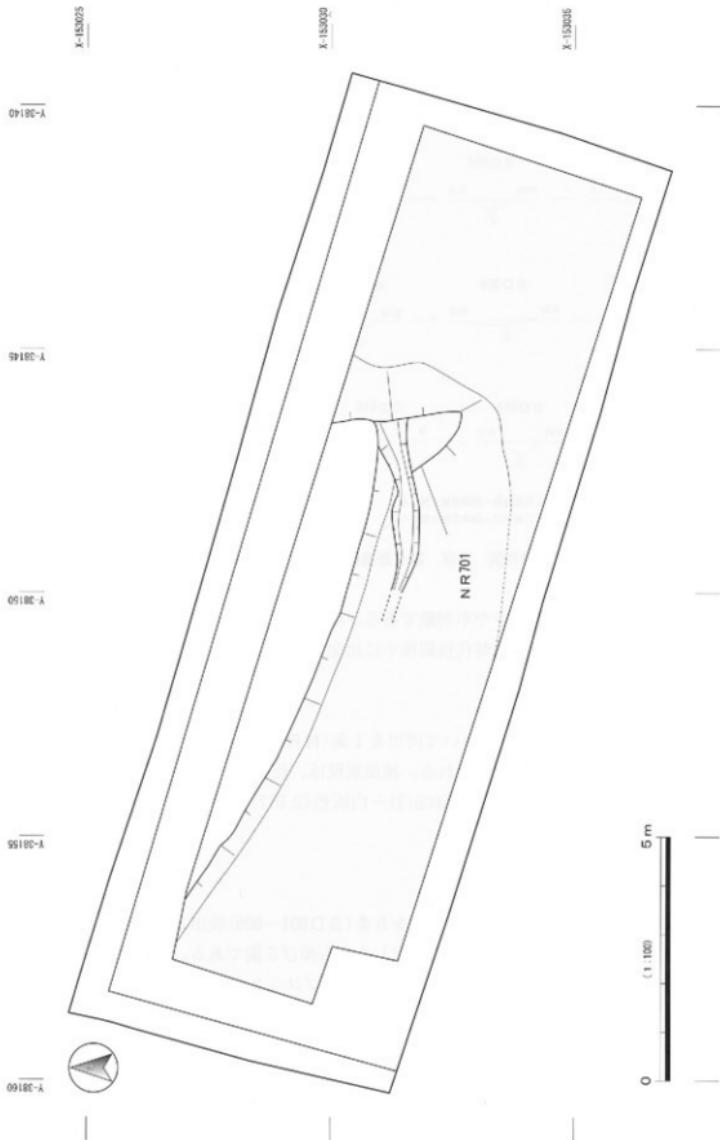
#### 第8面（弥生時代中期）

第9層上面(T.P.+4.7~4.9m)において溝を5条(SD801~805)検出した。

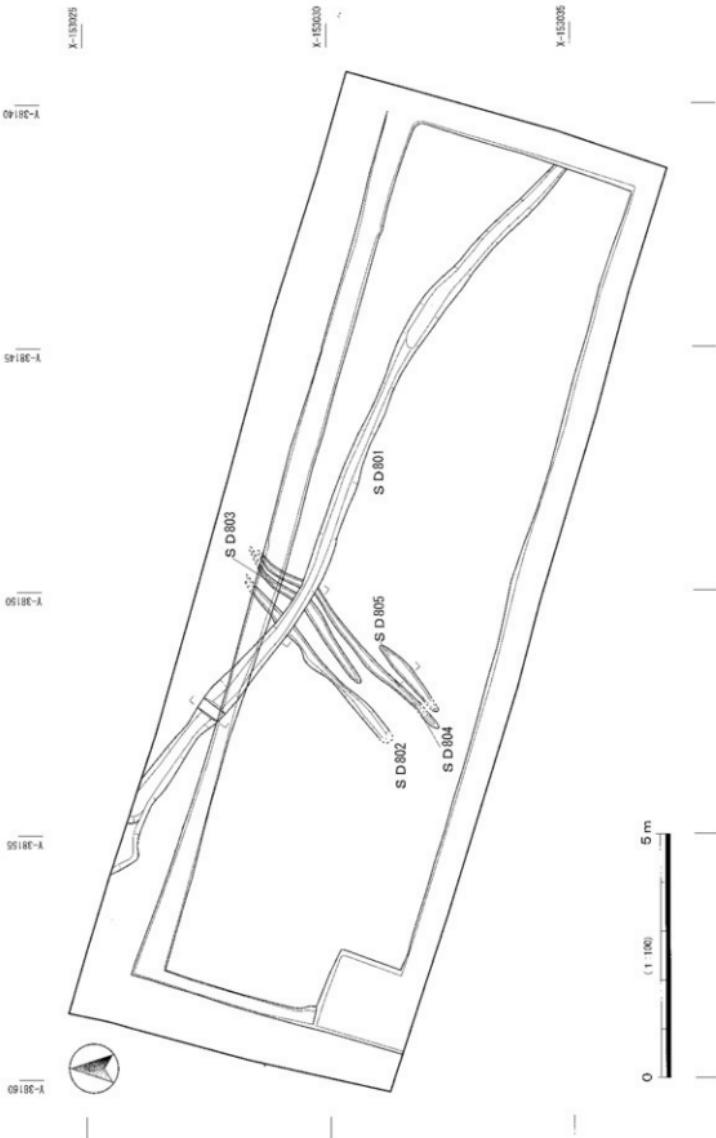
SD801は、南東～北西方向に緩やかに蛇行しながら伸びる溝である。検出規模は、長さ17.00m以上、幅0.40~0.50m、深さ0.30mを測る。埋土はブロック土の單層である。本遺構からは、弥生土器や石製品が少量出土した。この内2点(130・131)を陶化した。130は壺の底部と考えられる。底部は突出せず、鈍いドーナツ底を形成する。調整は、指頭成形後ナデである。131は叩き石と推測される。形状は、面長の球形を呈し、長さは9.9cm、幅は5.2cm、厚さ5.2cmを測る。頂部には朱と思われる赤色顔料が残るほか、敲打痕も確認した。

SD802~805は、調査区の中央やや西で検出した南西～北東方向に直線的に伸びる溝群である。

第30图 3区 第7面平面图 ( $S=1/100$ )



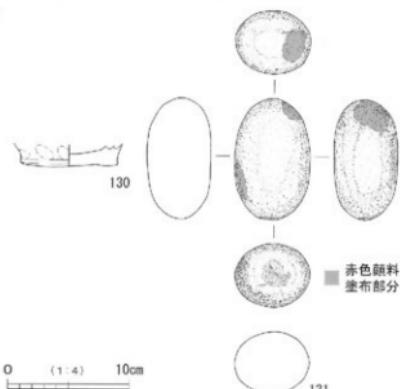
第81圖 3區 第8面平面圖 ( $S=1/100$ )



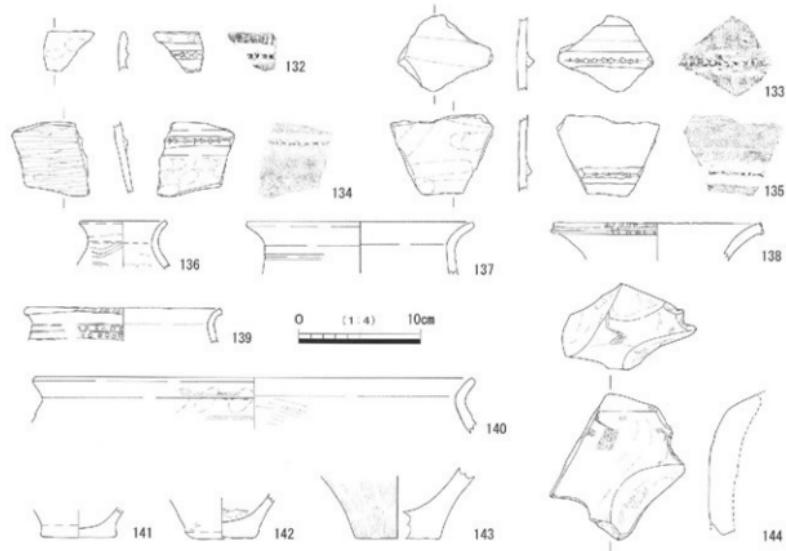
いずれも約0.2mの間隔で並行して伸びる。各溝の検出規模は、長さ1.70~4.00m以上、幅0.20m、深さ0.05mである。埋土はブロック土の単層である。縄文時代晩期~弥生時代前期の遺物細片が出土した。この内、S D802から出土した13点(132~144)を図化した。132~135は縄文土器細片である。132は口縁端部と口縁端部直下にそれぞれ突帯を張り付け、その上面にキザミ目を施す個体である。133~135は深鉢の肩部付近の細片と推測される。いずれも断面三角形の突帯を1条巡らせ、上面にキザミ目を加えるもので、調整は外側がナデを行なうか、内側は横ナデ

(133・135)や横位ミガキ(134)を施す。以上は長原式に帰属する個体群であろう。

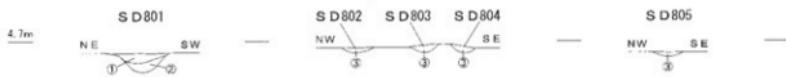
136~143は弥生土器である。この内136~140は壺。136は大きく外反する口縁部と、丸く終息した端部を有する個体で、頸部~肩部外面には沈線による文様を施す。口径は6.8cmを測る。137



第82図 3区 S D801出土遺物実測図



第83図 3区 S D802出土遺物実測図



①：黒色(2.5Y2/1)粗粒砂～細粒泥質シルト ②：細灰色(3G1/1)粗粒砂～細粒泥質シルト ③：オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂～細粒泥質シルト

第84図 3区 SD 801～805断面図 (S=1/40)

は、直立する肩部に大きく外反する口縁部が付く個体である。調整はナデが主体で、頸部直下外面に一条の沈線を認める。口径は18.4cmである。138は大きく開いた口縁部と外傾する口縁端面を形成した個体である。端面には一条の沈線を施すほか、この上下をキザミ目で加飾している。口径は16.8cmである。139は大きく外反する短い口縁部を有する個体で、口縁端部には外傾するにぶい平坦面を認める。調整はナデが主体を成し、その後口縁端部外面にキザミ目を施すほか、肩部外面には3条の沈線を並行に施した後、円形の刺突文を加える。口径は15.8cmを測る。140は大型の壺である。口縁部は上方に短く聞くほか、口縁端部には外傾するにぶい平坦面を形成する個体である。調整は、外面が横位ミガキ、内面は口縁部が横ナデ、肩部が左斜位ミガキである。口径は35.6cmを測る。141～143は壺または甕、鉢などの体部下位～底部である。いずれも、底部は突出し、平底を形成する。外面調整は、ナデ(141)、横位ミガキ(142)、縱位ハケナデ(143)を認めるほか、内面はナデや板ナデが行われる。以上の土器群は、弥生時代前期の所産である。

144は砥石の細片である。全容は不明であるが、部分的に擂面を確認した。

### 第9面 (弥生時代前期)

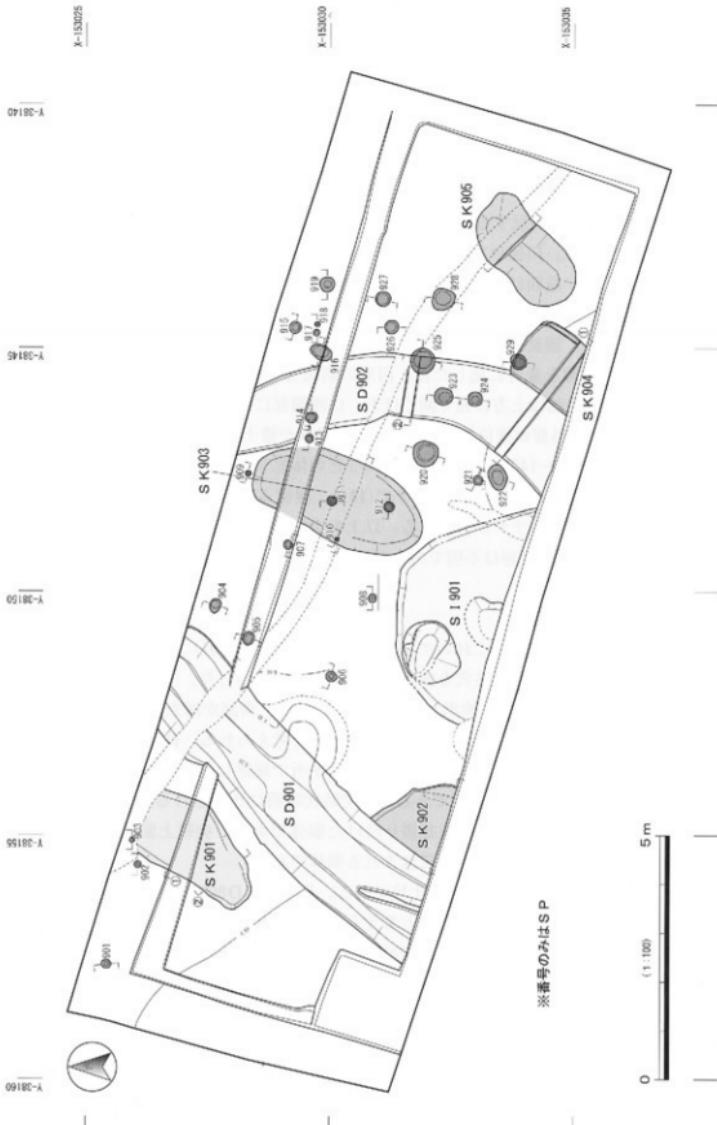
第10層上面(T.P.+4.6～4.8m)において竪穴住居を1棟(S I 901)、土坑を5基(S K 901～905)、溝を2条(S D 901・902)、柱穴を29個(S P 901～929)検出した。

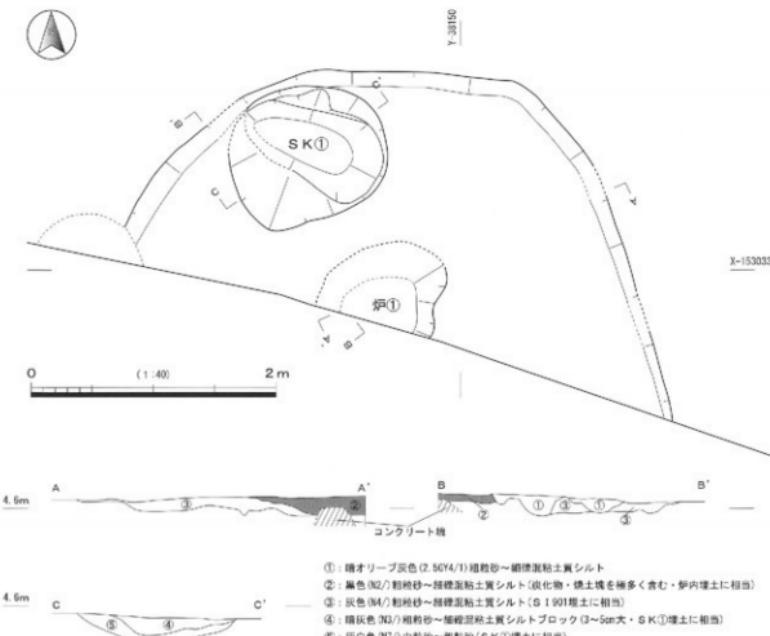
S I 901は、調査区の中央南端で検出した竪穴住居である。南部が調査区外に至るため全容は不明であるが、概ね円形の掘形(径4.00m)を呈した住居と考えられる。検出面からの深さは0.10mを測る。付随する施設としては、土坑状の窪みを2ヶ所で確認したが、柱穴や壁溝などは検出していない。埋土はブロック土の単層である。縄文時代晩期に比定される深鉢の肩部細片(145)が出土した。145は、断面三角形の突帯を張り付けた個体である。突帯上面にはキザミを施す。調整は内・外面ともにナデ。長原式土器に含まれる個体である。

S K 901は、調査区の北西で検出された土坑である。北部がSD 801に切られるため全容は不明であるが、南北主軸の不整格円形を呈したと考えられる。検出規模は、長さ2.50m以上、幅1.50m、深さ0.20mである。埋土はブロック土の単層。弥生時代前期に比定される土器が少量出土した。2点(146・147)を図化した。146は壺の肩部細片である。外面には沈線による直線文や円弧文で加飾を行う。内面はナデ。147は壺または甕、鉢などの底部である。底面は平底である。調整は磨減により詳細は不明である。

S K 902は、調査区の南西で検出した土坑である。西部をSD 901に切られるほか、南部が調査区外に至るため全容は不明であるが、概ね円形を呈したものと推測される。検出規模は、東西長1.80m以上、南北長1.50m以上、深さ0.20mを測る。埋土はブロック土の単層である。出土遺物

第85図 3区 第9面平面図 (S=1/100)





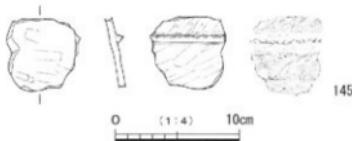
第86図 3区 S I 901平・断面図 (S=1/40)

はなかった。

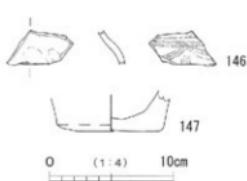
S K 903は、調査区の中央やや北よりで検出した南北主軸の楕円形土坑である。検出規模は、長さ3.60m、幅1.70m、深さ0.20mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなかった。

S K 904は、調査区の南東で検出した土坑である。南部が調査区外に至るため全容は不明であるが、概ね南西-北東主軸の長方形を呈したことが推測される。検出規模は、長さ1.50m以上、幅1.30m、深さ0.20mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなかった。

S K 905は、調査区の南東で検出した南西-北東主軸の隅丸長方形土坑である。検出規



第87図 3区 S I 901出土遺物実測図



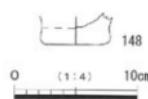
第88図 3区 SK 901出土遺物実測図

模は、長さ2.50m、幅1.10m、深さ0.25mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

S D901は、調査区の西部を南西-北東方向に直線的に伸びる溝である。検出規模は、長さ7.00m以上、幅2.00m、深さ0.50mである。埋土はブロック土の単層である。弥生時代前期に比定される土器が少量出土した。図化できたのは1点(148)である。148は壺や甕または鉢の底部である。底部は突出し、平底を形成する個体である。調整はナデである。

S D902は、調査区の東部を若干東に湾曲しながら南北に伸びる溝である。検出規模は、長さ7.00m以上、幅1.40m、深さ0.30mである。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。

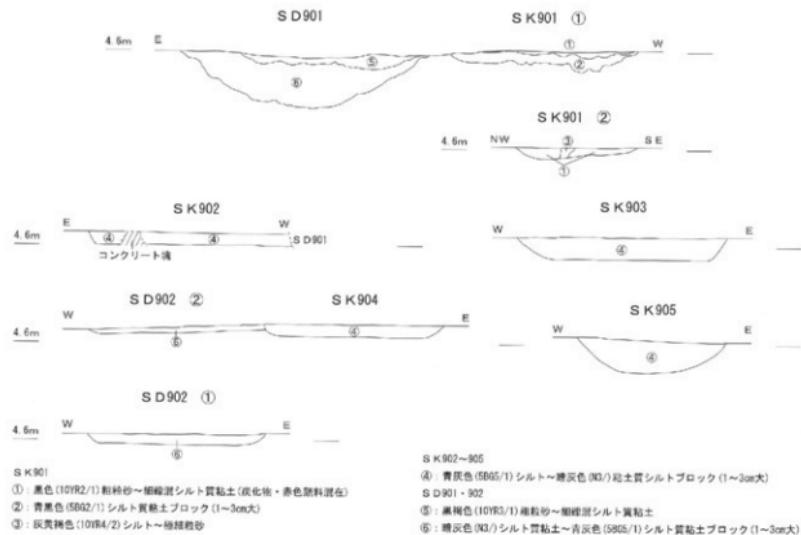
S P901~929は調査区の北西部や中央付近で検出された柱穴である。平面形状は概ね円形を呈するが、不整形を呈するもの(S P916・922・928)も認められる。埋土は、灰黄褐色を呈した粘土質シルトの単層である。これらの柱穴群の配列に規格性を見出すことはできなかった。出土遺物は、S P912から縄文時代晩期にまで遡る可能性が考えられる鉢の細片が1点(149)出土した。149は若干上外方に開く口縁部と、端部外面に断面三角形の小さな突帯を1条張り付けた個体で



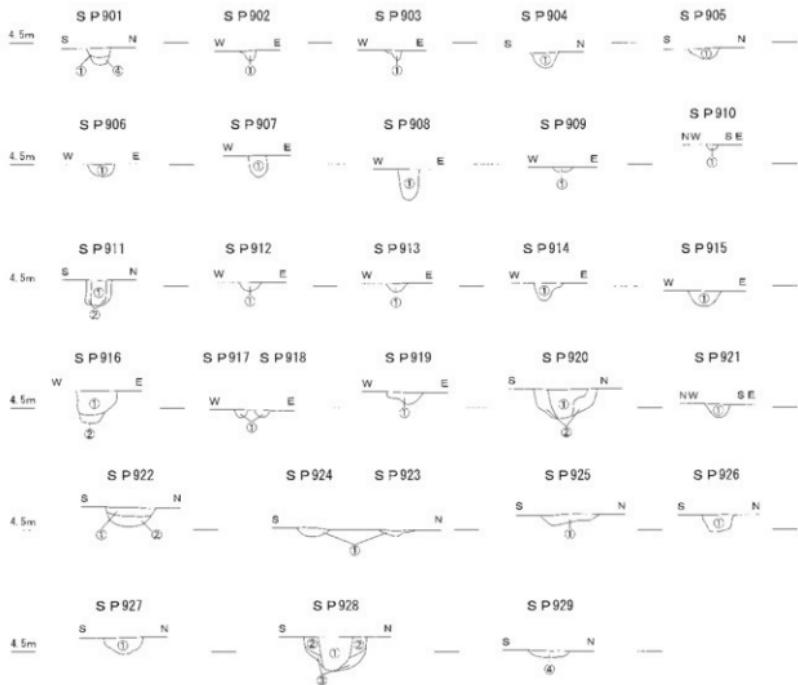
第89図 3区 S D901出土遺物実測図



第90図 3区 S P912出土遺物実測図



第91図 3区 第9面遺構断面図 (S=1/40)



①：緑灰色(Nd)/粘土質シルト+青灰色(Sb5/1)シルトのブロック(1~3cm大)  
 ②：緑灰色(Nd)/粘土質シルト+青灰色(Sb5/1)シルト+灰色(Sy6/1)粗粒砂のブロック(1~3cm大)  
 ③：青灰色(Sb5/1)シルト+灰色(Sy6/1)粗粒砂のブロック(1~3cm大)  
 ④：黄灰色(2.Sy4/1)シルト質粘土

第92図 3区 第9面遺構断面図 (S=1/40)

ある。突帯上面には不明瞭ながらキザミ目を施す。調整は、外面に縦位ミガキ調の不明瞭な調整を認めるほか、内面はナデを行う。長原式に帰属する個体である。

#### 地層内出土遺物

##### 第1層出土遺物(150)

150は唐津焼の鉢。直立する口縁部と、断面長方形の高台を持つ個体で、口縁部外面には3条の沈線を、体部外面は横位ケズリを施す。胎土はにぶい褐色を呈する。口径11.3cm、器高4.8cm。

##### 第2層出土遺物(151・152)

151は煙管。椀形の火皿(口径1.7cm)と雁首～吸管の細片で、銅製と推測される。152は鉄製釘。頭部は扁球形を呈する。端部は若干湾曲し、先端は欠落する。残存長は14.4cmである。

##### 第3層出土遺物(153)

153は須恵器杯蓋。口縁部は内湾気味に伸び、端部内面には段を形成する。天井部は丸みを帯び、口縁部と天井部の境界にはにぶい棱を認める。調整は、天井部の上1/2が回転ヘラケズリを施す以外は回転ナデである。天井部外面には『×』状の記号文が刻まれる。口径は14.0cm。中村編年のII型式1段階(6世紀初頭～前半)に比定される。

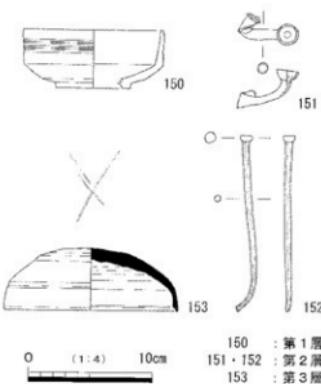
#### 第6層出土遺物(154～188)

154～157は壺。154～156は広口壺。154は大きく外反する口縁部と外傾する幅広の平坦面を形成する個体である。口縁端面と口縁部内面は波状文で加飾する。口径は11.1cm。155は大きく外反する口縁部と丸く終息する端面を有する個体。調整は不明瞭であるが、外面は横位ミガキ調整の可能性がある。口径は11.8cmを測る。156は外反気味に上外方に開く口縁部と丸く終息する口縁端部を有する個体。口縁部外面は横位ミガキ調整、内面は横位板ナデ後縦位ミガキ調整を認める。口径は17.8cm。157は直口壺。上外方に直線的に伸びる個体である。調整は、内・外面ともに指頭成形後横位板ナデを施す。口径は10.8cmである。

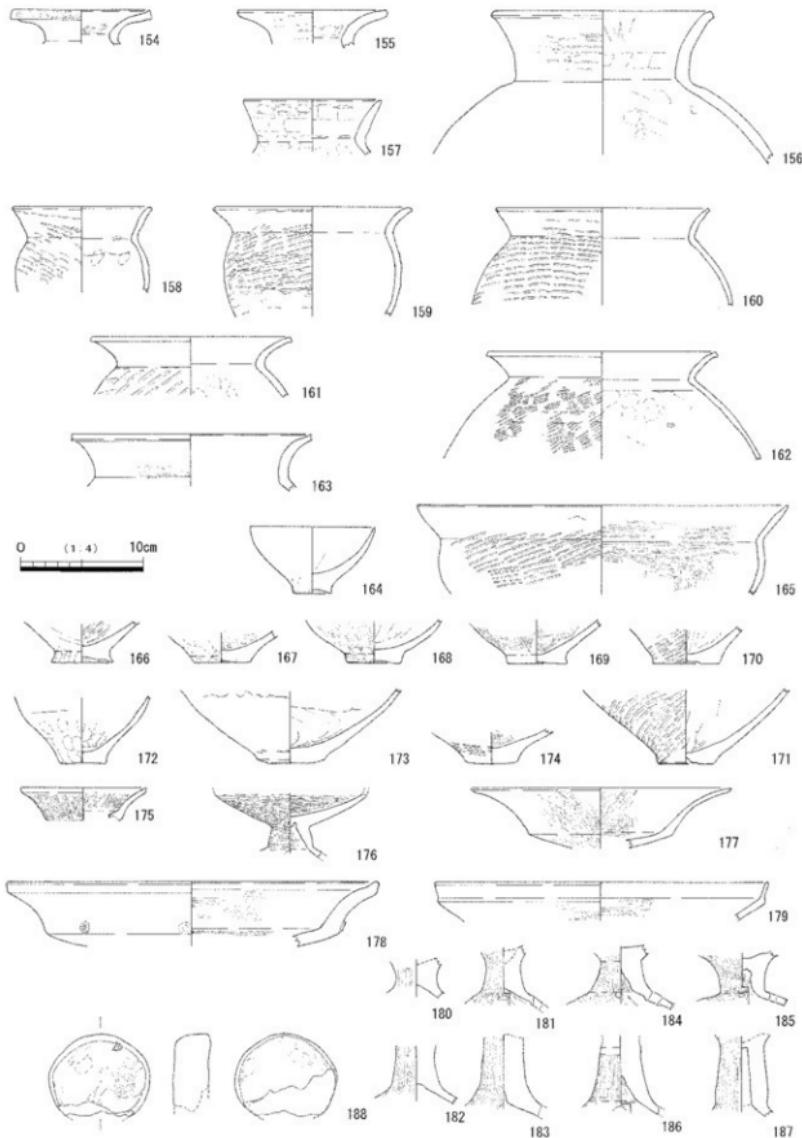
158～162は壺である。158～160は、口縁部をタタキ出しにより成形した個体で、口径が体部最大径とほぼ同じ個体(158)と、口径が体部最大径を凌ぐ個体(159)、体部最大径が口径より大きい個体(160)がある。158は口縁部～体部外面に左上がりタタキを、内面はナデ調整である。大和地域からの搬入品の可能性が考えられる。159は口縁部～体部外面が右上がりの太筋タタキ、内面がナデで仕上げる個体である。160は口縁部～体部外面にはほぼ水平なタタキを施すほか、内面はナデを行う。口径は、158が11.0cm、159が15.5cm、160が16.8cmを測る。161・162は口縁端部に外傾する平坦面を持つ個体である。161の体部外面調整は太筋のタタキである。口径は16.0cm。162は体部外面に右上がりの細筋タタキを施すほか、内面は左斜位ケズリを行う。口径は18.1cmを測る。163は大きく外側する口縁部とほぼ直立する口縁端面を形成する個体。口縁部外面には縦位ミガキを認める。口径は19.4cmである。

164・165は鉢。164は口径が10.0cmを測る小型の鉢。底部は突出し、上げ底を成す。体部内面には横位板ナデが見える。165は上外方に直線的に伸びる口縁部と扁球形の体部を有する個体。調整は、口縁部～体部外面が右上がりのタタキ、口縁部内面が横位ミガキ、体部内面が縦位や横位のミガキを施す。口縁部はタタキ出しにより形成される。口径は30.0cmを測る。

166～174は壺や甕、あるいは鉢の体部下位～底部である。166は底面を指頭成形により若干上げ底を呈した個体である。167は、底部が若干突出し、鈍い上げ底を形成する個体である。168～171は、底部が突出し、ドーナツ底を成す個体である。調整は、外面が縦位ミガキを施す個体(168・169)と、右上がりのタタキを行う個体(170・171)に分類される。内面調整は板ナデ(168・170・171)とハケナデ(169)を認める。172～174は、突出した底部と平底から成る個体である。外面調



第93図 3区 第1～3層出土遺物実測図



第94図 3区 第6層出土遺物実測図

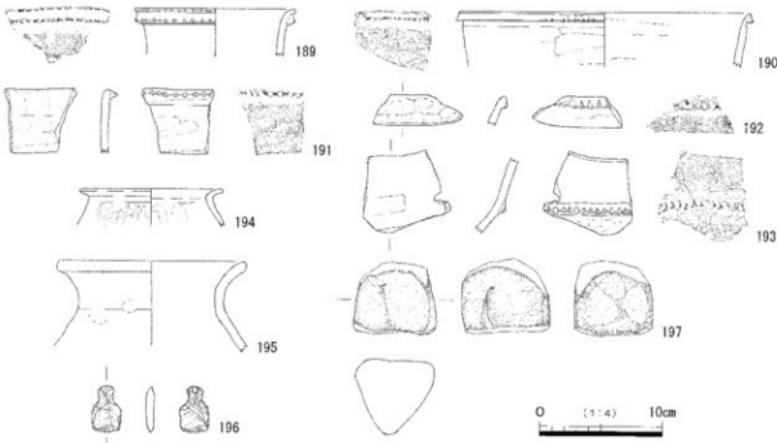
整は磨滅のため不明瞭であるが、174にはタタキが施される。内面は、板ナデを行う個体(172・173)とハケナデを行う個体(174)がある。

175～187は高杯である。175は口径10.1cmを測る小型の個体である。内・外面ともに縦位ミガキを丁寧に施す。176は有段高杯の可能性が考えられる。下外方に若干開いた短い柱状部に、大きく開く裾部が付く個体である。調整は、杯部が内・外面ともに密にミガキを施すほか、柱状部外面には縦位ミガキを丁寧に加えている。裾部には円形透孔を4個穿っている。177は有稜高杯。口縁部は大きく外反し、内・外面ともに縦位ミガキを密に施す。杯部外面にもミガキが行われる。口径は21.1cm。178は口径29.8cmを測る大型の個体である。口縁部は外反するほか、端部を若干上方に拡張し、受け口状を呈する。口縁部外面には竹管押圧円形浮文を張り付けるほか、内面は横位ミガキ調整を行う。壺の可能性もある。179は口縁部が上外方に短く外反する個体である。調整は、口縁部が横ナデを行うほか、杯部は横位ミガキである。口径26.7cm。吉備地域からの搬入品の可能性が考えられる。180～187は柱状部～裾部の細片。この内180～183は柱状部が中実の個体である。いずれも外面に縦位ミガキを施す。184～187は柱状部が中空の個体である。この内187は、柱状部の内側を棒状の道具で削り貫くことによって中空を形成しており、他の3者と成形方法が異なる。調整はいずれも縦位ミガキである。184～186の柱状部内面には絞り痕を認める。

188は土製品である。一部が欠損するが、概ね平面が円形を呈する円盤で、径は8.2cmを測る。

#### 第8・9層出土遺物(189～196)

189～196は繩文土器の口縁端部～口縁部の細片である。189は壺。小さく外反する口縁端部外面に、断面三角形の突帯を貼り付けるほか、突帯の上面にキザミ目を加えた個体である。口径は12.7cmを測る。船橋式に位置付けられる。190～192は深鉢である。いずれも口縁端部外面に断面三角形の突帯を巡らす個体で、突帯上面にはキザミ目を施す。この内190の口径は23.3cmを測る。



第95図 3区 第10・11層出土遺物実測図

193は肩部付近の細片の可能性がある。断面形状が低い三角形を呈する突帯上面にキザミ目を加える個体である。調整は内面がナデ、外面は不明瞭であるが突帯より下位には横位ミガキを認められる。これらの個体群は長原式に帰属すると考えられる。

194・195は弥生土器の壺である。194は大きく開いた短い口縁部を有する個体である。口縁端部は丸く終息させる。調整は口縁部が横ナデのほか、肩部外面が縦位ミガキ、内面がナデである。口径は11.3cmを測る。195は大きく外反する口縁部と、口縁端部にはば直立するにぶい平坦面を有する個体である。調整はナデが主体を成す。口径は15.1cmである。

196・197は石製品。196はつまみ状の小さな突起を有する個体で、匙の可能性が考えられる。長さ3.8cm、厚さ0.6cm、最大幅2.4cm、最少幅1.3cmを測る。197は断面三角形を呈する砥石の細片である。擂面を3面確認した。

# 第7章 久宝寺遺跡第77次調査出土の朱の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 第1節 はじめに

今回の分析調査では、久宝寺遺跡第77次調査区の弥生時代前期層準で検出された赤色顔料とみられる赤色物質の材質調査を目的とし、X線回折法による結晶構造の特徴から鑑定する。

## 第2節 試料

試料は、3区東部北壁地点で確認された赤色物質1点である。試料は赤色物質を含む不搅乱資料として採取されている。赤色物質は泥層中に面的に散在する状態で分布しており、状態の良い部分から分析用試料を採取し、測定に供した。

## 第3節 分析方法

空気乾燥した供試試料をメノウ乳鉢で磨碎した後、無反射試料板に充填し、以下の条件で測定を実施した。なお、物質の同定解析にあたっては、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit : 1°
Target : Cu (K $\alpha$ )	Scattering Slit : 1°
Monochromator : Graphite湾曲	Receiving Slit : 0.3mm
Voltage : 40KV	Scanning Speed : 2° /min
Current : 40mA	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 2~45°

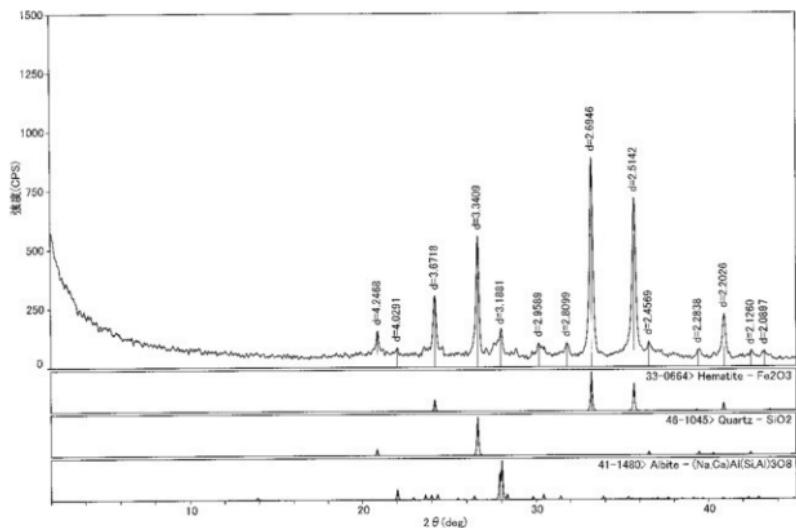
## 第4節 結果

X線回折図を第96図に示す。図中上段に試料のX線回折図、下段に検出された鉱物の回折パターンを掲げている。なお、文中で( )内に示したものは、X線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については、X線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを包括する大分類の鉱物名を使用している。

試験結果では、2.69Å、2.51Å、3.67Åなどにおいて赤鉄鉱(hematite)に基づく尖度の高い明瞭な回折を認めたほか、石英(quartz)、斜長石(曹長石:albite)が検出された。

## 第5節 考察

赤色を呈する代表的な顔料鉱物にはベンガラ(赤鉄鉱:hematite[ $\alpha$ -Fe2O3])のほか、水銀朱(辰砂:cinnabar[HgS])、鉛丹(鉛丹:minium[Pb3O4])などがある。今回の赤色物質は、上記の調査結果から赤鉄鉱を確認した。水銀朱など他の顔料鉱物は認められていないことより、



第96図 3区 東部北壁赤色顔料のX線回析図

3区東部の弥生時代前期層準で検出された赤色物質は「狹義のベンガラ」と判断される。

ところで、ベンガラには天然の赤鉄鉱を利用する場合のほか、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合がある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造をなすものと、非パイプ状（塊状、球状、不定形など）構造のものとがあり、前者については沼沢地などにおいて鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄が出発物質であることが判明している（岡田, 1997; 織幡・沢田, 1997）。このような背景から、ベンガラ材料の産出地は無数に存在することとなり、材料産出地を言及することは難しいが、一遺跡において同一時期に使用されるベンガラはパイプ状もしくは非パイプ状のどちらかが支配的な傾向にある（成瀬, 1998）。今後、確認されたベンガラのパイプ状構造の有無を把握しておくことも有益であろう。

#### (引用文献)

- ・岡田 文男1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』, 38-39】
- ・織幡 順子・沢田 正昭1997「酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』, 76-77】
- ・成瀬 正和1998「縄文時代の赤色顔料Ⅰ」『考古学ジャーナル』, 438, 10-14】

## 第8章　まとめ

今回の調査では、各調査区で縄文時代晚期～近世にかけての遺構・遺物が検出された。以下、同敷地内で行われた(財)大阪府文化財センター(以下、府センターと呼称)による調査成果などを踏まえながら、各時代について概説を行う。

### 縄文時代晚期

1区第11面で検出した遺構群が当該期に比定される。柱穴を多数検出したことから、1区周辺が当該期の居住域に位置した可能性が高くなった。柱穴群は、わずかに円弧を描くような配列(柱列①: SP1111～1114 柱列②: SP1116～1121)が想定できることから、円形竪穴住居などの施設が存在したことが推測される。

### 弥生時代前期

3区第9面が当該期に相当する。竪穴住居と推測されるS1901をはじめ、建物を構成した可能性が高い柱穴も多数検出するなどの成果を得た。1区の北に隣接する地点では、当調査研究会による第23次調査が行われ、前期新段階に比定される居住域を構成した可能性の高い遺構群の検出を見た。今回の成果は、同居住域の南への広がりを示唆するものとして注目される。なお、南側で行われた府センターの調査では、同じような性格の遺構は検出されていない。この居住域は、本区より南には展開しない可能性が高くなつた。

### 弥生時代中期

3区8面がこの時期に帰属するものと考えられる。溝を5条検出したのみであり、遺構の性格などは不明である。遺物量が極めて少ないとや、南側で行われた府センターの調査では、水田などが検出されたことから、生産域に伴う遺構群の可能性が高い。

### 弥生時代後期

1区第8・9面や、2区第11面、3区第6面がこの時期に対応する。この内1区第8・9面では河川や土坑、溝が検出されたが、いずれも居住域に伴うものとは考えられず、この付近における当該期の様相は不明である。2区第11面では、意図的に置いたと考えられる壺が1個体(土器集積1101)出土した。壺はほぼ完形に復元できたことや、周辺においてこれ以外の遺構・遺物が検出されなかったことなどから、この方面が居住域として利用された様子を何うことはできない。なお土器集積1101は、河川(NR1101)の北肩付近で検出されたことから、河川祭祀に伴う遺物であった可能性も考えられ、注目される。一方、3区第6面では、刃り抜き材を用いた井戸(SE601)のほか、土器集積(土器集積601)などが検出されたことから、この方面は当該期の居住域に位置した可能性が高くなつた。SE601からは廃絶時に投棄されたことが考えられる土器群の出土を見た。当該期の井戸の廃絶に伴う祭祀の様相を示唆するものとして特筆される。

### 古墳時代初頭

1区第6・7面や2区第9・10面がこの時期に比定される。1区ではSD601やSD701が検出された。この内SD701は、溝の両側に堤状の高まりを備えるもので、構造の特異性が注目される。一方SD601については、洪水による土砂が流れ込んだ様相が見受けられたほか、さらにはSD601を埋没させ、SD601を超えて土砂を吐き出した様子が明らかになった。この結果、本区の北西部付近は微高地が形成され、この微高地が次の時代の墓域群の基盤層になるほか、墳丘盛土の母材にも利用されることが判明した。2区第9・10面では、庄内式土器の壺や高杯が極少量出土した。土坑や溝なども確認されたが、居住域に関連するものとは言い難く、遺構群の性格は不明である。

### 古墳時代前期

1区第5面が当該期に相当する。周溝墓501を検出した。周溝墓501は、北隣で実施された府センターの調査における44号墳の南西隅にある。44号墳は、東に前方部を、西に後方部を有する前方後円墳である。基底面における規模は、全長約33.5m、後方部長約19.5m、主軸で反転復元した後方部幅は16.0～18.0m、くびれ部幅約9.0m、前方部長約14.0m、前方部幅約12.5mを測



※『久宝寺遺跡・東半地区発掘調査報告書』本文編 (附) 大阪府文化財センター調査報告書 第156集  
図436 44号墳 平面を引く。再トレス後一部加筆した。

第97図 1区 周溝墓501・44号墳合成平面図 (S=1/400)

ることが判明している。周溝墓501は、44号墳の後方部南西隅に相当する。今回の調査では、盛土のほか西側と南側の周溝も確認できた。周溝の外側の肩は、調査区内では検出されなかつことから、さらに南や西に広がることは確実である。周溝墓に伴う遺物としては、南側周溝から出土した土器群(1区 15~28)がある。その形態的特徴から帰属時期を割り出すことは困難を極めたが、概ね庄内式期新相~布留式期古相が想定される。

### 古墳時代中期以降

古墳時代中期以降については、各調査区ともに生産関連遺構が多く検出された。ほとんどが水田耕作に関連するものであるが、2区第5面では古墳時代後期~古代に比定される畝溝を検出したことから、当該期の2区周辺は畑として利用されていた可能性が高くなった。また、2区第4面では、古代に比定される生産関連の溝とともに多数の柱穴が検出された。柱穴群は、一直線上に並ぶものも存在することから、建物などの施設が存在した可能性も考えられる。周辺で調査が行われる際には当該期の遺構群の存在に注意が必要であろう。

### 参考文献

- ・西村 歩・奥村茂輝2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI』(財)大阪府文化財センター調査報告書第118集』(財)大阪府文化財センター
- ・原田昌則・二宮満夫2006「I 久宝寺遺跡(第23次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・荒川和哉2006「II 久宝寺遺跡(第30次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森屋美佐子・龜井 聰・奥村茂輝2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII』(財)大阪府文化財センター

# 図 版



1区 周辺状況(西から)

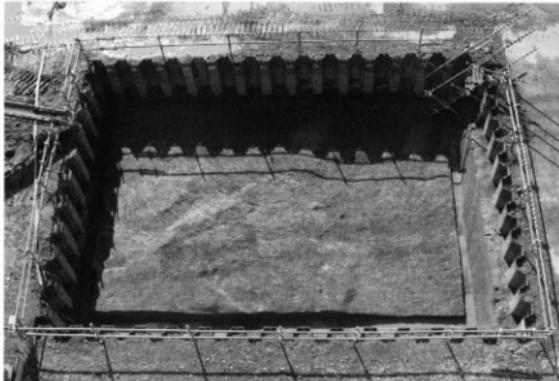


1区 周辺状況(南西から)



1区 第1面全景(北から)

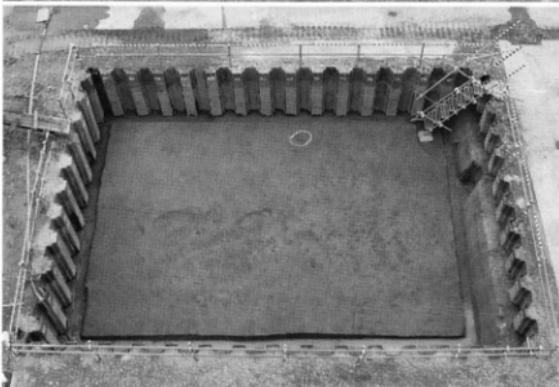
図版 2  
1区  
第2~4面



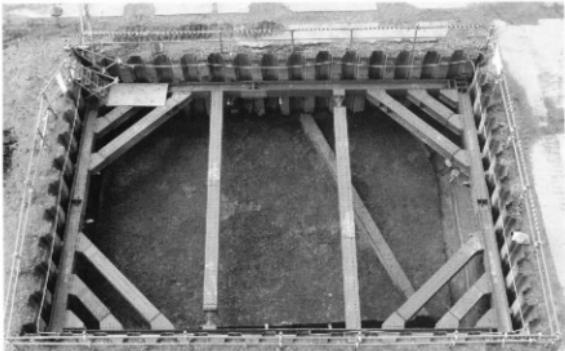
1区 第2面全景(北から)



1区 第3面全景(北から)



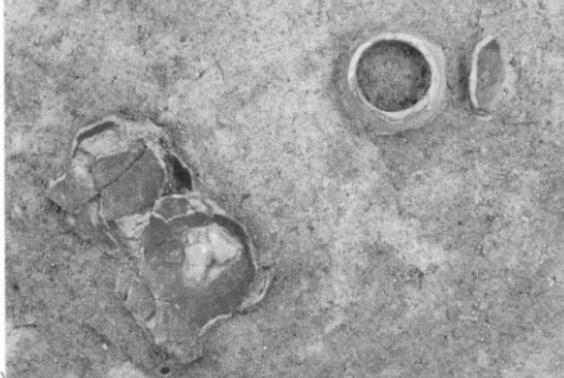
1区 第4面全景(北から)



1区 第5面全景(北から)



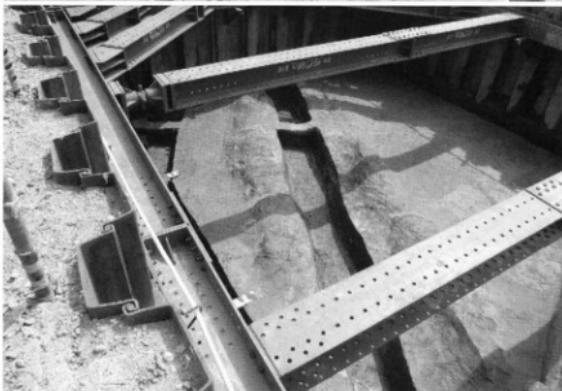
1区 周溝墓501断面(南東から)



1区 周溝墓501南周溝内  
土器(17)出土状況  
(南から)



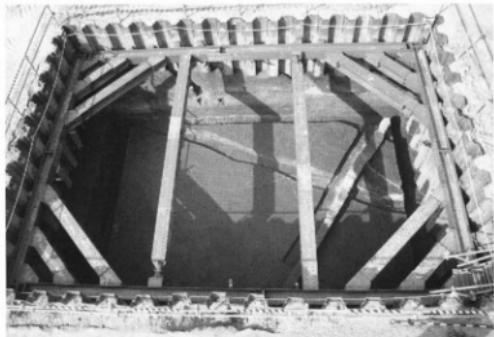
1区 第6・7面全景(東から)



1区 SD601・701(北西から)



1区 SD701断面(北西から)



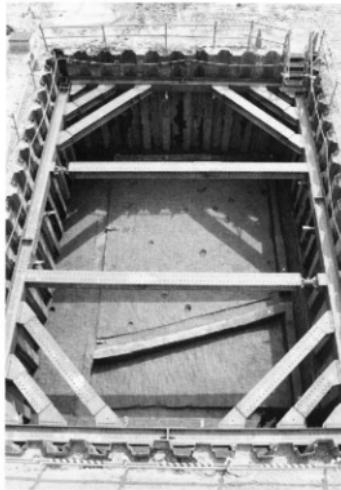
1区 第8面全景(南から)



1区 SK901・SD901(南西から)



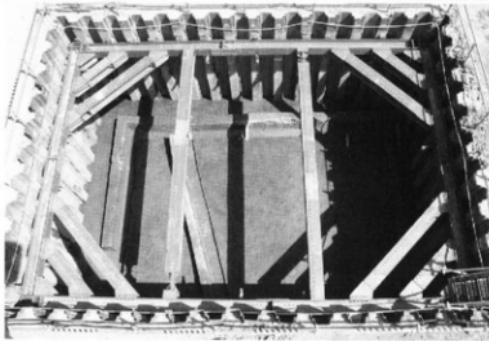
1区 第10面全景(東から)



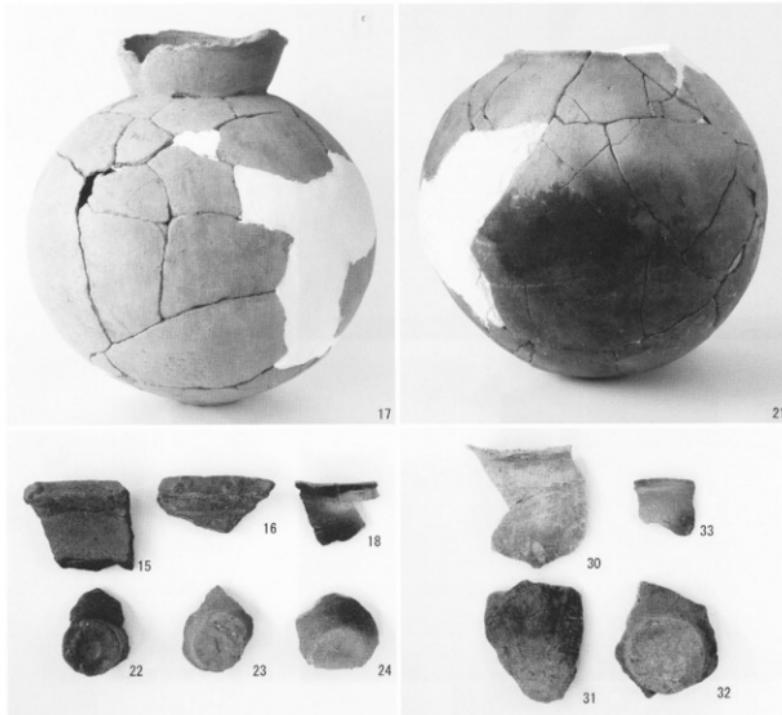
1区 第11面全景(東から)



1区 第11面柱穴群検出状況(北から)



1区 第12面全景(南から)



周溝墓501 周溝内：17・21・15~24 盛土内：30~33



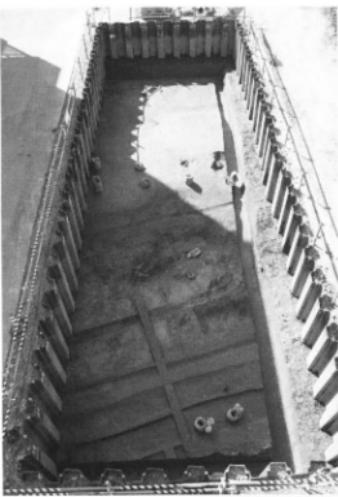
2区 周辺状況(北東から)



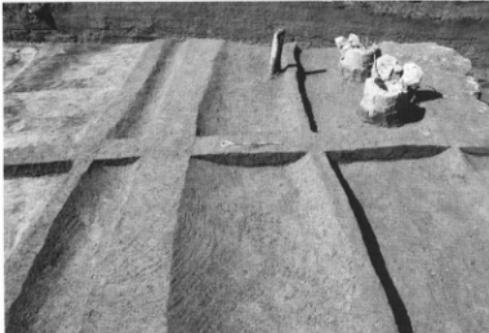
2区 周辺状況(北西から)



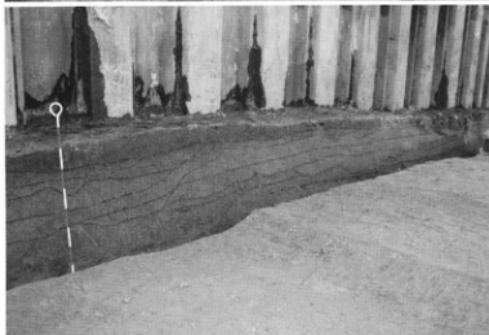
2区 第1面全景(南から)



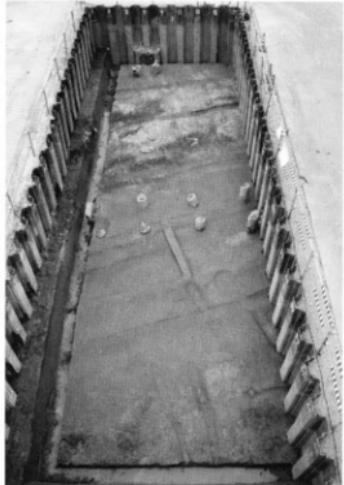
2区 第2面全景(北から)



2区 SD201~203(東から)



2区 島畑201断面(南東から)



2区 第3面全景(南から)



2区 第3面遺構群検出状況(北東から)



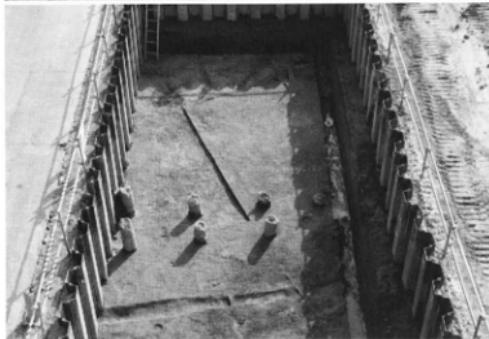
2区 SD303(東から)



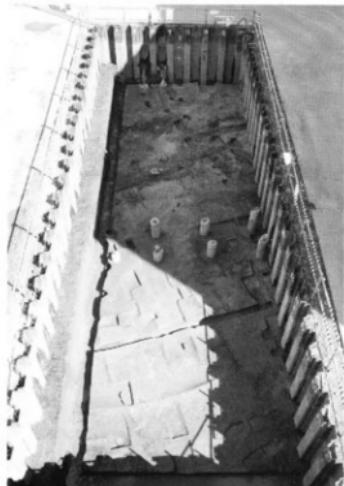
2区 第4面全景(北から)



2区 第4面柱穴群検出状況(東から)



2区 S O 401(北から)



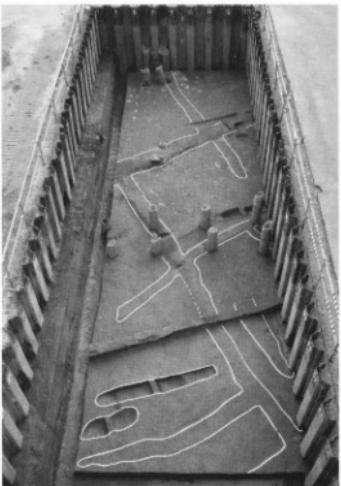
2区 第5面全景(南から)



2区 第5面鉱溝群検出状況(東から)



2区 SD514断面(南から)



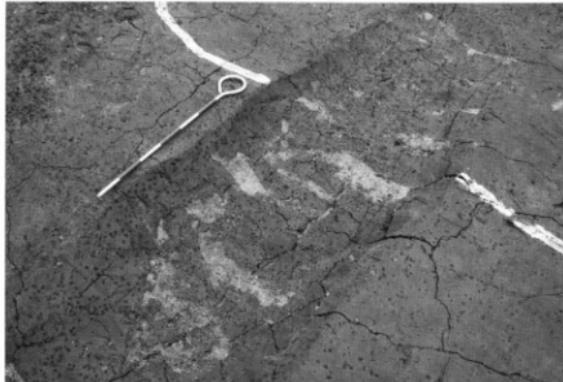
2区 第6面全景(南から)



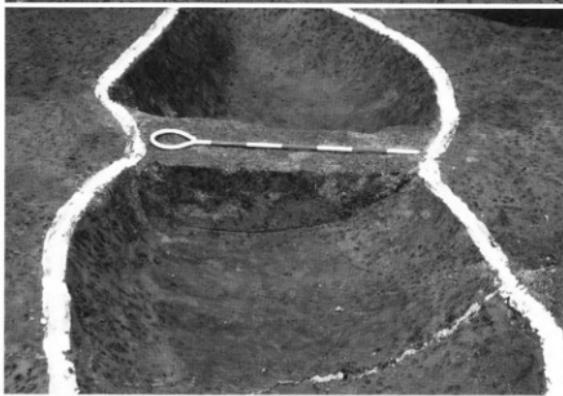
2区 第6面遺構群検出状況(北東から)



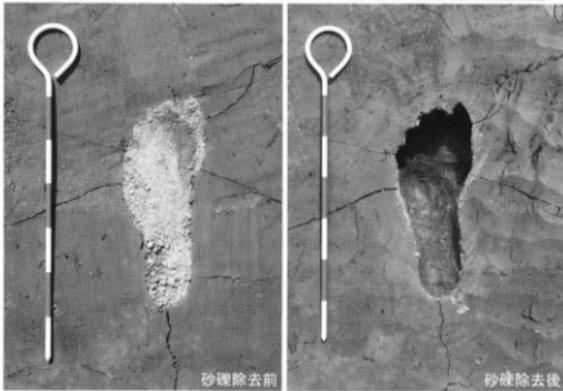
2区 畦畔601断面(北東から)



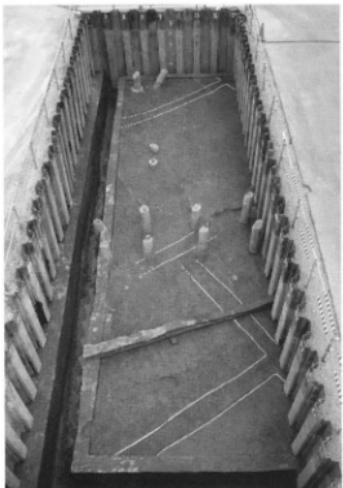
2区 SD 601  
底面工具痕残存状況(西から)



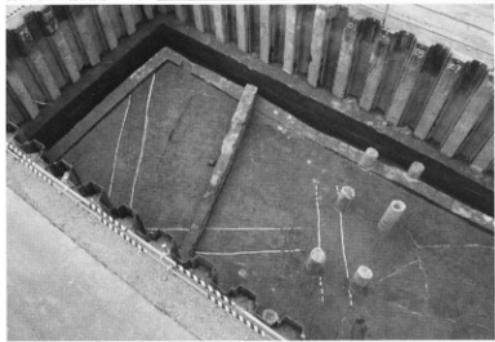
2区 SD 603断面(東から)



2区 第6面足跡検出状況  
(北から)



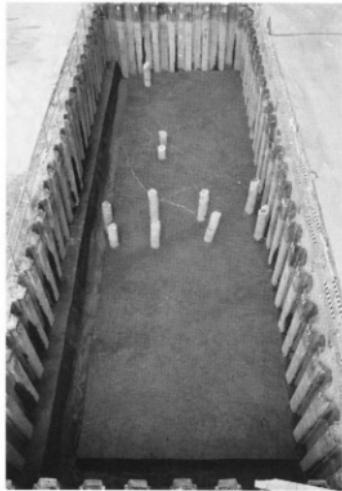
2区 第7面全景(南から)



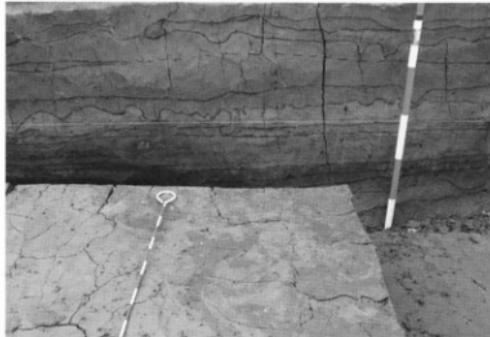
2区 第7面遺構群検出状況(北東から)



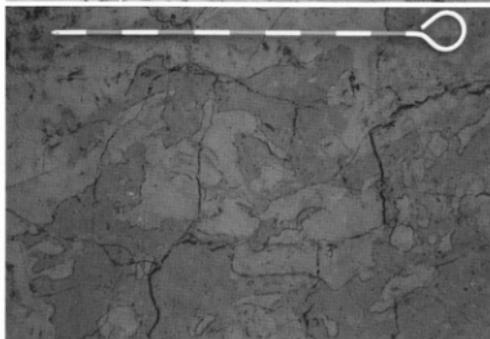
2区 駿河705断面(北東から)



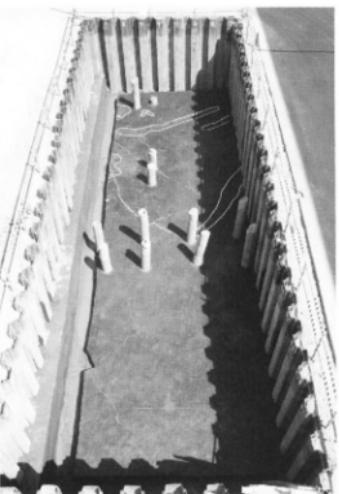
2区 第8面全景(南から)



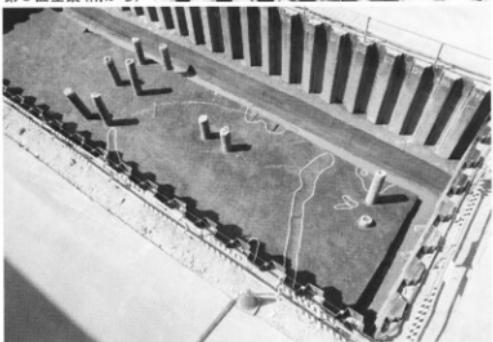
2区 第8面地震による変形構造(東から)



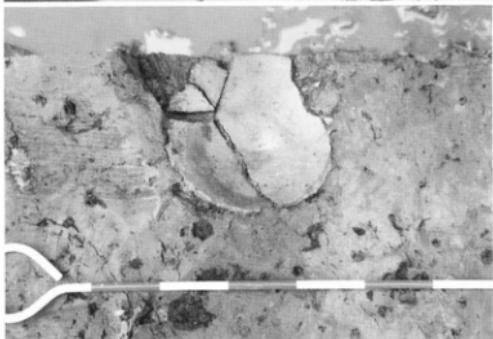
2区 第8面地震による変形構造(北から)



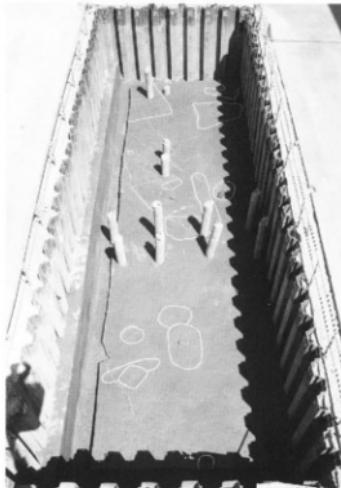
2区 第9面全景(南から)



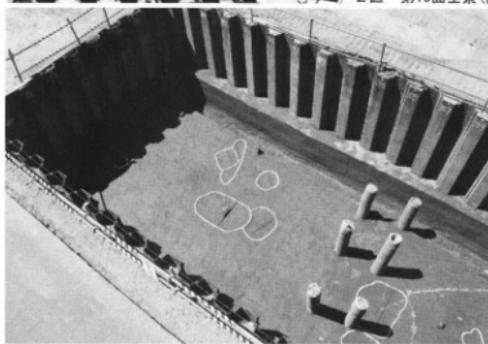
2区 第9面遺構群検出状況(北東から)



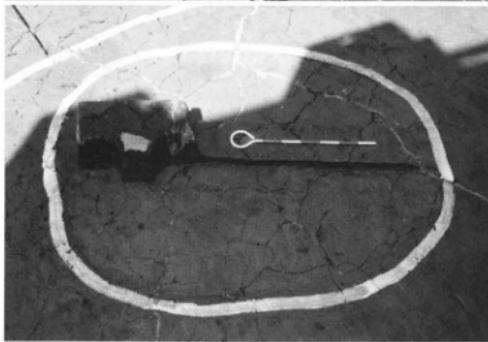
2区 第9面基盤層(第15層)内  
土器(53)出土状況(東から)



2区 第10面全景(南から)

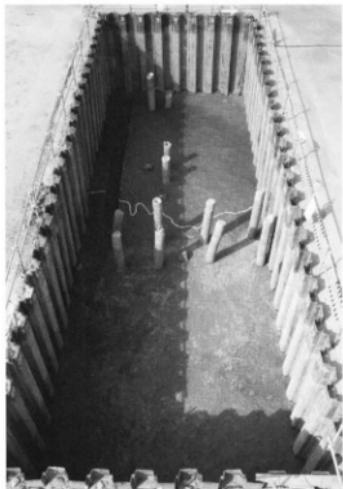


2区 第10面造構群挨出状況(北東から)

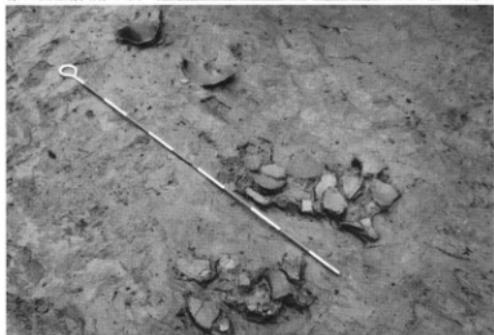


2区 SK1004(南東から)

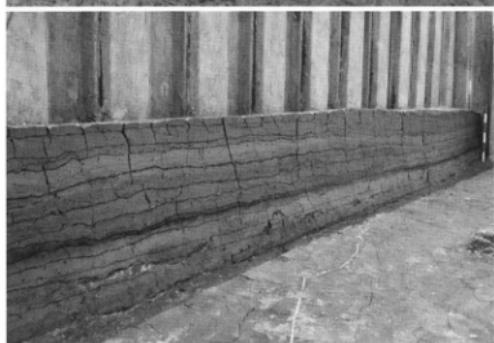
図版 19  
2区 第11面・地層堆積状況



2区 第11面全景(南から)

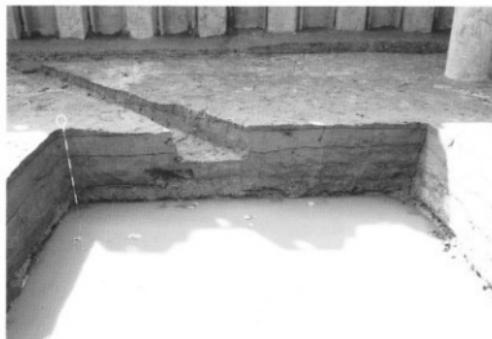


2区 土器集積1101(55)検出状況  
(北東から)



2区 地層堆積状況 第12~21層  
(西壁: 南東から)

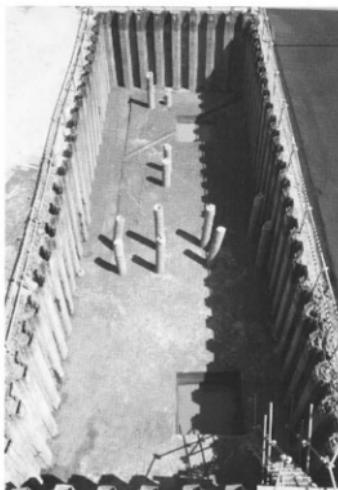
図版20  
2区  
地層堆積状況・調査完了状況



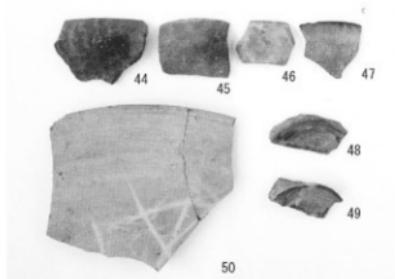
2区 地層堆積状況 第21・23層  
(北側下層確認ピット：東から)



2区 地層堆積状況 第19～27層  
(南側下層確認ピット：北西から)



2区 調査完了状況(南から)



51



53



54



55

鳥煙201 : 44 SD303 : 45~49  
SD404 : 50 第10面 : 51・53・54  
土器集積1101 : 55

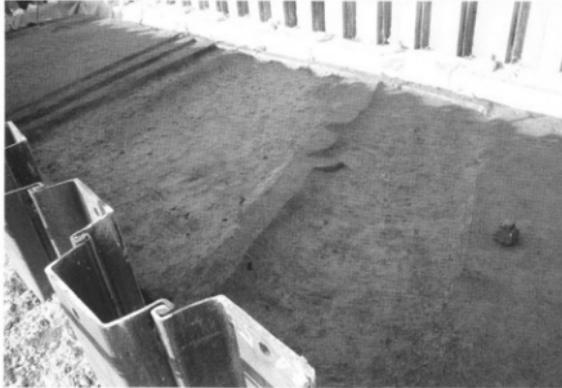
図版22  
3区 周辺状況・第1・2面



3区 周辺状況(西から)



3区 第1面全景(東から)



3区 第2面全景(南東から)



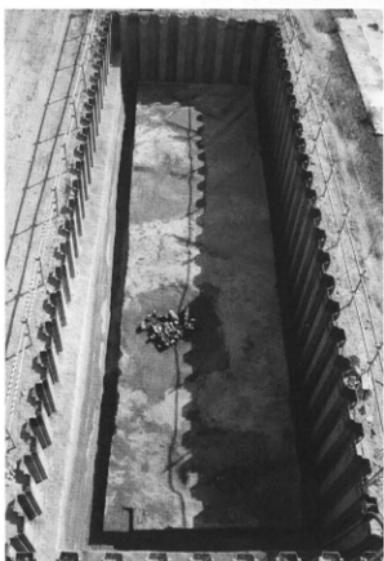
3区 第3面全景(東から)



3区 第4面全景(東から)



3区 第5面全景(東から)



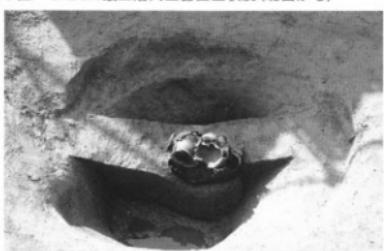
3区 第6面全景(西から)



3区 SE 601最上層内土器出土状況(北西から)



3区 SE 601断面(北西から)



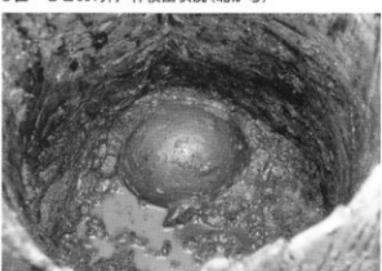
3区 SE 601井戸枠内最上位土器出土状況(北から)



3区 SE 601井戸枠内土器出土状況(北から)



3区 SE 601井戸枠内土器出土状況(北から)



3区 SE 601井戸枠内最下層土器(105)出土状況(北から)



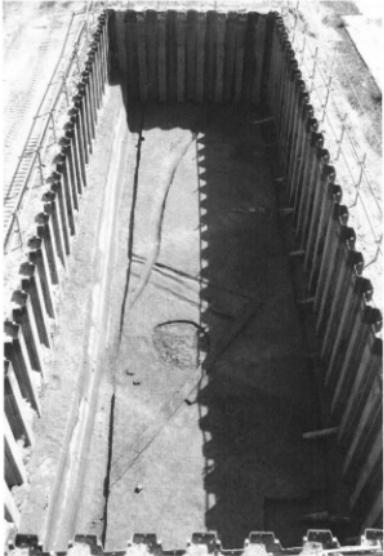
3区 SE 601調査状況(南東から)



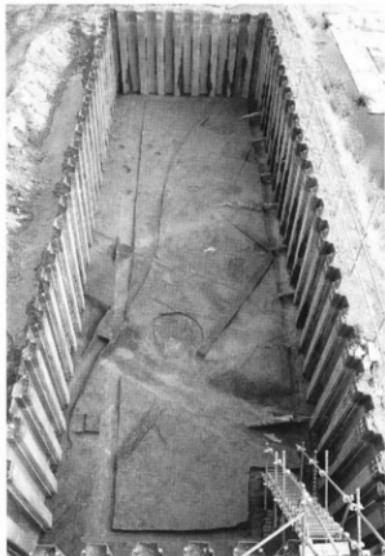
3区 土器集積601(東から)



3区 第7面全景(西から)



3区 第8面全景(西から)



3区 第9面全景(西から)



3区 第9面遺構群検出状況(東から)



3区 S I 901(西から)



3区 S K 901(南から)



3区 S K 901埋土状況(南から)



3区 S D901(南西から)

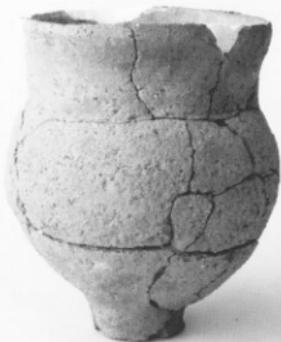


3区 第9面柱穴群検出状況  
(東から)



3区 地層堆積状況  
第5~12層  
(西・北壁: 南東から)

図版 28  
3区 第6面出土遺物



67



68



69



70



73



76

S E 601 ①層内

図版 29  
3区  
第6面出土遺物



79



80



81



82



84



85

S E 601 ①層内

図版 30  
3区 第6面出土遺物



86



87



88



91



90



92

図版 31  
3区  
第6面出土遺物



93



94



96



97



99



98

S E 601 ①層内：93・94・96～98 ②層内：99

図版 32  
3区 第6面出土遺物



図版 33  
3区  
第6・8面出土遺物



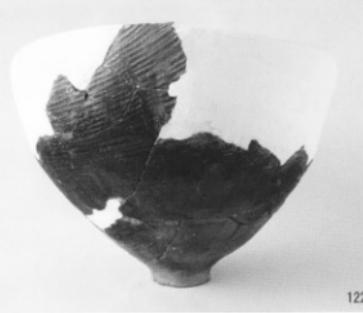
116



120



121



122



131



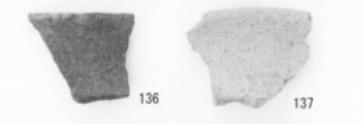
132

133



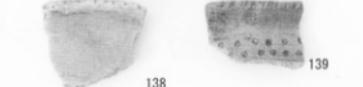
134

135



136

137



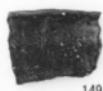
138

139

土器集積601 : 116・120~122 SD801 : 131  
SD802 : 132~139

図版  
34

3区  
第9面・地層内出土遺物



145

146

149



156



189



190



191



192



193



164



188



196

S I 901 : 145 S K901 : 146 S P912 : 149 第6層内 : 156 · 164 · 188 第8 · 9層内 : 189 ~ 193 · 196

# 報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしふんかざいちょうさけんきゅうかいほうく140
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告140
調査名	久宝寺遺跡第77次調査 －寝屋川流域下水道窓水みらいセンター 防火水槽外築造工事(H22-1)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	140
編著者名	樋口 猛 パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
久宝寺遺跡 (第77次調査)	大阪府八尾市龍華町2丁目地内	27212	23	34度37分22秒	135度34分47秒	2010.12.01 ～ 2011.04.19	374.0	寝屋川流域 下水道事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第77次調査)	集落	縄文時代晩期～近世	縄文時代晩期～柱穴 弥生時代前期～墓穴住居・土坑・溝・柱穴 弥生時代後期～井戸・土坑・溝・土器集落 古墳時代初期～土坑・溝 古墳時代前期～周溝墓・土坑 古墳時代中～後期～土坑・溝・水田・吐呻 古代～土坑・溝・柱穴・落ち込み・転溝 中世～溝 近世～溝・鳥糞・水田	縄文土器 弥生土器 古式土器 土師器 須恵器 陶磁器 瓦 木製品 石製品 金属製品	弥生時代前期や後 期の居住域に伴う 遺構群を検出したた ほか、古墳時代前 期の前方後方墳の一 部を検出した。

要約	縄文時代晩期については、居住域を構成した可能性が考えられる柱穴群を検出した。弥生時代前期では、豊穴住居などからなる居住域の一部を検出した。弥生時代後期では、井戸や土坑、土器集落を検出し、当該期の居住域の一端を垣間見る成果を得た。古墳時代前期に関しては、入阪府文化財センターが検出した前方後方墳(44分墳)の南側への広がりを確認した。古墳時代中期以降は、概ね生産域として土地利用されていたことが明らかになった。
----	--

(財)八尾市文化財調査研究会報告140

## 久宝寺遺跡

第77次調査

-寝屋川流域下水道整備水みらいセンター  
防火水槽外堀造工事(II22-1)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

発行 半成24年3月  
編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2  
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 鑑近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>  
図版 マットアート <110Kg>

